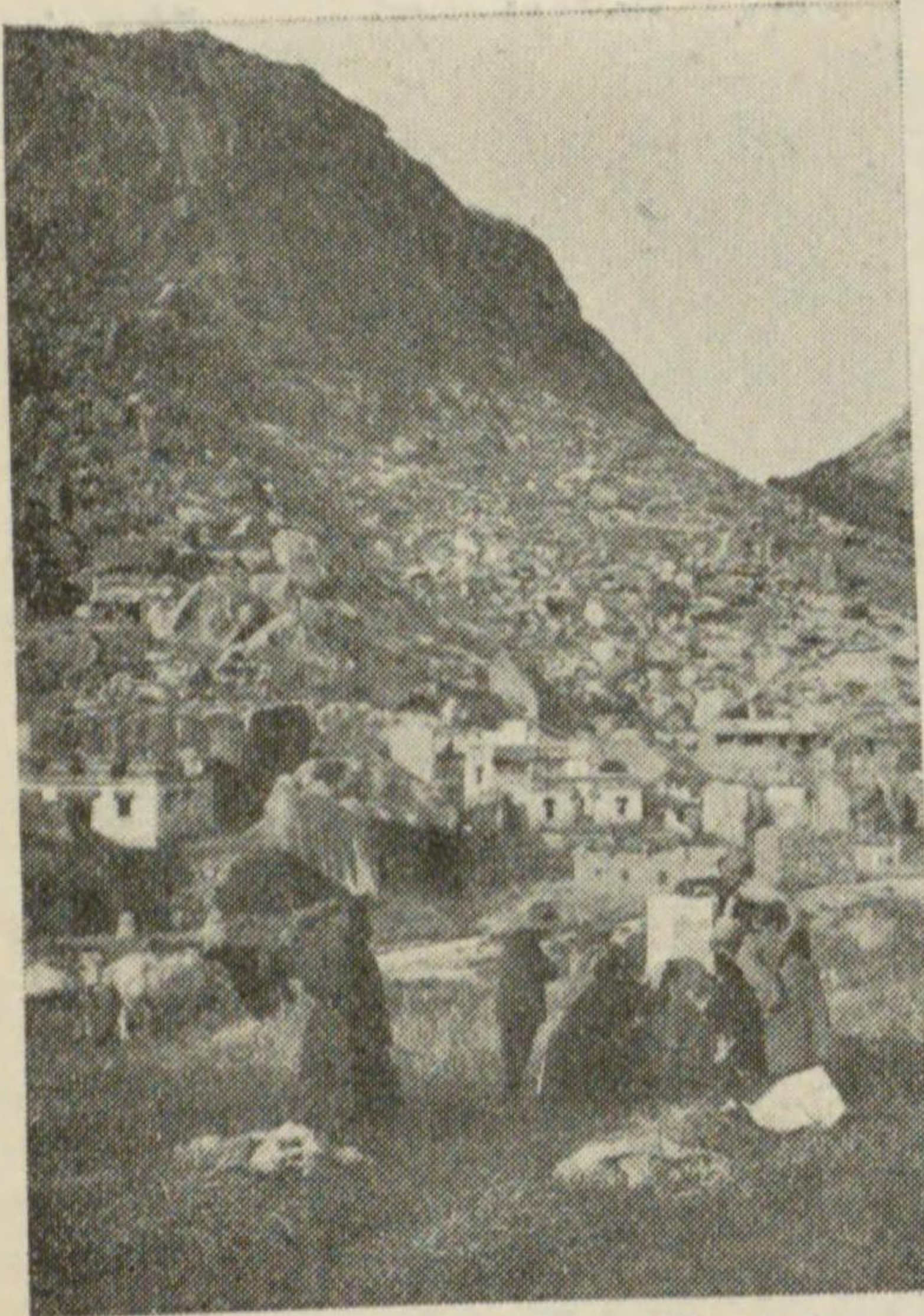


如くしたものを発見したので、此處を調査した。その下に石の柱・臺石等があつて、當時のものであることが知られる。

それから仁王のある所に出て、岩門に入り大日如來・羅漢の像を撮影した。この羅漢は今まで二つ発見してゐたのであるが、今日はその傍に一個発見して、都合三個となつた。一個のものは手に投石を握つてゐる。この投石とは蒙古人の喇嘛が云つたのである。尙一個は何も持つて居らぬ坐像で、残りの一個は小犬を抱へてゐる。この小犬を抱へてゐるのは面白い。三つ共袈裟を掛けてゐる。

更に昨日の奥の院の本堂善福寺に到り、涅槃像を三好氏はマグネシウムで撮つた。この外この所にある彫刻物を撮影した。涅槃像を撮る時、同行の相良氏は「これは寺で許すまい」と云つたが、平氣で撮らしてくれて幸であつた。今日はよく明りを照らして見ると、以上は遼代の特色を有するものであつた。喇嘛廟設立以後これ等の像を勝手に彩色し、或は喇嘛佛を配して俗惡となつたものであるが、尙よくよくこれを見ると遼代の佛がなほ偲ばれる。

此處を終り、午後二時頃私共一行は山上三支里許りのハバチル廟に行くことにした。先づ此處を出てから山路の間を歩いたが、この間人家は無く、淋しい草地である。此處に一つの馬が草を食つてゐるのを見た。これは一喇嘛の話によると、家が無くなつて放し飼ひにしてゐるものであると云ふ。このあたりは今年の十一月に、三十人許りの馬賊が来て、人家を犯し、廟を焼いた。ハバチル廟は焼かれて、喇嘛僧が一人殺されたとの話である。



(影撮者著) 所るとを本拓で前廟ルチバハ

このハバチル廟に来る途中、矢張り天然の岩を掘抜き、中を石室としたのを見た。入つて見ると奥壁の所に三段の階段が設けられ、その上に何等かの像が設けられてゐたらしいが、打碎かれて今見ることは出来ない。左右の壁には掘込んだ棚が出来て居つて、右は高坏の様な形、左は

十字を彫つてゐる。これは先達ボロ ホトンで見た十字に似てゐるもので、ネストリアン教に關係あるものであらう。蒙古人は此處の家をチヨロン ゲルと呼んでゐる。

此處を出て花崗岩の山の間を行つた。このあたりは花崗岩質の山景を呈してゐる。廟の所へ來たが、此處に二つの廟があつて、廟と山景は東蒙古の耶馬溪の感がする。遼の盛時は此處に寺院を設け、遼の皇都から屢々此處に遊びに來たのである。この寺は昨年焼かれてがらんどろになり、建物ばかり残つてゐる。しかし今云つた如く此處は景色といひ廟といひ調和して面白い。

廟の前に陀羅尼幢が一基立つてゐる。この碑文の中に、上京弘福寺沙門特顯、進士田渥に書を習ひ云々とある。この弘福寺といふのは今手許にある『遼史紀事本末』太宗の條に天贊十年冬十月宏福寺に幸したとあるこの寺であらうか。この碑文の文面で進士田渥は書を能くしたこと、沙門特顯は字を習つたことがわかる。僅かの記事であるが、遼代の文化を知ることが出来る大切なものである。

私共は以上の陀羅尼幢を拓本にとることになつたが、風が強くとれにくい。

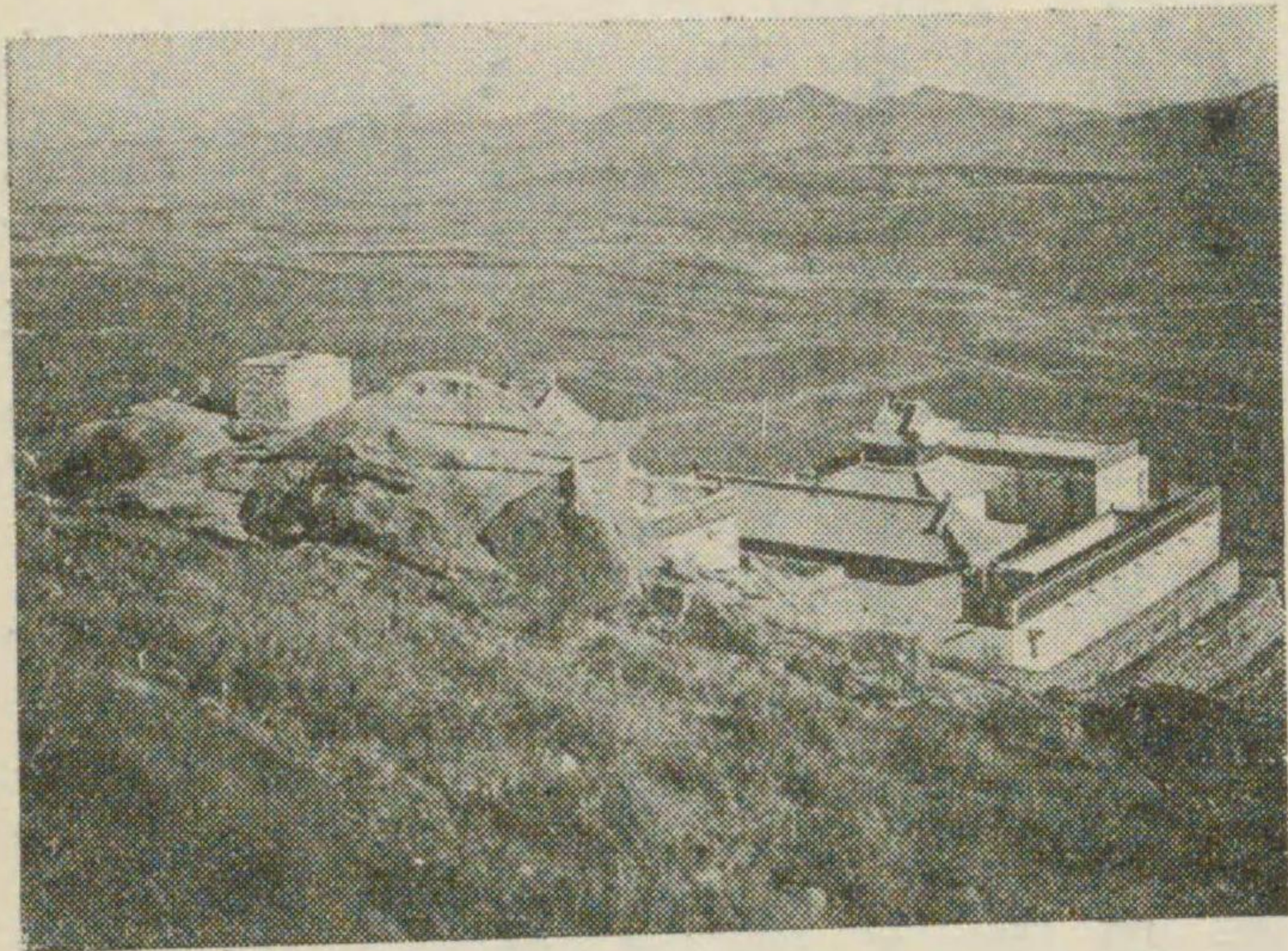
そこで久自總がかりで帶紐を拓本の紙に巻付け、一つ打つては一つとつた。朔北で拓本をとることは困難な事業の一つである。寺院は荒れ果てて人は去り、唯獨り遼代の陀羅尼幢が、この耶馬溪の如き廟の前に淋しく残つてゐる

のは感慨無量の様に思はれる。

終つて一行は風に寒く吹かれつゝ、もと來た道を辿つて、喇嘛の宿に歸つた。今夜も火無き部屋に寒く寝んだ。

ウブルグイブルジャウ

十一月八日 今日此處より四支里程のウブルグイブルジャウに行くことにした。道は岩石の山路を傳ひ、峠の所に達し、それから下つてウブルグイブルジャウとなるのである。この峠の所から



(影撮者著) 景全のウヤジルアイグルブウ

中腹の所へ下つて行く下に一つの喇嘛廟がある。それに接して又一つ喇嘛廟がある。私共はこの所に降りて来た。

これはウブルグイブルジャウである。私共は早く此處に到着したが、一行は遅れて来た。先づ同廟の後の岩の上に立てられてゐる陀羅尼幢にかゝつた。この陀羅尼幢は八角であつて、臺座の上に立つてゐる。この臺座は四角であつて、面白い彫刻が施されてゐる。

この佛幢の置かれてゐる位置は、今云つた如く岩の上であつて、この上にこの佛幢は昔からそのまゝに存在してゐるのである。さうしてこの岩上佛幢の在る周圍に穴が六つあけられてゐる。これは多分これに柱を立て、六角堂の如きものを設け、その中に陀羅尼幢が安置せられてゐたものであらう。此處で私共が調査してゐると、一行の人々が一時間程して到着した。そこで撮影や拓本を始めた。

この陀羅尼幢は陀羅尼とともに年號が刻されてゐるが、この年號は遼の乾統九年、西曆一千百九年で、遼の天祥帝の時である。北宋では徽宗皇帝の大觀三年、日本では天仁二年に相當する。この佛幢の臺石の四角面には、各々天人・迦陵頻迦・鳳凰・龍等を刻してゐる。

これ等の圖樣・年代等は我が日本の藤原末であつて、かの陸中平泉の中尊寺にあるそれとよく似てゐる。乾統九年は今より八百二十三年前に屬する。

ここで拓本を盛んにした。位置は山の上で、下は平野であるから、風が非常に強く、拓本をとるのに困難した。それにも拘はらず、一同努力して目的を達した。三好氏は寫眞機を立てたが、風に吹かれて寫眞機の顛覆せんとしたこともあつた。

それから一行は喇嘛廟の所に下りて行つたが、この喇嘛廟前に佛幢があつた。これは數個の佛幢が一つに集められて重ねられてゐるものである。

佛幢を注意すると、これは各々相異なつた三種類のものが集められたのである。そしてその一つは佛と弟子のやうな人物を刻してゐるもので、八角形である。第二は尊勝陀羅尼幢で、八角である。第三は臺座のみ残り、その上がないものである。臺座は四角であつて各面に佛塔を禮拜する所、笛を吹いて舞へるもの、珠を中心として左右に獅子を配してゐるもの、牡丹の花形模様等がある。以上の三つが、相重つてゐるのである。

第一種の佛・弟子等を刻してゐるのは、當時の藝術品として面白く、又第三種のもものは

當時の圖様・模様等に於て研究の價值があるものである。第二種のもは、八角で正面に佛頂尊勝陀羅尼幢と刻して、下に蓮座を置き、その上に瓔珞を配してゐる。あとの七つの面には、その中三つの面に、報身佛・應身佛・化身佛を置き、その四つは東西南北の佛を配してゐる。

以上の佛幢は、當時の契丹人の信仰として、最も面白い材料である。これを調査し、拓本の段になつたが、風が吹き外では出來ず、止むなく三個のそれを後の喇嘛廟内に擔ぎ込み僅かに拓本した。

此處にある喇嘛廟は大變立派な喇嘛廟である。廟は高い岩山に存在し、南東の方は打開いた平野で、この平野は遠くボロ・ポトンの方面に及んでゐる。この位置は丁度京都に於ける叡山の位置であつて、大變眺め佳く、遼の皇都の鎮めの場所であるといふ感が起る。

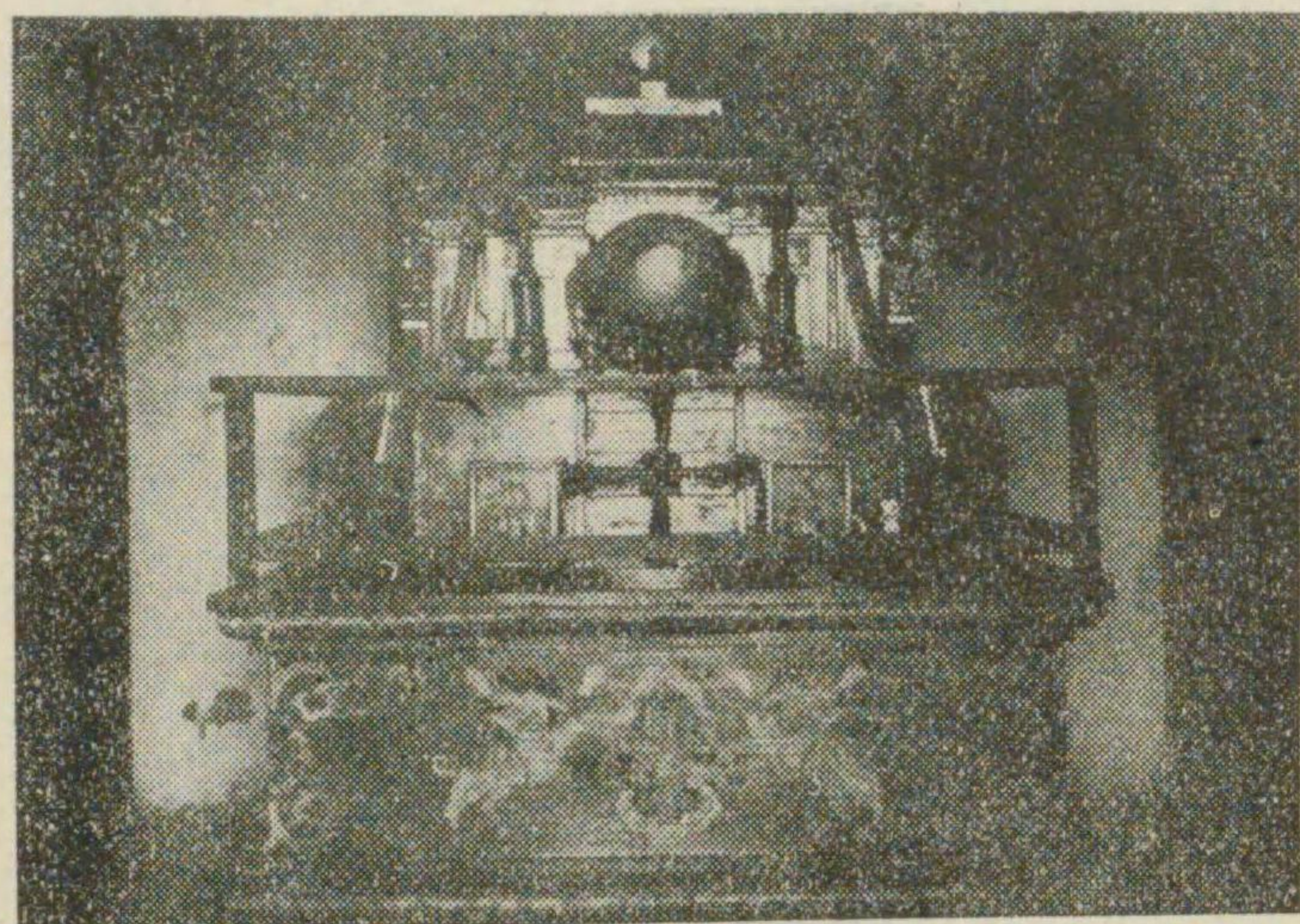
喇嘛廟のある所の岩も、中が切開かれて空洞になつてゐる。この空洞になつてゐる所も遼時代に何か寺院に利用したものでは無からうか。寺を隈なく見、寺を下り喇嘛の家で牛糞を集め、一同は圍爐裡の所に來て火にあたつた。此處で色々なものを見たりなどして、此

處を一同出て、もと來た峠に上り岩山を傳つて喇嘛の家に歸つた。

一昨日・昨日・本日の三日間の調査は、ボロ・ポトンに對する山上の佛跡の調査であつた。

岩山は景色佳く、この中に遼時代の寺院が三ヶ所残つてゐるのは、何れも密教に關係ある寺院の様に思はれる。

是等の山上にある寺院は、遼時代に於て丁度日本の京都と比叡山の如く、遼の皇都の鎮護の場所として佛刹が設けられたのである。春の末から夏秋の初めにかけて、遼の宮中の人々其他がこの佛刹に參詣を兼ねて遊山に來たことと思ふ。遼の皇都の研究をするには、又宜しくアルグイブルジャウ・ウルグイブルジャウ乃至はハバチル廟等の所と對照して見ねばならないのである。さうしてこ



(影撮者著) 壇祭喇嘛ウヤジルブイゲルブウ



(影撮者著) 婦夫人古蒙旗沁珠島西

の高い山は高野山、或は比叡山に於ける如く山の佛教である。

かにすることの出来ないものである。碑文に佛陀波利の名の見えるものもある。

西烏珠穆沁旗の蒙古人夫婦が遠くからわざわざこの廟に参詣に来てゐるものがある。彼等は喇嘛教信者として熱心な者である。同地は私共は二十五年前に旅行した所で、よく互に話し合つた。同蒙古は内蒙古に於て最も古風の存し最も質朴で、且つ富んで居る。今夜も亦寒い喇嘛の家に宿泊することとした。

又アルグイブルジャウに尊勝陀羅尼を刻した碑文がある。更にその陀羅尼幢が各處にあるのを見れば、文珠と關係のある天台山の如きものであることが知られる。かくの如く山上の佛跡の研究は遼の研究として疎

アルグイブルジャウからケケンシヨロンまで

十一月九日 今日早く出達せんとし、午前六時此處を出た。天候は非常に寒くなり、寒さを冒して進んだ。山を下つて行つたが、道はマンハの丘陵の間を進むこととなつた。だんだん山の間を出で、全くマンハの丘陵の所に來た。寒さを冒してかういふ道を二十支里許り來て、オンゴチョク河に達した。今日はこの小流れも結氷してゐるので、氷上を渡るのである。

それから二十支里程來てアルボロ河に到着したが、此處も最早結氷してゐる。そこで氷上を行き、アルボロ村に到着し、此處で下車した。このあたりは新移住者の小村で、私共の入つた家は、老哈河の流域の敖漢旗蒙古人の移住した家であつて、此處で晝食した。このあたりの開墾地には支那人のみならず南方の蒙古人も移住してゐる。今日休んだ家は敖漢旗の蒙古人の家であるから、私共は主人・細君と蒙古語で話をした。

此處で休息して晝飯を終はり尙進んだ。進めば進む程マンハテであつて、滿目荒涼たる

淋しい所である。行く程に蒙古人の家が點々とあるが、人は居らない。これは林東縣が出來、支那人の巡警・兵卒の往來が繁くなつて、彼等は途中立寄つて食事し、金を拂はずに行き去るから、蒙古人はその煩に耐えかねて、一人減り二人減りして、遂に人が居らなくなつたのである。

私共は道を進んだが、寒さは段々厳しくなつて來た。彼方の家・此方の家を探したが、人は一人もゐない。それから來ること四十支里許りでハカ村の一家を探し求め、此處の蒙古人の家に入り宿泊した。時に午後五時過ぎである。

此處の蒙古人の家は相當に富んで居り、この家の細君・娘等が出て來て、非常に親切に待遇して呉れた。きみ子は細君とよく話し、互に打とけた。細君は私共の爲に、娘の居るオンドルのある暖かい部屋を興へられた。

今夜細君の子供が二人出て來て色々な話をした。子供は各々帽子を被つて來たが、その帽子には虎の顔が付いてゐる。これは男の子の惡魔除けである。此處で種々雑話し、蒙古の土俗に就いて調べ、蒙古に初めて來た時の懐かしい話をした。



(影撮者著) 族家の人古蒙

私共は二十五年前に斯ういふ様に蒙古人に接して旅行したが、今度は一行の者が多く、又このあたりも變つたから、この様な家族的な探査は珍らしく、久しぶりであつた。私共は此處で二十數年前の旅行を思ひ出して、當時を偲んだ。

十一月十日 今日の出發に臨み、この子供二人娘・細君等一同を集めて記念として撮影し、午前七時出發した。

今日の出發して何處へ行くかといふと、私共が二十五年前に發見した石室を見んが爲である。出發してマンハの丘陵を上つたり下つたりして二十支里許り來て、チヨウホトギン河に達した。河はもう結氷してゐる。この河を渡り、支那人の家があるのでこれに入つた。



(影撮者著) 族一人古蒙

此處の支那人と話をして見ると、この一族は赤峰の西から移住したもので、老人は醫者で藥箆筒を並べ、色々な藥があり、醫書も積んでゐる。息子は農業をしてゐる。息子の細君は親切に私共をよく待遇せられた。この夫婦は男女二人の子供をもつてゐる。その息子は十五歳でこのあたりに珍しく文字を読むことが出来る。

十七歳位の娘はきみ子の所に來て、跪いて義理の親となつて呉れと云つた。支那では義理の親といふことは多いのである。きみ子は承諾し、記念として子供を撮影した。往來の旅客に自分の好きな人があれば、義理の親子とられるのであつて、今日のもその一つである。此處の親子と話をして此處を去り、等しくマンハの丘陵を上つたり下つたりして、二十

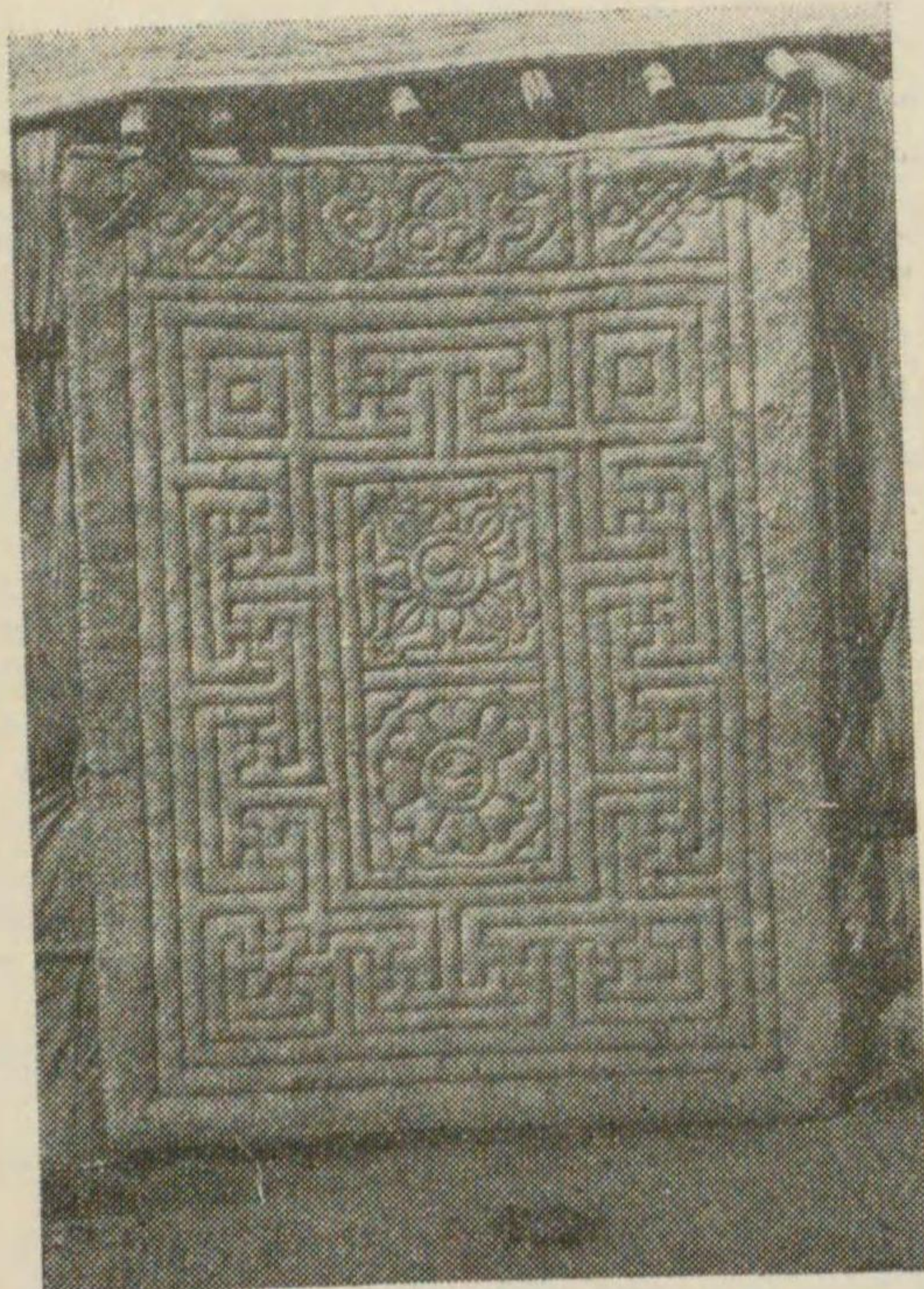
支里程來てコロコロテン河を渡つた。これ迄小さな河を幾つも渡つたが、是等は何れも遼の上京を流れるウルジムレンに注いでゐるのであるが、コロコロテンコロに來てから初めて河の流れが違ひ、これよりチャガンムレン河に流れる河となるのである。この河に沿うてこれより進むことになつた。

南方にだんだん下り、十五支里許り來て、始めてググンシヨロン村に到着した。時に午後四時半である。私共の泊つた家は

もと巴林王府に勤めてゐた役人の家であつて、主人は老人で、若夫婦が共に居る。

此處で厄介になることになつたが役人の家であるから、大變よく世話して呉れた。

この村は傍に山があつて、この山



(影撮者著) れ垂の口入屋家古蒙

の上にググン廟が存在してゐる。山上は珍らしく樹木多く、下にはチャガムレンが流れてゐる景色が佳い。河畔には楊の老樹が並列して植わつてゐる。蒙古にかくの如き老樹が列を爲して存在してゐるのは全く珍らしい。これは山上にググン廟があるから、その背景として植ゑられたものであらうが、老樹となつて風致が極めて宜しい。此處も二十五年前に宿泊した所で、當時を思ひ出して非常に懐しかつた。

石室の調査と大板

十一月十一日 今日コルバン トロガイにある石室を調査に行く積りであるが、天氣は宜しいが、風が甚だしく寒い。

一行は車許りで家を出た。五支里程でチャガムレンに達したが、この河に沿うて楊の老樹が大變生えてゐる。チャガムレンはこれまで渡つた河で、今しも水は結氷してゐる。この表面は或所は柔かく、或所は堅いから、重量のものでこの上を渡るのは危険である。若し誤つて氷が砕けたら如何ともすることは出来ない。

そこで馬車を岸に止どめ、馬夫は何處の所が渡るによいか探し、徒歩で渡つた。この河幅は廣い所で二十間程ある。案内者によつて漸く前岸に渡つた。氷上を渡つて、マンハテの所になり、河に沿うて丘陵を右にして進んだ。丁度向つて行く方から蒙古風が吹いて來るので、進むのに非常に困難である。途中蒙古人の家屋が點々と散在してゐる。

やがてコルバン トロガイ山が聳えてゐるのを見た。このコルバン トロガイ山といふのは、蒙古語で三つの頭と云ふ意味で、これは峰が三つに分れて、恰かも三頭のやうに見えるから付けた名である。此處はチャガムレン河の流域で、景色が佳く、一方にはコルバン トロガイ山が聳え、一方にチャガムレンが流れてゐる。右の方は丘陵である。

河を渡り、十支里程の所を困難して越え、石室の存在する所に達した。此處はマンハの丘陵で、石室はマンハの丘陵の上に存在してゐる。この丘陵から下を見ればコルバン トロガイ山までの間は平地である。

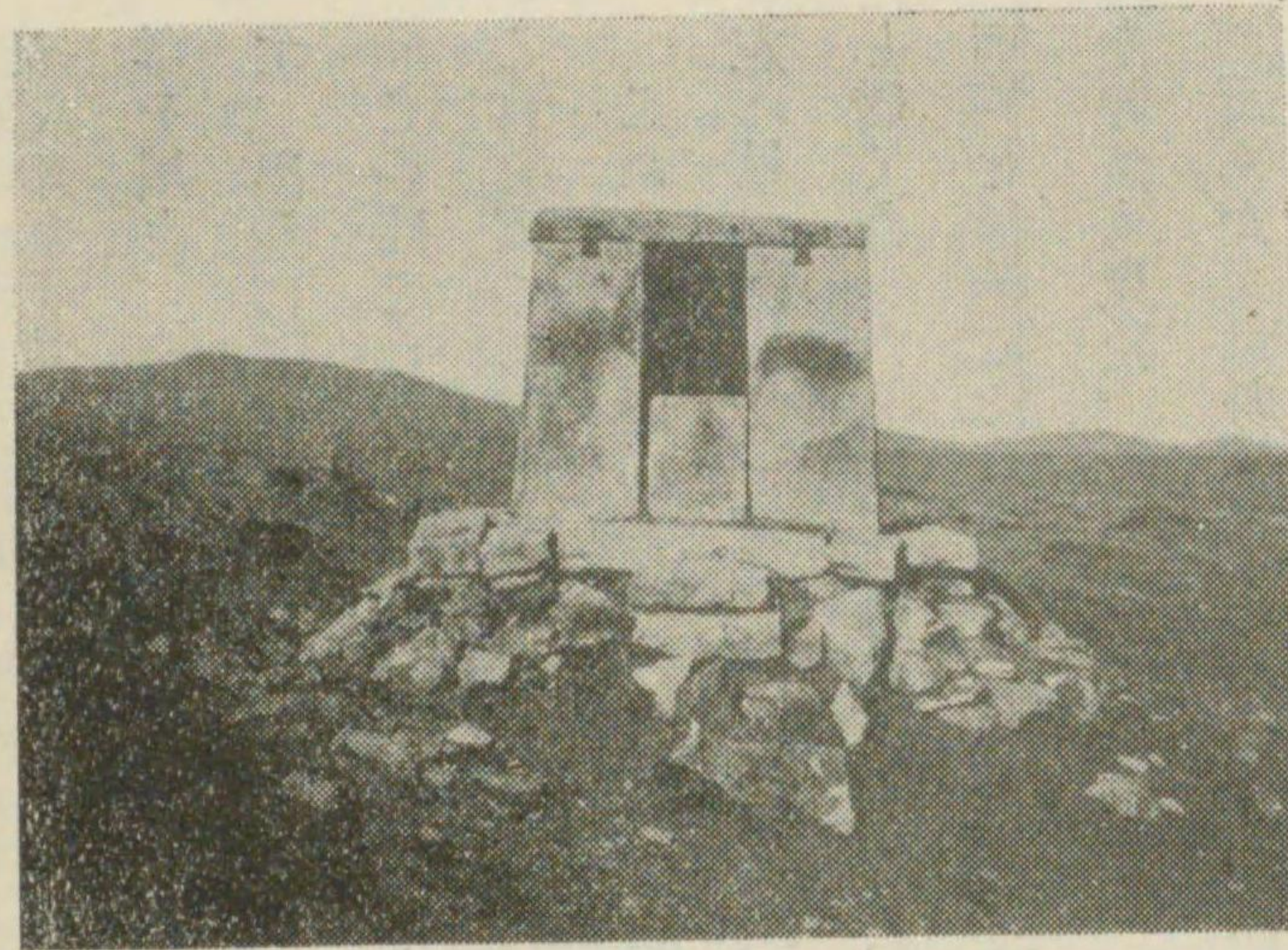
石室は四面花崗岩で壁をなし、上に一枚石を覆うてゐる。壁には錠かすがひで留め、入口の所を明けて居り、中に一枚の石を敷いてゐる。これは何時か遼の太祖陵の所に云つた石室の小さ

なものである。蒙古人はこれをチヨロン、ゲルと云つてゐる。這は石室の義である。このチヨロン、ゲルは今は喇嘛教の讀み古した御經を捨てる場所となつてゐる。

この石室は遼時代のもので、もとは立派な柱などあつたことが知られる。石室の傍に立派な柱の礎石が残つてゐる。これは石室の周圍に柱を立て屋根を葺き、その中に石室が存在してゐたのである。附近に瓦の破片、磚の破片、陶器の破片等が散亂してゐる。

この石室は花崗岩から出来てゐるが、その形から見ると、もとドルメンでなかつたかと思はれる。ドルメンを遼時代に加工したもので、軒の出てゐる部分を切り、壁に接して密接せしめ、鏝を打つて留めたものであらう。この石室は遼の太祖陵と同じものである。もとの形状は南滿洲・朝鮮北部にあるドルメンと同じ形式を帯びたもののやうである。

この丘陵はもと石器時代の遺跡で、此處に土器・石器等が散亂して居り、又包含層も認められる。此處で私共は遺物を採集し、石斧・環石等を得、又土器の破片も少し手に入れた。私共一行はベストを盡して、分擔し調査した。この時、附近村落の二三の蒙古人が来て、よくこのあたりの事情を話して呉れた。



(影攝著) 室石の近附イガロトンバルコ

私共が二十五年前この村に來た時は、前に見えるコルバン、トロガイ村に宿泊してゐた。その時蒙古人の案内によりこの石室を始め發見したのである。又このあたりに契丹文字を刻した石碑の様なものを發見し、その附近に土城もあつた。これからその場所に行かんとしたがわからぬ。蒙古人、支那人に聞いたが、その場所を知らないので、残念ながらこれを止して歸途に就いた。

一方は丘陵、一方は河でこの間を風に吹かれつつ寒さを冒して進んだ。此處で再びチャガンムレンを渡らなければならぬ。私共は無事に渡つたが三好氏は踏み誤つて片足を水中に入れ、非常に危かつた。

氷上を渡ると車が待つてゐたからこれに乗り、

老樹の林を抜け、蒙古人の家に歸つた。蒙古人の家は一行の爲に大歓迎會を開き、一頭の羊を屠り、この羊の肉を私共一行に出され、愉快に蒙古人・日本人の隔りなく話を交換して、出發に臨み一同撮影した。

この時このあたりから發掘したといふ酒を入れてゐる缶はとぎの形をした陶器を持つて來て、これを買つて貰ひたいといつたので、云ふがままに買つた。

これより一同勇を鼓し、大板に歸らんとして、午後五時村を出發した。道はグゲン廟を左に見て進む。マンハの丘陵を上つたり下つたりして進んで行くうちに、太陽は西天に没し暗くなつた。時に大喇嘛が巴林の寺院の喇嘛廟に來てゐるといふので、このあたりから喇嘛を拜みに行つて歸つて來るものに會つた。車に乗る者、馬に乗る者等男女のこの群れを幾度も見た。

だんだん進む程に夜に入り、星明りで進むに過ぎない。大板地方へ行く道路も判らず、經驗によつて馬夫が車を進めるに過ぎず非常に危険な状態である。行けども行けども道は見えず、大板に近づいた頃喇嘛の音楽が微かに聞え、犬の鳴聲が聞えて來た。

一行は大板に着いて、勸業会社に宿泊することとなつた。宿では直ちに牛糞を持ち來りストーブに入れ室内を温めた。私共は此處で久しぶりに心地よい一夜を明かした。

シラムレン(潢水)河畔の調査

十一月十二日 今日シラムレン河の河畔にある巴林橋方面の調査に行かんとて、朝から用意を始め、午前十時漸く出發した。

この道は私共が二十五年前に向ふの方から大板に向つて來たことがあるが、その所に行くのである。一行中誰も此處へ行つた人がなく道がわからない。そこで相良君の紹介で一人の蒙古人を雇つた。この人は五十四・五の人で、あの方面とこの方面の往來をしてゐるのである。それでこの人に案内させることになつた。

私共は車で、其他の人々は馬で出發した。道は西の方に向ひ、坂を上り西大廟の所へ來た。それから下りとなり、岩のある所で、チャガンムレン河が突當つて流れてゐる所に達した。この河を渡り、西南に向ひ進んで行つたが忽ちマンハの丘陵となつた。この丘陵を

西南にとり進んで行つたが、途中は砂の所もあれば、又その上に草の生えてゐる所もある。

だんだん行つて初めて左右に山を見る。殊に西の方に山脈は長く走つてゐる。これは即ち興安嶺の山脈である。私共は進んで来た途中マンハの崩れの上で、石器時代の遺跡を発見し、車から降りて、土器・石器等を採集した。

それから道は次第に上つて行くことになり、初めて第一の峠に達した。尙第二の峠に来たが、右の方に一小溪流が流れてゐるのを見た。この河は南に流れて、シラムレン河に合するのである。河の名はハラモト河で、河の前岸に蒙古人の一小村落がある。

道はだんだん上り、第三の峠に達した。此處に小さなオボがある。私共の来た第三の峠あたりより前の方に、シラムレン河流域の前岸、即ち東翁牛特旗蒙古方面の山脈・丘陵が望まれる。

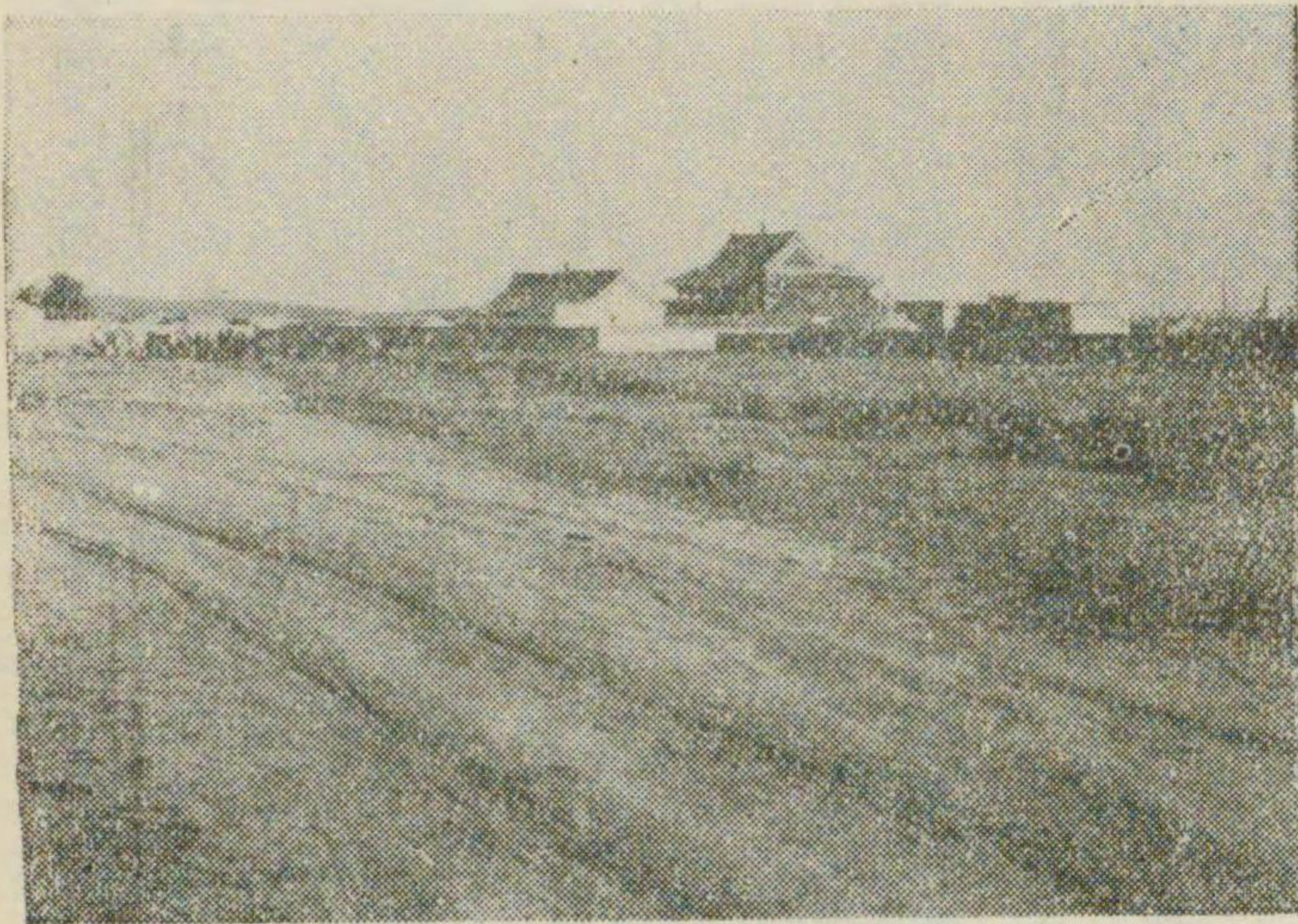
第四の峠に来て、これから南に下り坂となる。この坂を何處までも下に下ると、シラムレン河の岸に達する。なほシラムレン河の岸まで行かうとしたが、其處に宿泊する家がな

い。そこで止むなく午後五時ハラモト村に到着して、此處で今宵は宿泊することにした。

このハラモト村は地名のハラモトにあつて、今泊らうとする所には、二三軒の蒙古人の家がある。これも山中の光景を呈して居り、左の方にバインハン山は高く聳え、山間の一小村落である。

この村は此處には二三軒であるが、彼方此方に點々散布して存在してゐる。私はその中で富める家に宿泊することとなつた。本日の行程は四十支里である。

此處の土地をハラモトといふのは、即ちハラは黒で、モトは樹木であつて、蒙古人は森林のことを云ふのである。此處ももとは鬱蒼たる森林であつたが、後焼切つて森林を切り拂ひ、全く無樹の



(影撮者著) 景 遊 の 廟 大 西

状態になつたのである。この傍に聳えるバインハン山にはなほ樹木が多く存在してゐる。巴林王府の木材はこのバインハン山上の樹木を伐採するのである。

この山の上に樹木があるから、鹿・猪・狐等がこのあたりに多い。私共の泊つた家の主人は常に楽しみとして、犬を伴ひ狩に行く。この家に立派な狐の皮が二つ許り吊されてゐるが、これは狩によつて得たものである。これを私共に幾らかで買つて呉れといふので、云ふがまゝに買つた。

此處の主人は二十三才位の人で巴林王府の役人をしてゐる。彼に美しい妻がある。その親爺は矢張り役人で、等しく巴林王府に勤めてゐて今留守である。この主人から色々な話を聞いた。この主人は家僕を二三持つて居り、家畜も相當にあつて、先づ蒙古人としては相當な生活をしてゐる。

十一月十三日 今日には愈々シラムレン河畔に達する日であるから、よく用意を調べ、此處を去る時に、主人と若夫人とを一緒にして撮影した。主人は間もなく犬を伴れ狩に出掛けて行つた。

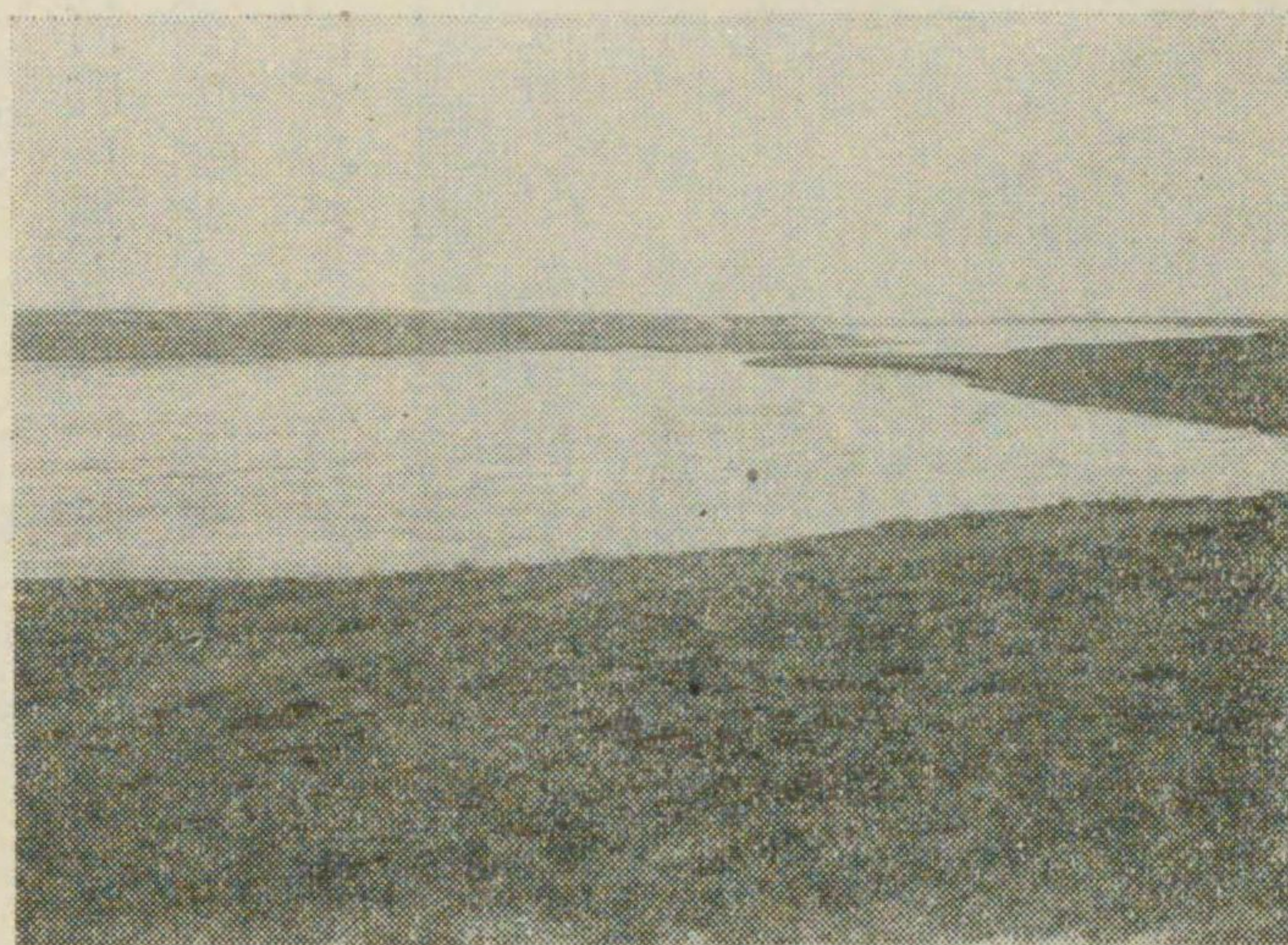
午前九時頃一行は此處を出た。道は南に向ひ下りになつた。行く所の道路は全くマンハの丘陵で、これを上つたり下つたりして、案外早く二十五支里餘り來て、シラムレン河の河畔に達した。

このシラムレン河といふのは、東蒙古に於ける大河であつて、その源は興安嶺方面に發してゐる。これが流れ流れて、南西方から老哈河と合し、遂に遼河となつて流れるのである。



(影撮著) 婦夫人古蒙トモラハ

このシラムレン河の流域は昔から名高い所で潢水といつてゐる。これを潢水と書くのは黄河と一緒になるのを避けてシ扁を添へたのである。シラムレン河は東蒙古の研究に最も大切なものである。かの東胡・鮮卑・契丹の如きはこの河の流域に搖籃地



(影撮者著) 景光の河ンレムラシ

として起つたのである。

遼の時代には此處に石の橋が架つてゐた。これを潢水石橋といふ。かの北宋の使者が屢々ボロホトン即ち遼の皇都に往來する時には、必ずこの橋を渡つたのである。當時宋人の旅行記にはこの橋を渡つたことが見えてゐる。契丹及び遼の歴史地理の研究には、このシラムレン河及び潢水石橋を基點として調べるのが最も宜しいのである。

そこで私共は二十五年前に南から來て北の方に調査した砌り、この潢水石橋の跡を尋ねて漸く發見した。所謂潢水石橋は何處であるかといふに、

本日只今到着した所が潢水石橋である。今日の橋は康熙帝の三十三年に、康熙帝の姫君が巴林王に嫁した際、巴林王がこの姫君を迎へる爲に、シラムレン河に石橋を架けた。これ

が即ち今日に残つてゐる橋である。

この橋を公主橋と云ふ。公主橋の公主は、康熙帝のお姫様の公主で、これを記念として橋に命名したのである。

この橋のかゝつてゐる所は、シラムレン河の最も幅の狭い所であつて、然もその河の間に岩が露出してゐて、その岩の周りに砂が付いて、中洲が出来てゐる。即ち中洲の間に橋を兩方から利用してゐるのである。

この橋は花崗岩から出来てゐる立派な眼鏡橋であつて、橋の欄干には支那で慶事に用ゐる模様や圖様が彫刻されてゐる。是等は如何にも公主を迎へるに相應しいものである。

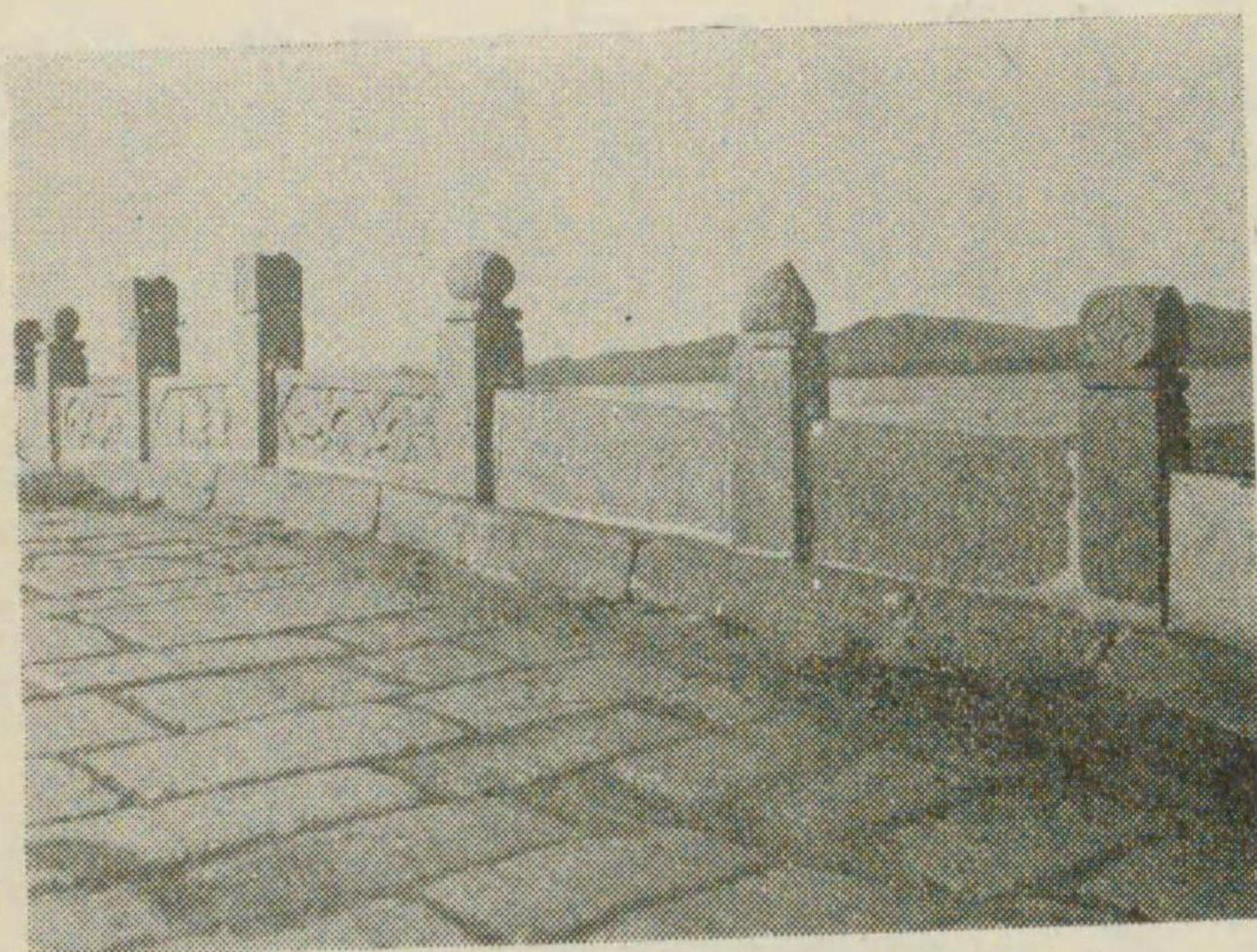
この所は康熙帝の時に巴林王が今日見るが如き橋をかけたが、その前即ち遼代の潢水石橋も此處にかけられてゐたのである。當時の橋の跡が幻げながらに見られる。又南の橋際に天然の岩に碑文を立てた跡が残つてゐる。この碑文は無くなつてゐるが、臺石は残つてゐる。この臺石は矢張り遼當時のものである。

私共は遼代石碑のあつた跡で、當時の陶片一個を、尙橋を渡つて、右方で陶片二三個を

拾得した。
私共が前に此地點に來た時分は、橋の際に二三個の碑石が立つて居り、その中に、元か明か判らない様な、片岩系の石で出來た小さな碑文があつた。今日來て見るとそれも無くなつてゐる。又、北の橋側に巴林王の碑閣があつて、數個の石碑が立てられてあつたが、これも今はその當時の面影はなく、或蒙古文字を刻した石碑が河中に投ぜられてゐる。私共はこの橋を渡つて前岸に達した。この前岸は全く東翁牛特旗の管轄になるのであつて、以前このあたりを旅行して困難した當時を追想した。

前岸の高い所上つたが、渡つて來た所の巴林橋・シラムレン河の一帶が眼下に見渡される。そこで三好氏に命じて五枚續きで此處を撮影させた。シラムレン河に架せられた巴林橋の長さは約一町余で、幅は三間強である。橋材は花崗岩から出來て居る、この河は東の方に流れてゐるが、その東方は廣い土地になつてゐる。

私共が以前に旅行した時は東翁牛特から此方に來たのであるが、丁度氷溶けの時期で、氷の流れる時、命がけで渡つたのである。當時秋の時も渡り、今度到着したので、都合三



(影撮者著)橋林巴るたれらせ架にシラムレン

度目である。このあたりは以前に調査した所であるから、今回は小時間を利用して以前の調べ残りを調べた。此處で彼方此方分擔して調査し、それから此處を出發してもと來たハラモトに向つた。今日無事に此處に到着することが出来たが、この附近は屢々馬賊が出沒し、南から橋を渡る者を掠奪する危険な所で、現にこれに出會はしたのも多い。私共が今回無事であつたのは幸福である。このあたりは人家は一軒もなく淋しい所で旅客も晝だけ往來するのである。

この邊がかく悪化したのは、支那の縣が出來た以後のことである。私共が二十數年前に旅行した時は無事で、支那人はこのあたりに居らず、橋の際には巴林王府の兵が一人二人橋番をしてゐて、此處に宿泊した位で、實に平和な光景であつた。

然るに今日は支那人の爲に悪化して、馬賊の出没する土地となつたのである。
歸途、以前に發見したマンハの中の城跡を調べようとしたが、一行中誰も知つてゐる人がないので、残念ながらこれに手をつけることが出来なかつた。私共は以前にこの城跡を調査したのである。

此處を立出で、もとの道を上つて行つたが、途中にマンハの崩れた所があつて、此處に石器時代の遺跡を發見した。石器・土器・鹿の角等の遺物が散亂してゐる。鹿の骨等があるのは、當時人々が食物にした残りものである。

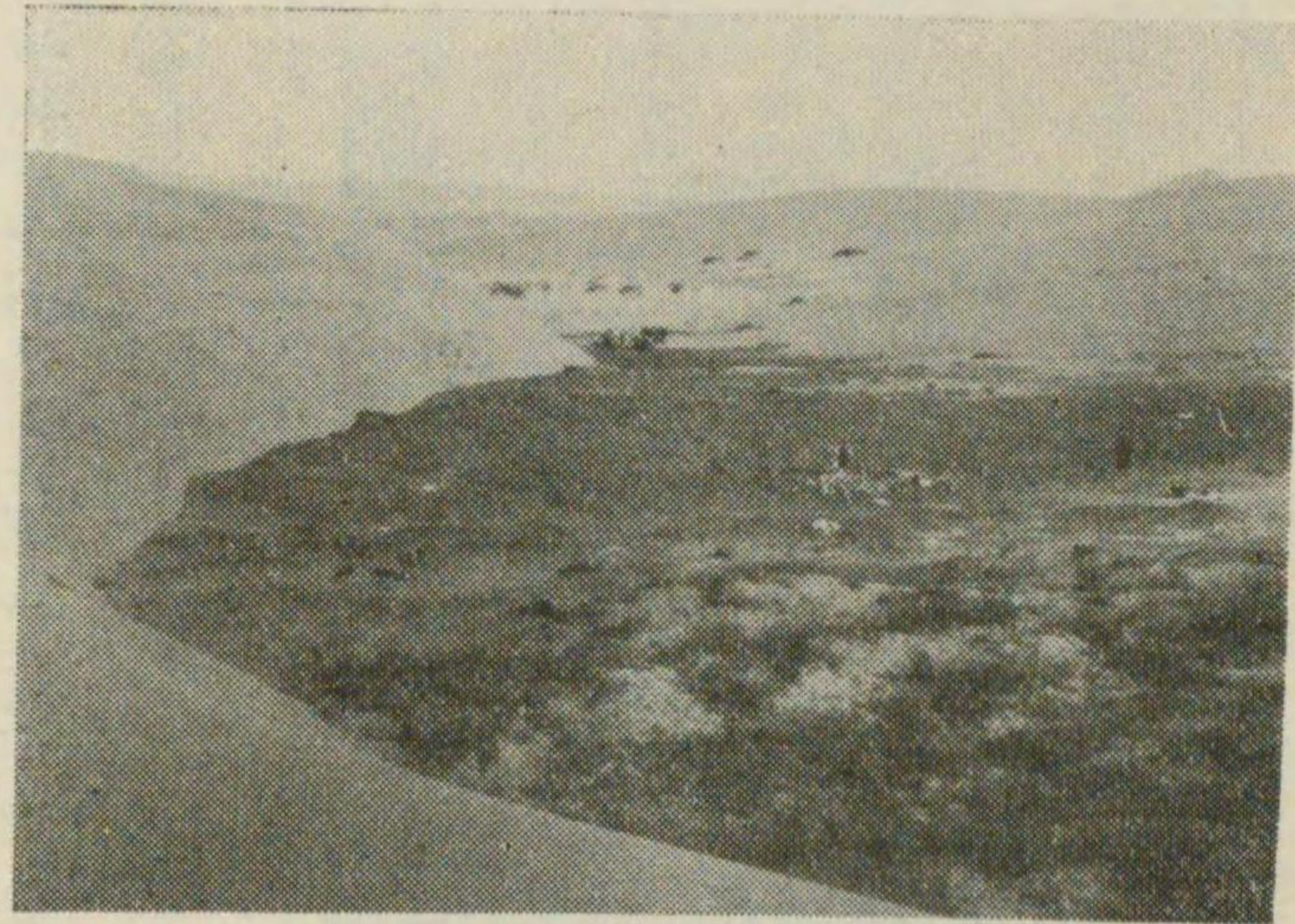
蒙古の石器時代の遺跡は、日本などと違ひ、砂丘の中に包含せられたものに、角・骨等が残つてゐる。日本ではかゝる種類の遺物は貝塚以外に殆んど残らないが、蒙古ではこの様に包含層の中に残つてゐるのである。さうして見るとこのあたりは、シラムレン河に臨み石器時代の當時、此處に人が住んでゐたことが判る。シラムレン河一帯に石器時代の遺蹟の各所に存在することは、既に私共が二十五年前に發見し、これを東京帝國大學理學部紀要で發表してゐる。今回の調査はこれの補遺に過ぎない。

道を彼方此方調べ、午後五時ハラモトに歸つた。今夜主人が出て私と話し、此處の若細君はきみ子と話し合ひ、一見舊知となつた。斯くして今夜愉快に寒村で一夜を明かした。
十一月十四日 今日は大板に歸る日である。そこで朝特に早く起きて、用意を調べた。天氣は昨日に引續いて宜しい。出發前、きみ子はこの宿の細君に蒙古の服裝をさせ、主人の妹と共に撮影した。



(影撮者著) 娘と君細の人古蒙トモラハ

八時出發、道は同じく一昨日通過した所を上り、峠になつてゐる。峠を越えること四支里で、初めて北方にチャガンムレン河の前岸西大廟を遙かに望んだ。それからこの方を目標として大板に向ひ進み始めたが途中三好氏はこの遠望をカメラに収めた。峠を下り、一昨日遺物を採集し



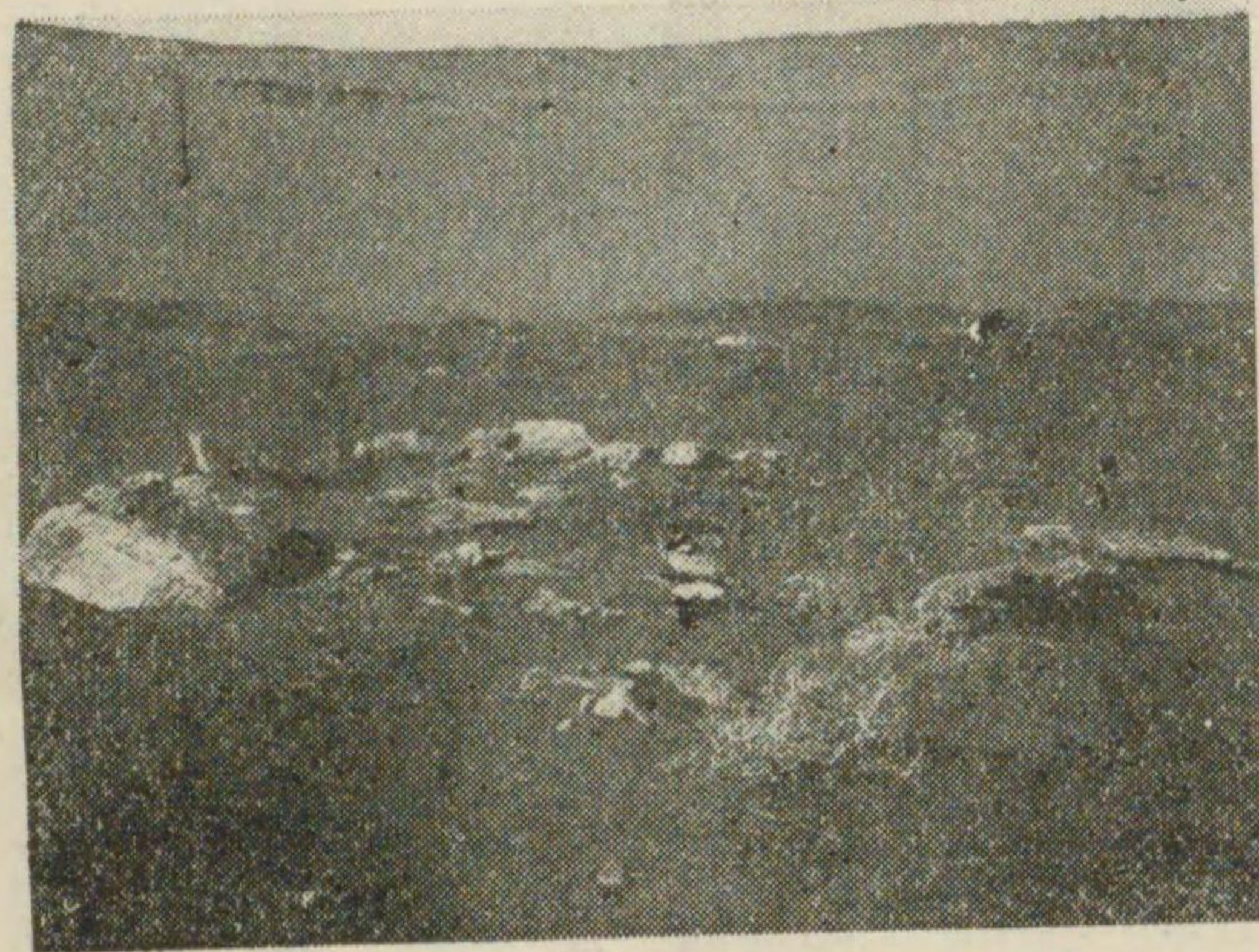
(影撮者著) 跡遺の代時器石の周の丘砂

に石器もあれば土器もある。

このあたりは砂山の間を利用して、當時の人の住んだ所で、這はデンマークの考古學者

た所に来て、調査・撮影した。
更にマンハを下り、チャガムレン河の流域の平地に出ようとする所で、石器時代の遺跡を發見した。そこで車から降りて調査に掛つた。この遺跡に就いては私共は非常に注意して調べた。龍藏・きみ子は部署を定めて彼方此方調べた。

墓らしく石を周圍に繞らした遺跡もあれば、或所では骨片が白く堆く散亂してゐる。這は骨塚である。これには焼かれたものもあり、然らざるものもあり、その中に動物の頭蓋骨・顎の骨・長骨の破片などが多く見える。動物は鹿が多く、その中



(影撮者著) 墓の代時器石

のいふクゼツケンメーディンゲルに相當するものである。この骨塚に就いて私共は有益なる教訓を興へられた。

かくして低地に下りると、チャガムレン河が流れてゐる。暫くこの河に沿うて進んだが、再び河を渡り、西大廟の丘下を走り、午後三時頃大板に到着した。さうして勸業公司の宿舎に投じた。

龍藏は久しぶりに剃刀を出して自ら髯を剃り、牛糞のストーブを焚き、そこでノートの整理などした。私共一行が此處に歸つて暫くして林西縣民會長葛起翔氏が此處へ來られ、私共と談話して、隣の部屋に寝られた。この人は先日の旅誌で書いて置いたワールマンハの陵墓にあつた碑文拓本を私共に呉れた人で、考古の考へがあつて、支那人

として珍らしい。氏は又非常に日本に同情をもつて居られる。

黒山屯と林西縣城

十一月十五日 今日黒山屯に行く日である。朝早く起き、一寸朝飯を済し、午前五時半前此處を出た。まだ太陽は上らないので、非常に暗い。暫く進んで行く中に、次第に太陽が出て来た。いつもの西大廟の前に出て来て、等しくチャガンムレン河を渡り、専ら西に向つて進んだ。これは前に歩める道と同じである。來ること六十支里で、蒙古人の農村ニグモトといふ所に達した。

このニグモトは一つの樹といふ名前でもと此處に一本の樹があつたので、この名が起つたのである。近頃支那人はこのニグモトを漢譯して一椶樹といつてゐる。

私共は同村の或蒙古人の家に入つて食事したが、此處の蒙古人はあまり富める家でないが、色々な話を細君・亭主と話し合つた。又この家の外に唐臼を搗く所があるので、細君にこれを搗いてゐる有様をしてもらつて撮影した。



(影撮者著) 所く搗を白唐人婦古蒙

それから車を進めて黒山屯附近に來たが、ニグモトから二十五支里許りで、黒山屯飼羊所に到着した。時に午後四時である。内田所長は門前に出迎へられ、私共の無事で歸つたのを祝福せられた。それから内田氏其他の各位と久しぶりでストーブの傍で暖く談話しながら食事して、その旅誌を認め、ノートなどを整理した。

十一月十六日 天候は昨日より少し寒くなつた。今日は朝の食事を事務所側でし、蓄音機を聞いた。

今日は林西縣城に行く考へであつたが、先日白塔子で蒙古人に托して置いた荷物が到着して居りその數が多いからこれを整理することとし、林西縣城に行くことを中止した。きみ子は採集品を別の箱に詰め替へるのに忙しい。三好氏・張氏・ポー

イの漢・ワンなどもこれに従事せられた。
私共は到着した荷物を整理し、何時でも此處を出發し歸途につくことが出来る様になつた。三好氏は採集品中の壊れ易いものを撮影したり、龍藏は採集した物の比較する物などとり出して比較したりなどして、相當忙しく暮らした。

十一月十七日 早朝よりノートの整理などをしてゐたが、林西縣城内の及川三男氏より馬車と人とを以つて私共を迎へに來られた。この及川氏は林西縣城内の支那人と、東亞公同といふものを組織して居られ、城内に商會を持つて居られる。氏は此處のあたりに精しい人で、數年日蒙貿易に従事されて居られる。

そこで私共はこの馬車に乗つて一行の人々と共に午前十一時頃此處を出たが、内田所長其他の人々も同行せらるゝことゝなつた。林西縣城に行くと及川氏、及び小橋氏・友野氏夫妻等出迎へられ、一寸各位に挨拶して、それより市街を見物し、買物等した。

前にも記した如く、この市街は今日殆どどんな物資でも得られ、物價も林東縣より此處の方が安い。もう季節になつたから、毛皮を賣る店が多い。私共は此處で毛皮を買ひ衣服

とした。三時頃及川氏方に歸つた。

一同歓迎の宴を開かれ、種々談話を交換した。私共は及川氏の勧めによつて、今夜は及川氏の御宅で宿泊することゝした。今夜及川氏と盛に談話を交はした。

十一月十八日 早朝友野氏方に到り、友野氏夫妻・小橋院長などと談話し、及川氏の御宅で朝飯を頂いた。その時此處で亡くなられた原田軍次氏の墓に詣つて呉れといふので、これに詣り、撮影などした。

それから及川氏・小橋氏等と談話を交換し、午後四時此處を立出で、及川・小橋・友野夫妻等の諸氏に見送られ黒山屯に歸つた。

きみ子は明日出發する爲め荷物の整理に忙はしく、龍藏は旅誌を記し滿洲日報、十月一日以來のものを讀み、初めて日本内地の事情を知つた。

再び大板に

十一月十九日 今日此處を出發して大板に赴かんとし、特に早く午前五時に起出で、

クイルスモトの木の根でストーブを焚き、旅装を調へた。隣の三好氏を起し、午前七時半一同内田所長、築比地氏等と朝食を共にした。

今日はこれより出發するのであるが、林西縣城から昨日の及川氏が、大板に行くに就き一緒に行かうといふので、此處に立寄りられ、私共の爲に同氏は美しい小車を供せられた。及川氏は午前九時頃來着せられ、一寸休憩の上出發した。茲に内田所長の非常な厚遇に感謝の意を表す。

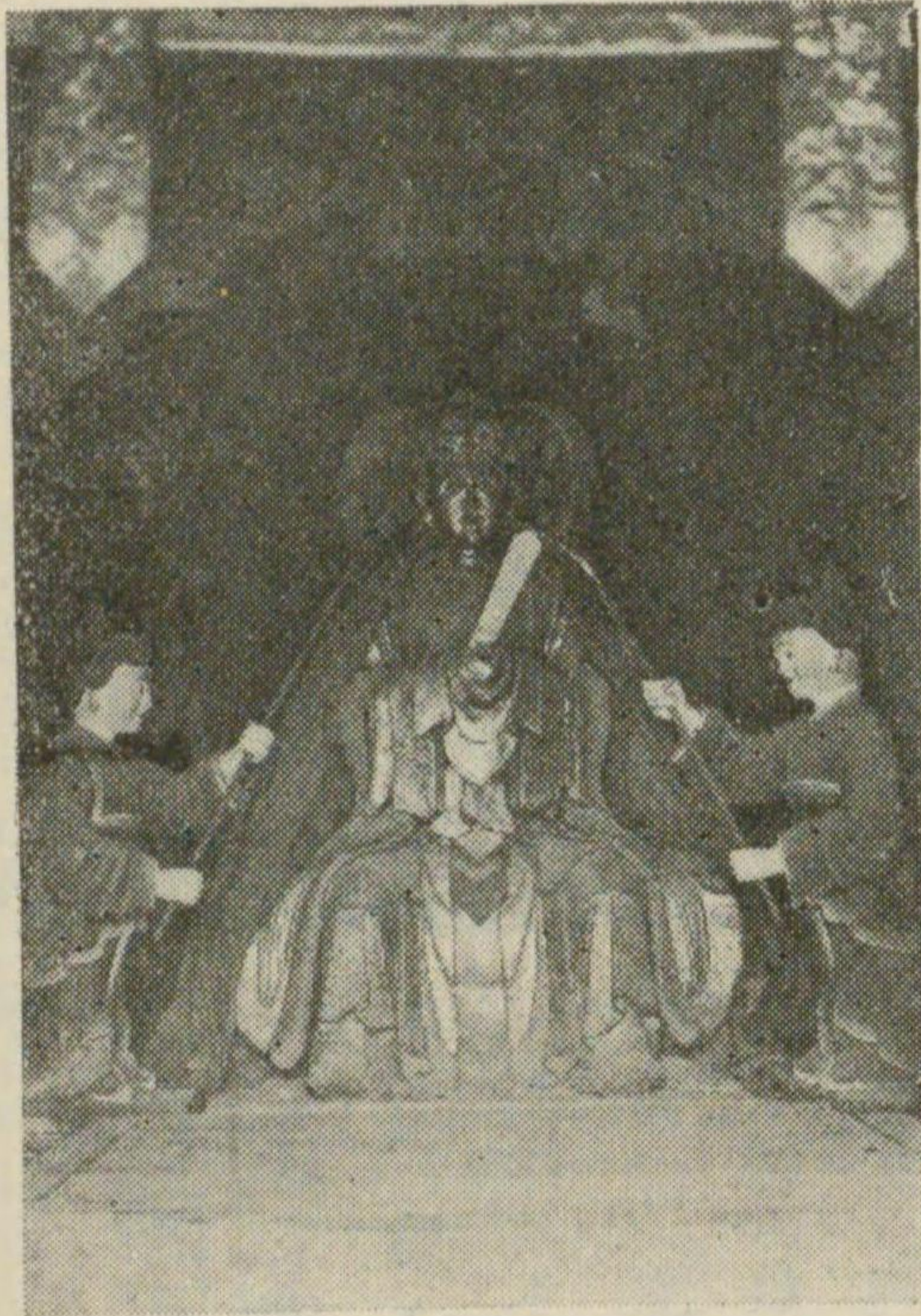
私共の採集した遺物は十四五箱の荷物になつたが、これは蒙古人の通遼に通ふ車に托すこととした。

かくして懐しき黒山屯を出發した。昨夜半から雪が降り出したが、朝になり忽ち止んだ。尙雪がチラチラし風があつて非常に寒いが、小車は防寒の設備が十分にあり、羊毛の垂れを下し、風は少しも入らない。

私共の車は先日往來した同一の道を進み、進行が速く、午後一時頃大板に到着したが、あとの二臺の大車は三時間も遅れて四時に來着した。

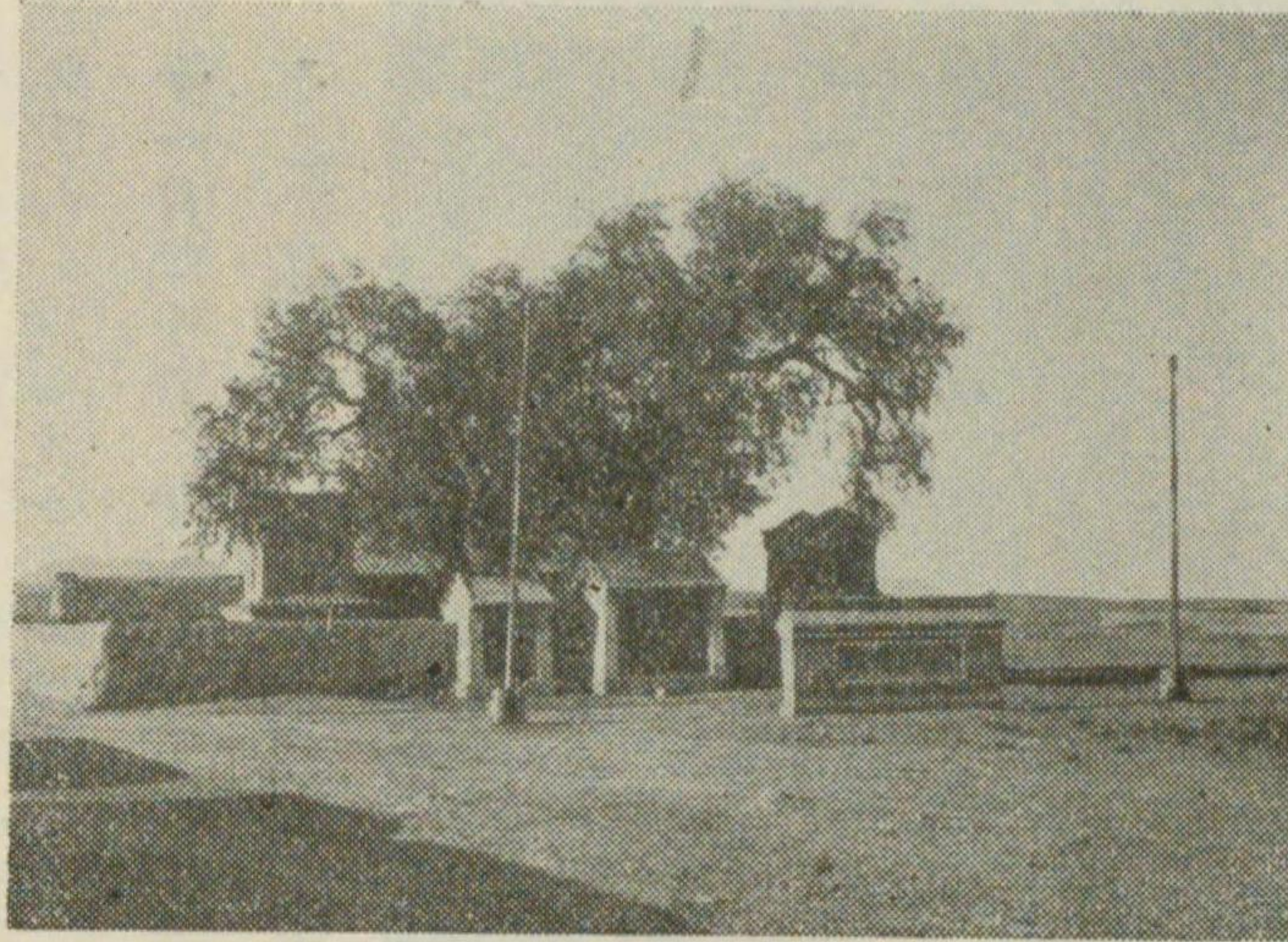
丁度此處に林西縣城の商會長葛氏が來られて晚餐を共にした。その時同氏より遼の陵墓及び石碑のことに就いてよく話された。

此處の牛糞のオンドルは暖かく、よく眠れた。
十一月二十日 午前七時過頃起き出た。ボーイは牛糞を持來り、ストーブを焚き始めた。そこで私共はモンゴルアムで一寸食事し、後普通の朝食を攝つた。今日は一日大板に滞在することとした。



(影撮著) 々娘の麗々

それから及川氏所有の康熙帝の公主が巴林王に嫁す時に携へて來られた立派な戸棚を拓本し撮影した。これは巴林王から及川氏が貰つたものであつて、赤地の漆の上に龍を表はして居り、康熙時代の藝術品として誇るべきものである。



(影撮者著) 廟々娘たれらて建の主公

この様なことで午前中を費し、午後一時及川・葛・浅野・小平・三好・相良の諸氏と共に此處を出て先づ玉皇廟を見た。それより観音廟、それより公主の建てられた娘娘廟を見た。この娘々廟は公主が康熙年間嫁入りせられた時、殊更に造られたもので、立派な廟である。

この娘々廟は門を入ると、正面に堂があつて、又その奥に堂があり、共に娘々を祀つてゐる。兩堂の前の像は大きく、泥像よりなつて居つて、顔は金色に塗つてゐる。左右の脇侍も同様である。

娘々を中心として左右兩側に女性の侍者を多數配してゐる。三好氏はこの娘々を撮影し、更に後堂の娘々を撮影したが、此處の娘々は木像で脇侍も同様であつて、宛も一刀彫りの様である。

これを終り、尙彼方此方を見物し、一行は巴林王府の門前で記念撮影をした。尙王府の隣に小さな木柵を見たが、這是近頃日本内地で發見される木柵の小さなもので、斯ういふものより木柵が出来る様になつたのである。

それから淋しい一筋路の寺町・役人の町あたりを見物し、宿に歸つた。今日は午前中暖く風がなかつたが、午後になつて少しく風が出て寒くなつた。今夜オンドル・ストーブ等で心地よく旅誌など記した。

大板から石器時代遺跡——フフトツクタホまで

十一月二十一日 今日は大板を出發して歸途につく日であるから、いつもの如く朝早く起きて用意した。

午前七時頃一同出發した。及川氏及び葛氏が見送られた。今日は風が最も強く、土砂を飛ばし、これ迄にない天候であつた。殊に向風で、砂混りの風が私共一行の顔に打付ける様に強く吹いた。かく砂混りの風は蒙古の特色で、旅客はこれに苦しめられ、蒙古人も亦

難儀するものである。斯ういふ風が長い間吹くから、砂丘が彼方に出来たり此方に出来たりするのである。

一行はこれに打勝つて進んだ。道は以前に休息した道と同じである。大板から暫く来て峠に達した。一行はそれから只走りに走り、以前に来たコロコロテン村喇嘛僧の家を右に望み、風に吹きつけられながら、四十支里許り来て、コロコロテン村に到着した。此處で下車して茶を飲んだ。

此處はコロコロテンコロ河畔にある村落である。今コロコロテンコロ河は結氷してゐるが、一行はこの氷上を渡つて進んだ。土砂風は益々甚だしい。

途中で先日きみに子に親になつて呉れといつたジュンホトカ村の醫者の家に一寸立寄り、同娘に菓子・冰糖・鏡等を贈つた。両親・子供の喜ぶこと限りない。兄と妹は途中迄出迎へ、又見送られた。

此處で茶を飲み、ゆつくり出立せられたしと懇願せられたが、前途を急ぐ旅であるから之を辭退して、再び土砂風の中を四十五支里行き、ジュンホトカ村に午後五時半到着し

た。私共は蒙古人の家に投ずることとした。この家は氣持よく一行を泊めて呉れた。

本日の行程は八十五支里程であるが、天氣は土砂風を飛ばし、寒さは身に徹へる程であつた。

十一月二十二日 午前六時出發した。今日は先づもと來たハロール村の石器時代の遺跡の探査や、撮影などが目的である。

そこで丘陵や峠を上つたり下つたりして五十五支里で、ハロール村の遺跡に到着した。私共・三好・淺野兩氏は下車して、この遺跡を調査した。

この遺跡は石器時代包含層の露出せるもので、石器・原料・土器等散亂してゐる。包含層の深さは三尺から六尺の程度であつて、此處に包含されてゐるものや、散列してゐるもの等ある。

以上は石器時代のものであることは明かであるが、その中、石器として石鏃があり、土器には、素焼もあれば、點々沈文にした模様のものもある。

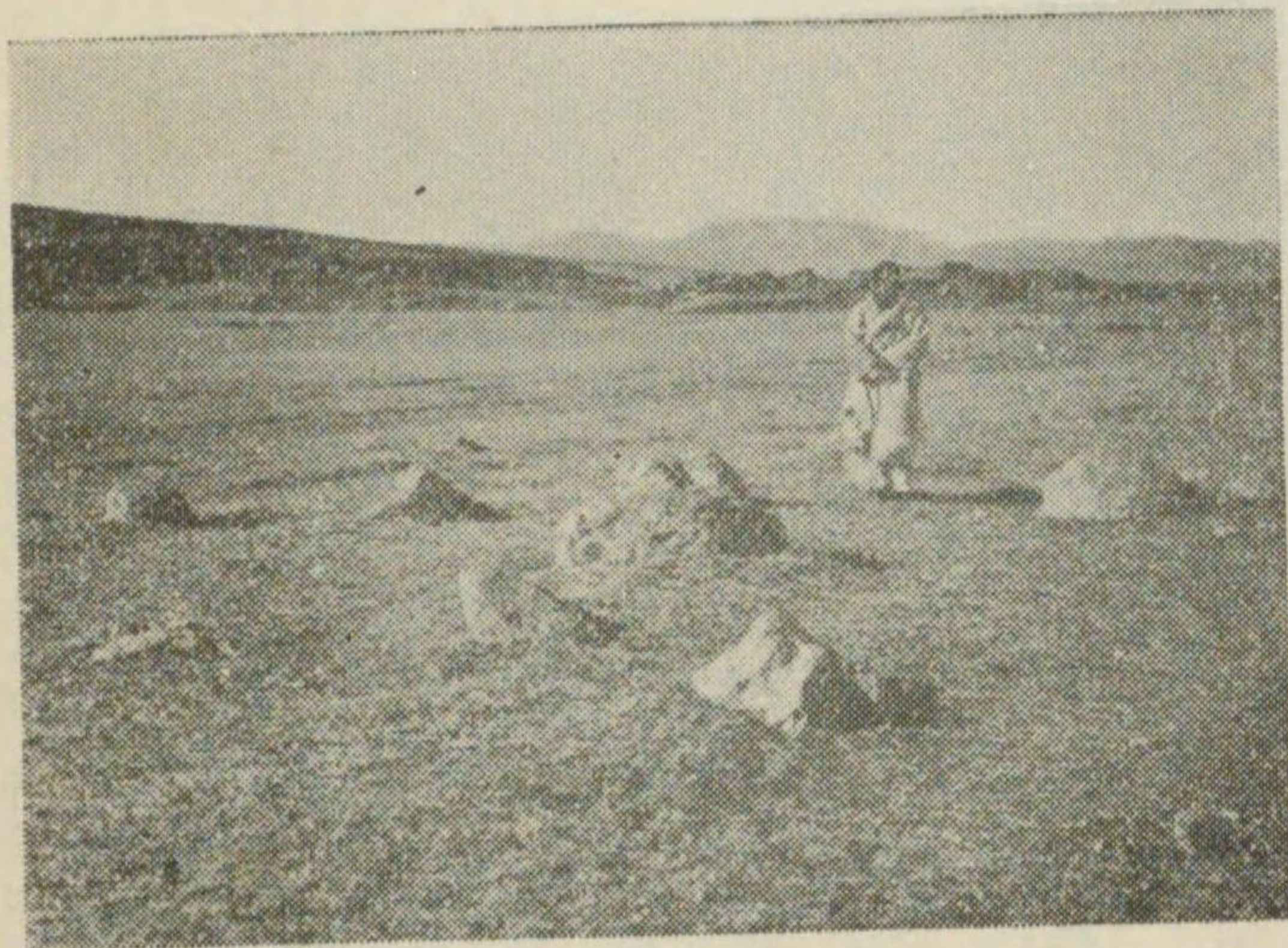
石器は實に粗製であつて、一見歐羅巴の舊石器時代の感がある。若し單に石器のみを以

て云へば、舊石器時代の某時代のものであると云へるが、よく見るとこの中に土器が混つてゐる。これで見ると新石器時代ネオリシックのものであることは明かである。かく粗製大形の石器の存在は、舊石器時代と新石器時代との過渡期のものと云ひ得る。這是考慮して研究すべきことである。

この調査中、鷹が一羽凍えて死んでゐるのを見た。これを見ても寒さが如何に甚しいかがわかる。鷹は飛ばんとして此處へ来て、寒さが甚しかつたので、遂に凍え死んだのである。

此處は研究すべき價値のある所である。この附近に巨石遺跡が群を爲してゐる所がある。ストーンサークル・メンヒル等があつて、巨石遺跡群を形成してゐる。此處で石器・土器を採集したが、是等を以つて見ると、先きの遺跡とこの巨石遺跡とは、同じ時代のものであることが推知される。

此處を調査してゐると、一行の前に行つてゐたものが待ち遠くなつて、私共を迎へに來た。そこで一行の待つてゐるハロール村に行つて休息した。

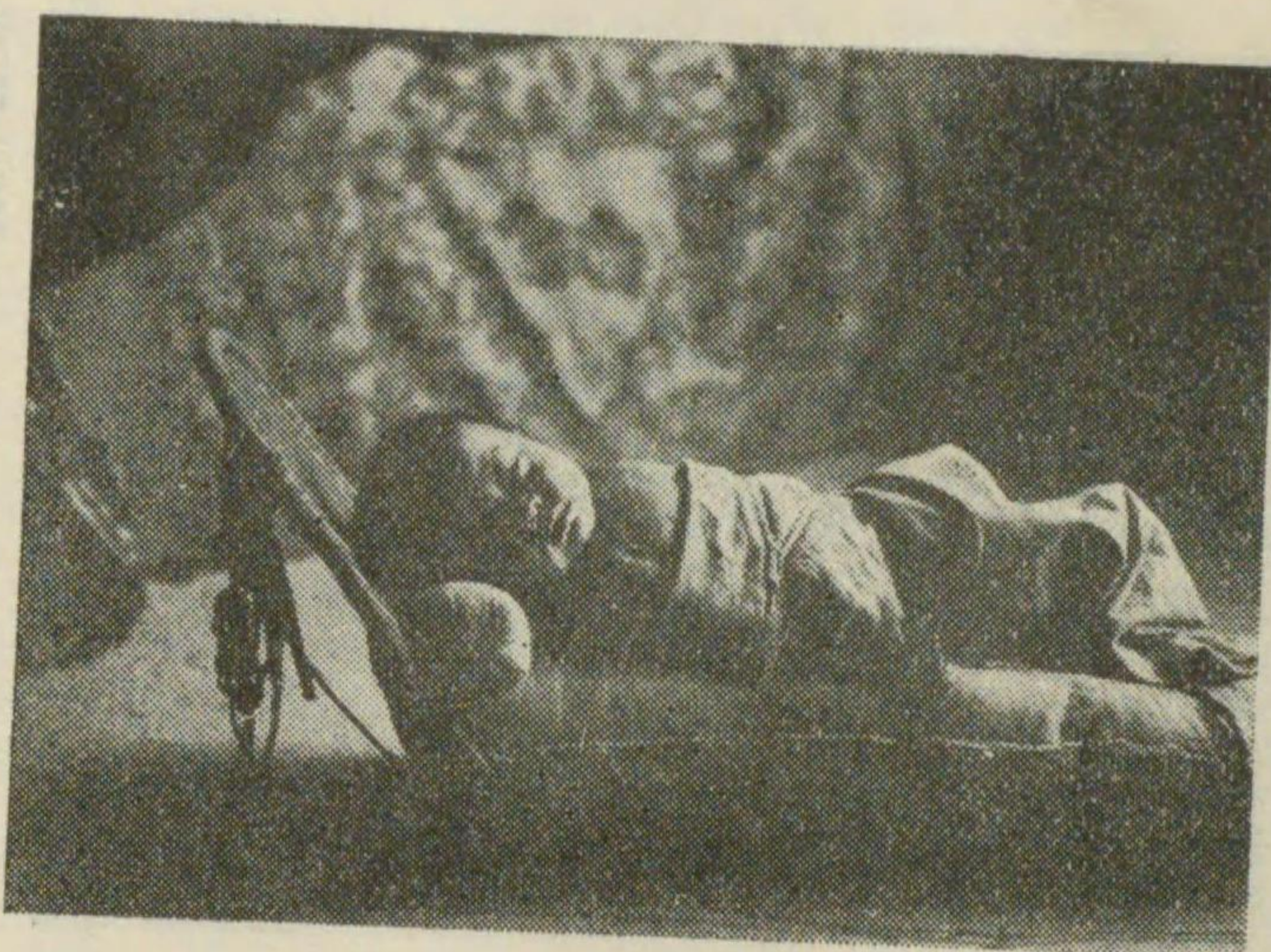


(影撮者著) ルターサントスのルーロハ

此處を出發し、道は上り道となり、或る峠に到達した。この峠はチヨロテタバーと稱し峠に立派なオボがある。これから行かんとする方面を見ると、平野が横はつてゐる。

この峠を徐々に下り、平坦な丘陵になつた。この丘陵を進み、出發してから六十支里弱で、午後六時頃ハツテンコロに到看した。其處にプフトツクタホの蒙古の衙門がある。

此處で泊らうとして、巴林から連れて來てゐる兵卒と、同王から貰つて來た手紙を持參して、入らうとしたが、此處に滿洲吉林から來た馬を買ふ支邦人の役人が居て入れない。相良・ワンなどの諸氏が「貴下が如何に云つても、我等は巴林王の紹介で、此處に宿を求めぬのに不都合はない、巴林から兵卒など來てゐる」といつても、頑として



(影撮著) 供子の中の監攝

應ぜず、ピストルを擬して入れない様子をした。内の蒙古の役人は私共に厚意を持つてゐるが、支那人の勢力がかく及んでゐるので、如何ともすることが出来ない。手紙は密かに蒙古人の手に渡した。

かくの如く支那の役人は無禮を働いて、如何に蒙古人に悪感情を抱かせてゐるかがわかるであらう。最初支那の役人は私共を蒙古人と思ひ、後に蒙古人でないことを知つたらしい。兎に角要領を得なかつた。

もう日は暮れ、仕方なく私共は一蒙古人の家に行つたが、俄に一行が此處に入つて來たので、この主人は馬賊或は支那兵と思つたらしく宿に入ることを許さなかつた。そこで従卒と蒙古人との間に口論が起り、とうとう馬賊で

ないことがわかり、泊めてもらひ非常に待遇して呉れた。

同衙門チヨソラクチの所から蒙古兵五名を出して貰ふ巴林王からの書面も、支那人の爲に中止され有耶無耶になつてその日は暮れた。本日の行程百十支里である。

アフトゥクトホから公爺府まで

十一月二十三日 今日の新嘗祭である。東京であれば定めて賑ふ日であらう。けれども私共は蒙古にあつて新嘗の祭りを祝ふことも出来ぬ。

今日はいつともより早く起き、午前四時半頃此處を出發した。暗夜で日はまだ出ない。馬車は提灯をつけて東方に向つて進んだが、時しも太陽が東の空から出て紅を呈し、朝の景色は地平線上に映り何ともいへぬ絶景である。

この紅の幕を背景とする地平線上に、私共一行の乗馬してゐる者が先きに走つてゐる有様は、日本内地では見られない崇高な光景である。蒙古の曙は大陸的な雄大壯嚴な佛がある。私共はこの地平線上を心地よく走つた。

かく朝早くより出發して、三十支里許り來て、二八地に到着した。此處は支那人の聚落であつて、戸數五十戸許りの村から小さな町に移らうとする状態の所である。畑はよく發達し、モンゴルアム・高粱等を植ゑてゐる。

私共は久しぶりに此處に來て、高粱を見たのである。これから以西・北には高粱は産しない。此處で下車して、一寸茶を飲んだ。それから再び乗車して東方に進んだ。

この間丘陵を上つたり下つたりして單一なる道を五十支里許り來て、シンスム(新廟)に到着した。此處は支邦人の一農村である。一農家に入り宿泊した。本日の行程八十支里。

此處に到着した時、蒙古の兵卒五名が乗馬ではせ來て開魯まで護衛する旨を傳へた。蒙古人は私共に「我等蒙古人が支那人の爲に隔てられて、かく無禮をしたことを平に謝す次第である」と低頭平身をしたので、氣の毒な感じがした。蒙古人に對する支那人の無法な振舞はこれでよく判る。私共は蒙古人の爲に、支那の壓迫を悲しむものである。このあたりは馬賊の出沒する所であるから、將來旅行する者は最も警戒しなければならぬ。この五名の兵は此處に宿泊して、明日から護衛することとなつた。

この村は近頃出來た支那の農村であつて、これまで無かつたものが、蒙古人の土地に出來たのである。かくの如くして支那人の村落は蒙古地方に増加し、畑が出來て行く。もう遠からざる將來、支那人の村落と化し、牧場は變じて畑となるのは眼に見る様である。

十一月二十四日 今日も未だ太陽の昇らない頃、四時半に出發した。四方は暗黒であつて咫尺も辨ずることは出ない。提灯をつけて行く、一行の外に蒙古兵が左右を注意して従つて來た。

夜が明け、太陽が地平線上に現はれた際、先日渡つたウルジムレン河畔に到着した。河畔には五六本の樹木があり、蒙古人の家が二三軒存在してゐる。私共の前を乗馬で走る諸君が地平線上に立つて、太陽がこれに輝いてゐるのは、何ともいへぬあさぼらけの崇高な景色である。

このウルジムレンといふ河は、先日調査したボロ・ホトン即ち遼の皇都城壁の南を流れ阿魯科爾沁王府の所に來り、更に此處に流れ來るのである。この河畔は歴史的に興味のある所であつて、シラムレンに注ぐのである。私共は二十五年前、この沿岸を彼方に行き、

此方に行き調査したのであつた。

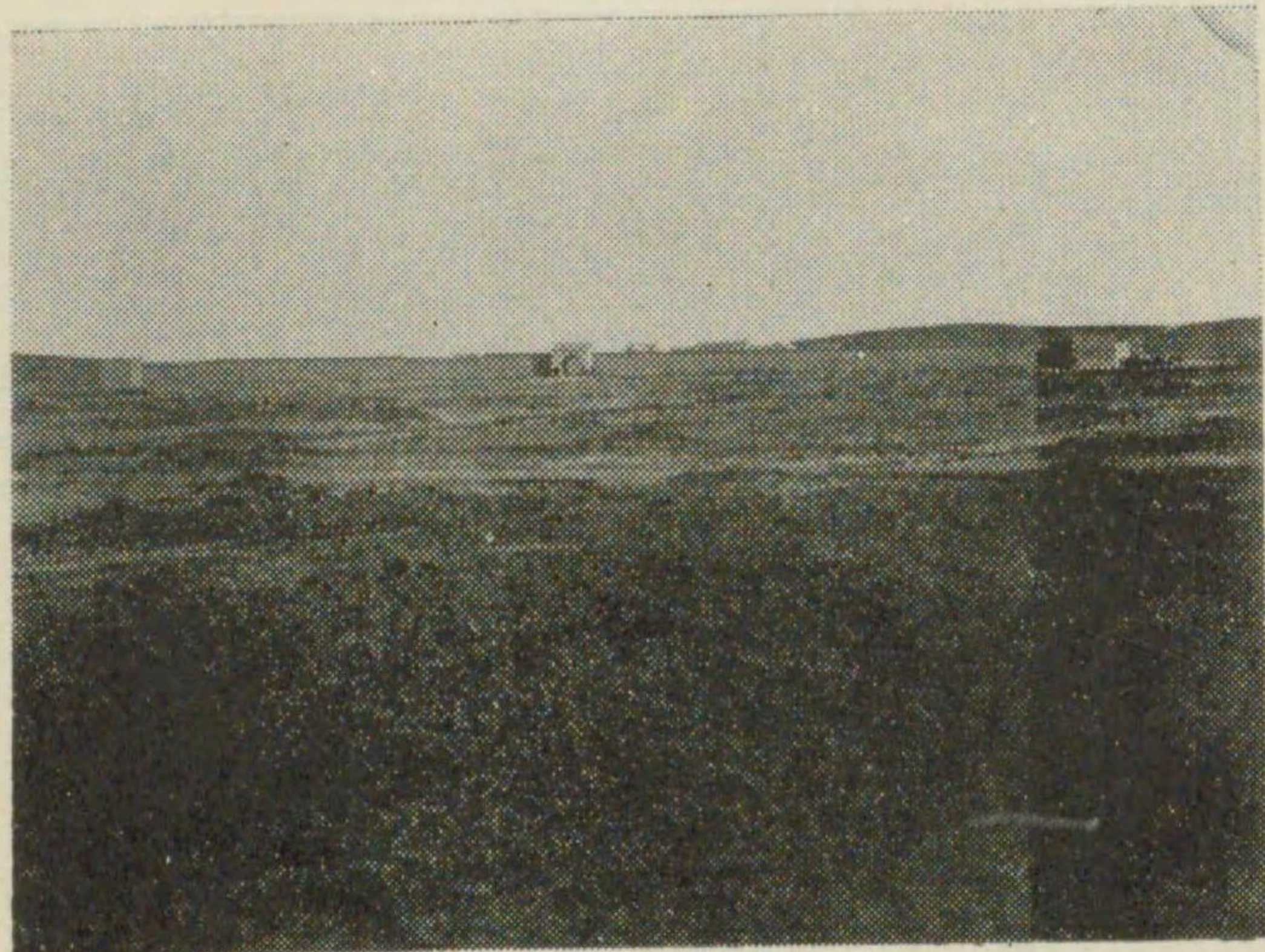
この河を渡り、左の丘上に喇嘛廟を見た。這是シンスム（新廟）である。それから四十支里許り行つて、天山溝に到看、下車して茶を飲んだ。

此處は支那人の近頃移つた農村であるが、今日しもこの村に結婚式があるとして、二三の婦女が美しい服装をしてゐるのを見た。これは支那本土の農村で見ると同じである。この所は既に天山縣に屬し、農作は盛で、馬糧があつて支那の農村の觀を呈してゐる。私共は此處で馬糧を買求めた。

これより少し進み、或る飯店兼客棧をしてゐる所に來た。この所に來て、始めて支那の宿屋風の家を見た。最早飯店が出來てゐるのを見ると、支那の農村が存在し、往來の旅客があることが知られる。蒙古の土地が、かくして支那化されて行くといふことが優に感じられる。

此處の宿屋に宿泊せんとしたが、既に先客が充滿してゐて、宿泊する部屋が無い。止むなく此處を立出で、野地の所を進み、天山縣や先日調べた白城の城壁を左に見、喇嘛廟に

着いた。此處に宿泊せんことを請うたが、此處には人は殆んどゐない、止むなく此處を出た。



(影撮者著) 景全の府爺公

聞く所によると、近頃この廟に支那の暴徒が押入り、銃を突つけながら佛像を奪つて行つたとのことである。斯ういふ關係から僧侶が少くなり、泊めてあげても宜しいが、人が居らないから如何ともすることが出来ないといつた。この喇嘛廟は白城調査の時、途中で見た喇嘛廟である。

それより進んだが、日は沒せんとし、空腹で寒さは身に泌み、漸く公爺府に到着した。此處で泊めて貰ふことにした。

此處は以前から知合ひになつてゐる所で、一行を迎へてオンドルを焚く等忙しさうであつた。此



(影撮者著) 蒙 一 族 貴 府 爺 公

周囲は床になつてゐて、正面に主人が居り、左右に臣下が座す様になつてゐる。中は絹の布で裝飾してあり、幕を張つてゐる。

處の老夫人から食物の原料など贈られ、餘程待遇された。

天山溝より此處迄五十支里で、本日の行程は一百支里ある譯である。

十一月二十五日 床が暖く、よく眠られた。午前六時寢床を出た。今日は晴天で、天氣は非常に宜しい。今日は一日此處に滞在して、土俗學上の調査をすることとした。

宿泊してゐる客殿の前に蒙古式のテントが張られてゐる。此處は公爺府の御主人が事務を取る時出られる所である。真中に圍爐裡があつて、その

蒙古式家屋の裝飾は先達てワール マンハで見た遼代の陵墓の中央の山水畫の室によく似てゐる。これを見ると遼代はテントの中に裝飾したことが點頭かれる。そこで三好氏に命じて、内部を撮影せしめた。

それからこの家の老夫人、家族等が出て居られたからこれを撮影した。きみ子は老夫人其他の女性と話し、日蒙の關係 温くした。私は内部の風俗・歴史上のことなど記録し、又二三日來の日記を起草し、又ノートの整理等で心地よく仕事した。明日は早く此處を出發するので、いつもより早く寢に就いた。

公爺府からアイゲン廟まで

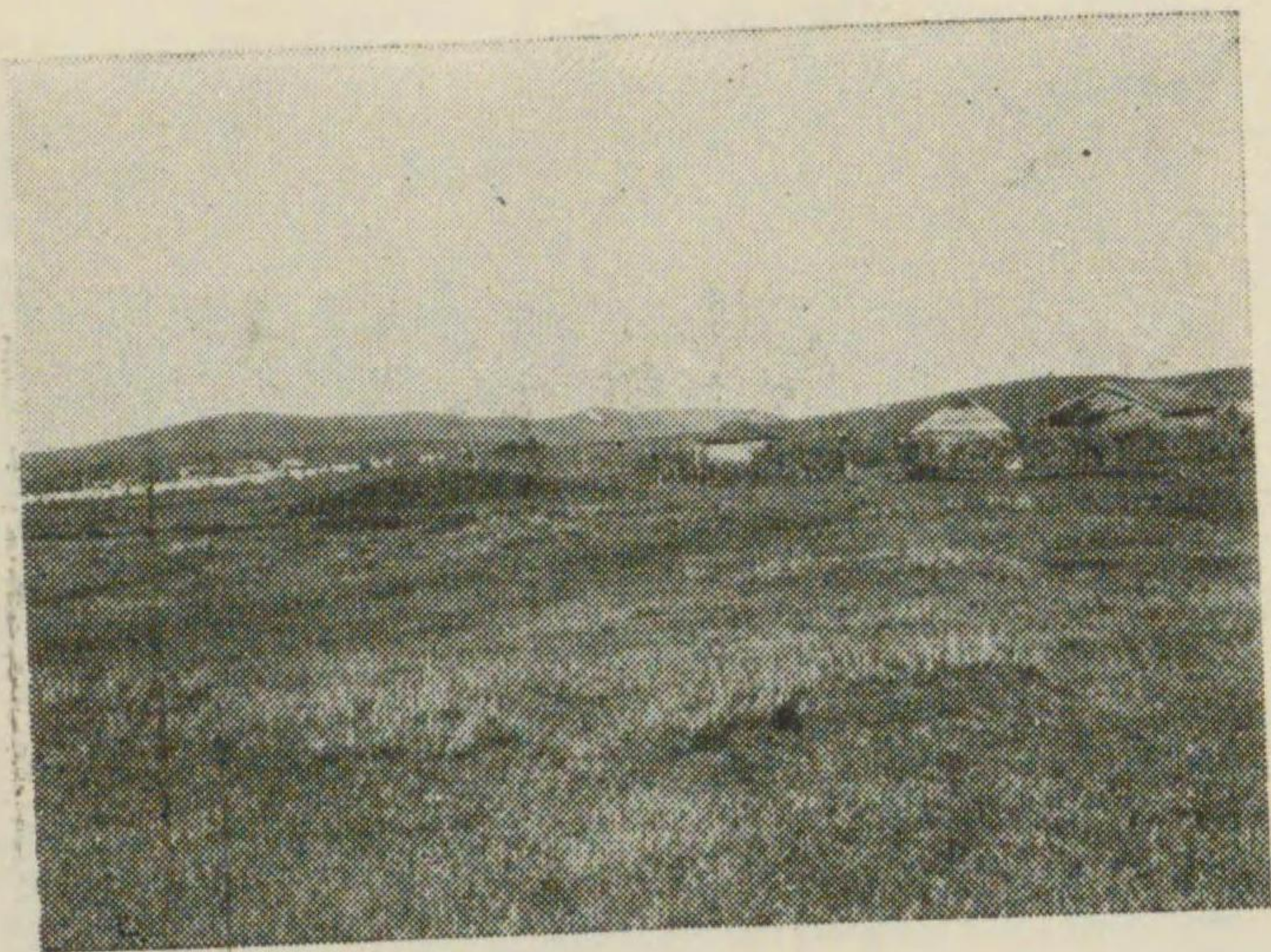
十一月二十六日 私共は昨夜十時頃目を覺まし、一同を起し出達の準備をした。かく夜半に此處を出達する譯は、公爺府からアイゲン廟に至る間は馬賊が出沒する所であつて、常に旅客が彼等の害を受ける。それで私共は夜半に此處を通過しようとして、時ならぬ時間に出發したのである。

そこで午後十一時餘、公爺府衙門を出た。時しも天には星が輝き、星明りだけで道は十
分わからない。そこで提灯に蠟燭を點もして進んだ。道は東へ東へと行く。幸にして今夜
は温度は暖かで、風なく私共は車上で毛布を引被つてゐた。

今このあたり一帯は馬賊が出没する所であるから、互に警戒して進んだ。巴林旗から私
共に蒙古の馬隊五名及び此處より付けて呉れた一人の蒙古兵は、道の左右前後を注意した。
かくしてだんだん進んで行く程に、空が明かるくなつて來た。

地上を見ると一面に白妙の布を敷いた様な雪景色である。この雪は十一月十六日に降つ
た雪であると云ふ。道は先日通過した所から、北の方に向つて進んだ。最初に曹達ハッのある
平地、それから丘陵の上を歩き、五十支里許りで、バホンチエ村に到着し、下車した。時
に午前九時であつた。

此處は蒙古人の村落であつて、私共はその中の或る一軒の家に入つて朝食した。今回通
過する道は、蒙古人の村落の點々とする所で、蒙古人街道とも云ふべき所である。先日通
過した道は移住支那人村落の間で、時に人家のない所もある。



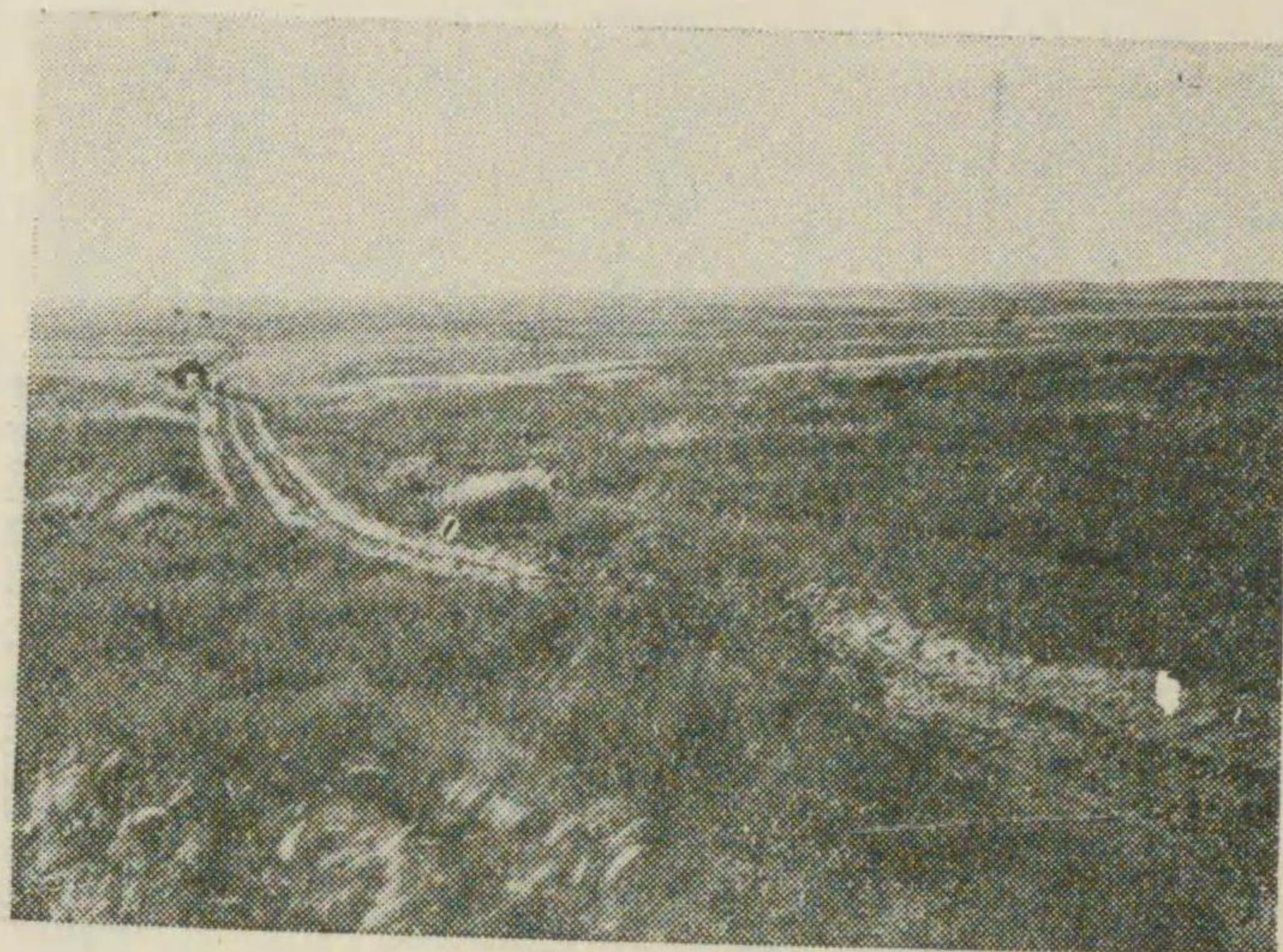
(影撮者著) 落村の入古蒙

途中林西縣城から通遼へ向ふ牛馬が休んでゐるのを見た。この牛車は蒙古人の牛に拽か
して行く小さな車で、この車の上に荷物を積み、林西縣城から通遼へ運搬、往來するので

ある。
私共の採集してゐる標本も、是等二臺の車に依
頼してあるが、牛車の歩み頗る緩く、人間も閑散
であるから、通遼・林西縣城間が二十四五日もかゝ
る日程である。

この間の地形は廣漠たる平野で、その上に雪が
一面に積つてゐるのである。乗馬の人、車等が地
平線上を歩いてゐる有様は、まるで大陸的な倂で
ある。今日公爺府を出てから、山はなく地勢は大
陸的の柔かいうねりのある廣野である。

これまで既に調査したシラムレン河の上流地



(影撮者著) 景光るす行進の行一私

る。室内はランプを點もし、ストーブの設けすらある。先日泊つた時とは雲泥の相違で、非常に今度は待遇をよくして呉れた。

帯・興安嶺の巴林蒙古といふと全く山の中である。然るにこのあたりは山を見出すことの出来ない広い平野であつて、大陸的の佛がよくわかる。そこで私共一行を入れて、この廣大なる景色を、三好氏をして撮影せしめた。これを以つて見るに、遼即ち契丹の遺跡の本據地は、シラムレン河の上源地の興安嶺山中にあることがよくわかる。

かくして午後二時半無事にアイゲン廟に到着した。廟は先日宿泊した所であるが、今見ると大變美しく、殊に美しい室内に私共を泊めて呉れた。

この室には椅子、テーブルを置き、オンドルもある。



(影撮者著) 行一の私

本日の行程は百支里程來てゐるのである。途中は馬賊が出沒する所であるが、今日無事であつたのは非常な幸である。馬賊に就いて茲に一つのエピソードがある。

それは前に書いたアイゲン廟から公爺府へ向ふ途中、私共より一兩日遅れて通過した支那人の貨物を載せた馬車があつた。それが馬賊と出會して大變な目に會ひ衣服其他を奪はれた。馬賊はその時、一兩日前に日本人が通過したであらう、その人達の行方を云へと迫つたが、その人は知らないと答へたので散々鐵砲の臺尻でなぐられた。この様な物騒なことがあつたのである。この馬賊は盡く支那人であつて、この間は人家がないから、全く馬賊の仕事場になつてゐるのである。

午後八時頃淺野氏が私共の部屋に來られて、明

朝三時頃此處を出發すると云はれた。アイゲン廟と開魯縣の間は馬賊が出沒する所である。そこで明朝三時頃出發と決めたのである。

アイゲン廟から開魯まで

十一月二十七日 本日は昨夜の約束の如く、一行は午前三時に旅装を調へ出發した。蒙古兵が護衛して進んだ。蒙古兵は昨日と同じであるが、今日は銃に彈丸を込めてゐる。蒙古兵は射撃が上手で、見事に敵を射倒すから、馬賊も蒙古兵には多少恐れをなしてゐる。出發したが夜は明けず、少しばかりの星の光によつて進んで行つたが、僅かな提灯の明りでは道はわからない。殊に地上は雪降りのあとで、或所は氷つて居つたりして、道は少しもわからぬ。

雪は先日の風で、高くなつたり低くなつたりしてゐて、馬や車を進めるのに非常に困難である。このあたりから見ると、一昨日・昨日通過した所よりも、雪は多いらしく、深くなつてゐる。

アイゲン廟の前の河を渡り、單調な道を、探しつゝ右往左往に進み、十五支里許り來ると、夜が明け太陽がさし昇つた。ここに於て、私共の行くことは自由になり嬉しかつた。それから再び遼河を渡ることとなつた。今日しも遼河は結氷してゐる。このあたりは遼河の河幅が廣い所である。氷上を歩いて前岸に渡つたが、楊の林が美しく眼に入つた。この楊の枝が太陽・雲と相映じて恰も油繪を見る様で最も宜しい。

此處を通過して二十支里で、朝早く出發したから馬を休めることとした。此處に柳樹が數本あつて、家は一二軒あり、井戸もある。井戸の水は氷つてゐるが、これを破り、水を汲んで、馬に飲ませ、秣を與へた。

此處を出發し、二十支里程來て一村に到着したが、此處は前に晝飯に休息し、石槌を買求めた村である。此處で休息せんとしたが、此處から開魯縣迄は三十支里許りの道程であるから、一同決心して只走りに走つた。

この時一方から、乗馬の支那人が夥しく現はれたので、馬賊の襲撃かと思つて身構へしたが、彼等は數日前馬賊討伐に向つた支那兵の一隊であつた。そこで彼等と相合し、進ん

だ。

それから前日休息した柳樹の森のあるハラモトに來た。このあたりに來ると、前方は廣漠たる平野で、沙地となつてゐる。先日休息した、かの柳の樹の多くある所に、今日しも驢馬の群が遊んでゐるのは、恰も鹿が集つてゐる様に見えた。

此處を過ぎ去り、東に向ひだんだん進んで、初めて開魯の古塔の頭が見えて來た。それから五支里程進んで西門に達し、此處から入城した。

これまで淋しい所ばかり見た目で、この開魯縣城に入ると、商家は軒を並べ、往來は人通り劇しく、商店の華かな品物等、別世界に來た様な感じがする。私共は以前宿泊した中華旅館に投じた。時に午前十二時であつた。本日の行程八十支里。

今日泊つた室は以前の室であるが、既にストーブが置かれ、石炭が用意されてゐて、室内は非常に暖かである。かくの如く支那の旅館もだんだん昔と違つて來て、ストーブを焚く様になつた。尙美しいランプもあつて石油で火を點じた。

廣漠たる蒙古の地に開魯縣が出來、かくまで發展しようとは思はなかつた。食事、買

物し、町の様子など見て宿に歸つた。その時に先日この宿をとることを周旋した王慶軒氏が來て挨拶した。

彼の話を聞くと、先日私共と別れてから、通遼に用があつて行き、少しの取引した金を持ち、買物等して通遼から此處まで來る途中、七八十名の馬賊の一隊の爲に、所持品・衣服其他を奪はれて、漸くシャツ一枚で歸つたとのことである。そして、「明日の貴下の通遼行も注意して行かれない。明日の自動車も二番目の自動車にして貰ひたい。それは第一番目の自動車が馬賊に會へば、二番目の自動車を中止し、もし二番目の自動車が出會した時は開魯に知らせて貰ひたい」と注意して呉れた。

本日はこれまでの旅誌・ノート・荷物等を整理して寢に就いた。この開魯は二ヶ月餘に此處に來たのであるが、これ迄他の土地を見慣れた關係上、この市街が非常に立派な町であると感じられた。

開魯——通遼——鄭家屯

十一月二十八日 今日に通遼に行くべき日である。私共一行は自動車を借切り、午前十時に第二番目の自動車で出た。私共一行中の支那人の或者は、馬車で荷物を積んで行くことにし、我々より先に通遼に出発した。

此處を午前十時に出発したが、地上は開魯の以西よりも雪が深く、消えて居らぬので、地上は満目盡く白色で單調な景色である。自動車は速力を出来るだけ出して、雪中を進む雪景色の爲に前に見た高粱の刈株其他の景色とは大いに異つてゐる。

先日自動車の水溜に落ち入り、繩で引揚げた所も難なく突破し、だんだん進んで行つたが、私共一行より先に出発した二臺の大車に途中で出會した。彼等の車は明朝でなければ通遼に着かぬ。この大車には通遼開魯縣から保護としてつけてくれた支那巡警が五名乗つてゐる。

私共一行の中に淺野氏は林東縣城から一人の支那子供のボーイを連れて來てゐた。これまでこの支那子供は、平氣で車に乗つたり、馬に乗つたりして來たが、今日は初めて自動車に乗つたのである。彼は生れて初めて快速力の自動車に乗つたから、目が眩み、嘔氣を

催し、俯いたままで恐れを爲してゐた。

此處で大車二臺に出會したから、支那子供は自動車から降りて馬に乗つた。彼の考へは乗馬しながら自動車に沿うて走るといふ考へで、自動車が馬より速いことを知らなかつたのである。自動車はラツパを鳴らして雲・霞の如く走り、彼は遅れて大車と共に行き、滑稽の至りであつた。

トウトウインズに來り、自動車は暫く止つた。此處は開魯・通遼の中間驛で、少し許りの家が集つてゐる。此處で暫く休み、馬賊の状態を聞くと、一番の自動車も無事に通過したとのことである。このあたりが一番馬賊の出沒する處で、旅人は屢々犯されるのである。

この中間驛は先日ベストがあつて入らなかつた所である。暫く休息の後、此處を出た。この時に尙一臺の自動車が止まつて居つたので、これと共に出た。これは一行の自動車を待つてゐたのであつて、道連れとなる方が寧ろ安全であるからであつた。

そこで兩方の自動車が一緒になつて出た。これから先も亦警戒すべき處である。丘があつて雑木が生えてゐる所があるが、この様な處の裏手に馬賊が潜んでゐるので、互に警戒

して此處を通過した。幸に警戒すべき場所を急ぎ通過することが出来た。
途中二つの喇嘛廟を望みつゝ、何時の間にか遼河の河畔に到着した。遼河はもう結氷してゐるので、先日の様に舟で渡ることなく、氷上を自動車で通過し、午後二時半、通遼に到着した。

早速滿鐵鄭家屯出張所に行き、今夜は此處で宿泊することとなつた。夜間風呂に入り、愉快に食事し、これまでの旅行のことなど語り合つた。領事館出張所松波徵氏・大倉組の齋藤邦三、國際運輸會社松山翠氏等が來訪せられ、色々談話した。

十一月二十九日 昨夜はどういふものか私は非常に苦しかつた。食物にあたつたのではないかと思はれたが、今日になり大變宜しい。しかし食事を攝らず茶だけ飲んで早朝出發した。領事館出張所・大倉組其他に挨拶して驛に出たが、一行の人々は既に來て居られた。午前七時の汽車で通遼に出た。さうして汽車に乗つたが、科爾沁左翼中旗銜輔國公の蒙古人色拉哈旺珠爾氏が同乗せられ、日本語をよくした。きみ子や三好氏と暫く話合ひ、私も後で話をした。

汽車の中から地上を見ると、白雪で覆はれてゐる。這是林西縣あたりと相違せる光景である。この雪は近頃降つたもので、かの私共が大板を出發した際、土砂風のあつた當日降つた雪である。

午前十時に汽車は鄭家屯に到着した。滿鐵公所の各位の出迎へを受け、私共は自動車に乗り、鄭家屯滿鐵公所長菊竹氏の御宅に投じた。

菊竹氏は數日前から熱に冒されて居られたが、私共が歸つたといふので、出て來られて數時間話した。私共は此處へ歸つたが、衣服は夏服で役立たない。そこで仕立屋を呼んで林西縣で買つた毛皮の表地をつけて仕立てゝもらふ様に依頼した。

滿鐵公所の各位は私共一行の爲に、歡迎會を公所前の旅店で開かれ、互に胸襟を開き談話した。今夜菊竹氏は病を押して私共の室に來られ、長い間遅くまで、蒙古談に時を費した。

十一月三十日 今日早朝より起き出で、菊竹氏の圖書室に入つて讀書し、龍藏は『遼史』を殊に熱心に讀んだ。

午前十一時三好氏が来り話し合ひ、午後一時領事館通遼出張所員の方が来られ話された。菊竹氏は昨晚の話が身體に障り、熱が高くなつた。

通遼——四平街——奉天——鞍山

十二月一日 私共は午前中、菊竹氏圖書室に入つて讀書し、午後一時半に出發することとした。今度鄭家屯に到着して、毛皮の衣服を注文して置いたが、出來上つたので、私共及び三好氏はこれを着し、又暫く滿洲方面を調査することとした。

この日菊竹氏は矢張り熱に變化が無い。四平街から松屋の夫婦が来て、その細君が看護することになり、これで一安心した。私共は菊竹氏と別れて、三好氏と共に午後三時鄭家屯驛を出發した。此處で公所の人々、先日來旅行した一行が見送られた。

この時四平街から菊竹氏を見舞に來られた松屋の主人は汽車と一緒に乘られた。同氏はこのあたりのことをよく知つて居られる人である。此處に汽車がまだ無かつた時に、四平街から鄭家屯に來る間、蒙古の村落や支那の村落を通過して來たとか、或は同氏が滿洲に

來て、艱難辛苦して地盤を築き上げた經過等を暫く話された。

汽車中より四方を眺めると、數ヶ月前と大いに異つて居つて、地上は白妙の布を敷いた様になり、何處を見ても眞白である。遼河は既に結氷して居り、橋の流れた所も立派に修繕されて、その上を汽車は走つて行つた。

かくして午後六時頃四平街に着いて旅館に投じた。此處は日本間である爲に、久しぶりに日本の部屋で休んだ。此處に到着すると、此處の家族・女中等が出て來て、私共一行が途中馬賊に襲はれた話が新聞に出て、非常に心配したといふ話をした。これは何かの間違ひであつたのであらう。

十二月二日 朝早く起き、朝飯をせずに、午前六時四十分の汽車で奉天に向つた。見送りとして松屋の主人が來られた。

この汽車は一二等が無く、三等許りのもので、これは支那人の爲に出來てゐる汽車である。乗つてゐる人々は、私共三人の外は殆どすべて支那人で、彼方にも話が始り、此方にも話が始つた。彼等や驛々に入出入りする支那人の光景を興味を以て眺めた。

私共は支那人と面白く話した。此處に乗つてゐるのは、質朴な下等プロレタリアの人々であつて、無邪氣な支那人である。

汽車から地上を見ると、此處も一面白妙の雪で覆はれ、何處を見ても雪景色である。ここに於てか、この有様では最早地上の採集は難しからんと感じた。幾多の驛を通過して單調な變化無き道を、支那人と雑談しつつ、昌圖を右にし其處に驛塔の聳えてゐるのを見た。更に開原・鐵嶺の古塔を見ては、私共は秋の頃の景色と對照などした。この塔の立つてゐる所の下に、河が流れてゐる俤は宜しいものである。かくして午前十一時頃奉天に到着した。

汽車の中から電報を打つて置いたので、ヤマトホテルの人は自動車で驛に迎へに来て呉れたが、私共はすつかり毛皮の支那服であつたので、別人だと思ひ、車に乗らうしても違ふ人を待つてゐると云つて乗せない。

間もなくヤマトホテルが嫌になり、瀋陽館に投じた。此處でも最初は支那人と思つたか、下の部屋に通したが、後日本人だと思ひ部屋を替へると云はれたが、矢張り三人共同じ所

に止まることとした。

今日奉天で總領事館・滿鐵公所・大阪毎日新聞社奉天支局等を往來し、互に來訪し合つた。今夜奉天の市街を見物した。買物に行つても支那服を着てゐる爲、皆支那人と誤り、大變困つたが、又滑稽でもあつた。

海城から拆木城の古塔とドルメン調査

十二月三日 これから奉天を出發し、海城の方面に行くこととした。

午前九時十分發の汽車で海城に向つた。汽車は二三等の列車しか無く、二等室に入つたが、私共は毛皮を着てゐるので、大變暖かつた。寧ろ暑い方であつた。然るに地上を見ると、引續いて白雪に覆はれてゐる。

途中遼陽・鞍山兩驛に、遼陽・鞍山の知つてゐる人々に傳言を鐵道の方からして貰つた。午前十二時四十分海城に到着し、驛長其他の方から出迎へを受け、大東旅館に投宿した。此處で食事を終り、私共と三好氏は馬車で舊海城に行つた。舊海城は海城縣のある所で

周囲は磚を積める大きな城壁である。その中に人家が軒を並べてゐる。或所に高い岩山があつて、其處は公園になつて居り、建物がある。其處に一寸上り、此處の碑文を見た。又海城の南門城壁の下の方は、古い碑文其他で石垣としてあるが爲に、此處に古い碑文の臺石が挾つてゐる。

龍藏が明治二十八年の若い時に此處に来て、この南門の裾の石垣の中に挾つてゐる色々な古い碑文を調べた。臺石の中に獅子^{ライオンハンティング}狩のサツサン朝の形式の彫刻をしたものがある。獅子と人間が格闘してゐる所で、これはサツサン朝の圖様であつて、日本の法隆寺又は正倉院の獅子狩と同じであると當時の『太陽』に發表したのは此處である。

此處で尙挾つてゐる彫刻石を見、又彼方此方に散在してゐる臺石等を調べて宿に歸つた。さうしてこれ迄の日記の整理・ノートの整理などした。

十二月四日 今日はいくから拆木城方面に行かんとした。これはドルメント古塔を調べんが爲である。此處の方面は龍藏は數度來た所で、今回は尙きみ子・三好氏がこの方面のことを知らぬのと、尙龍藏が此處を精査せんが爲に同地に向ふのである。

そこで警察署に依頼して、一人の支那人宿望と云ふ人を案内者として頼み、二臺の馬車で午前七時半に出發した。先づ道は舊海城内を抜け、沙河に達した。此處に假橋が架けてあるので、この橋を渡り、河々左にして東の方に向つた。

今日しも先日來の雪で、地上は一面白くなつて居り、處々道路は凍りつき、車をやるに頗る困難した。數家の村落・小郷・アンペラを敷ける橋等を經過して峠にさし掛つた。

この峠に差掛り少しく下りようとした所で陶器を焼く家を左に見た。此處の陶器を焼く所は屋根の上に青い瓦を載せ、水甕・陶器などを焼いてゐる。奉天の宮殿の瓦は此處から焼き送つたものである。

此處を通過し、四十支里で午後一時頃拆木城に到着した。此處は周囲は丘陵で平野を帯びその中に沙河が流れてゐて、拆木城は沙河に瀕した所に存在してゐる。一筋町で、小驛の俵が残つてゐる。

此處は今日沙河々畔に存在する一小驛に過ぎないが、昔は相當な所であつたのである。それは町の入口に磚塔が立つてゐるのを見ても知ることが出来る。



(影撮者著) 塔古の城木拆

今日はドルメンの方に行かんとしたが、専らこれから古塔の調査を始めた。この塔は六角で、明治二十八年に調べた所であるが、其後一度此處に來た。今日は三好氏をしてこの塔の六角面の各面を細かく撮影させ私共はその下で雪を掻分け古い瓦・陶器の破片等を採集、調査した。この調査は非常な寒さを冒し、夕方に近づいたから宿に歸り、夕飯を攝つた。

私共の泊つた宿屋は、沙河の岸にある大きな家で、汚い家であるが宿屋としては大きく、既もあり、馬等大變此處に止めてある。

この時にこの地方の巡警局出張所から巡警が來て、護照を持つてゐるか否か尋ねた。私共は今日護照を持つてゐたのに拘はらず、入れ場所を忘れたから、今護照の無いことを話

した。そこで巡警は一度歸つたが、再び警部の様な男が來て、護照に就いて質問し、兩方共要領を得なかつた。

この爲に同行の支那人宿望氏に役所まで來て貰ひ度いといふ話で、同行の支那人は一晚同所に泊つた。その間に彼等は海城の巡警局に、私共の身分や、どんなことをする人が電話で聞いた。その晩はこんなことで費した。

十二月五日 同行の宿氏が役所から歸られ、その時に海城縣公安局第二分局聯合所一等局員崔德彰氏が巡警二名を伴ひ來り、話がよく判つた。彼は大變誤解であると深謝したが實は護照を示さないのは此方の落度である。幸に笑ひで濟み、朝食を一緒に愉快にした。それから調査は何處でも宜しいといふ話であつた。

斯ういふ談判や話の爲に時間が遅れ、午前十時頃昨日乗つて來た馬車二臺でドルメンの方へ行くこととした。ドルメンのある所までは八支里許りある。此處の調査は今回で三度目である。

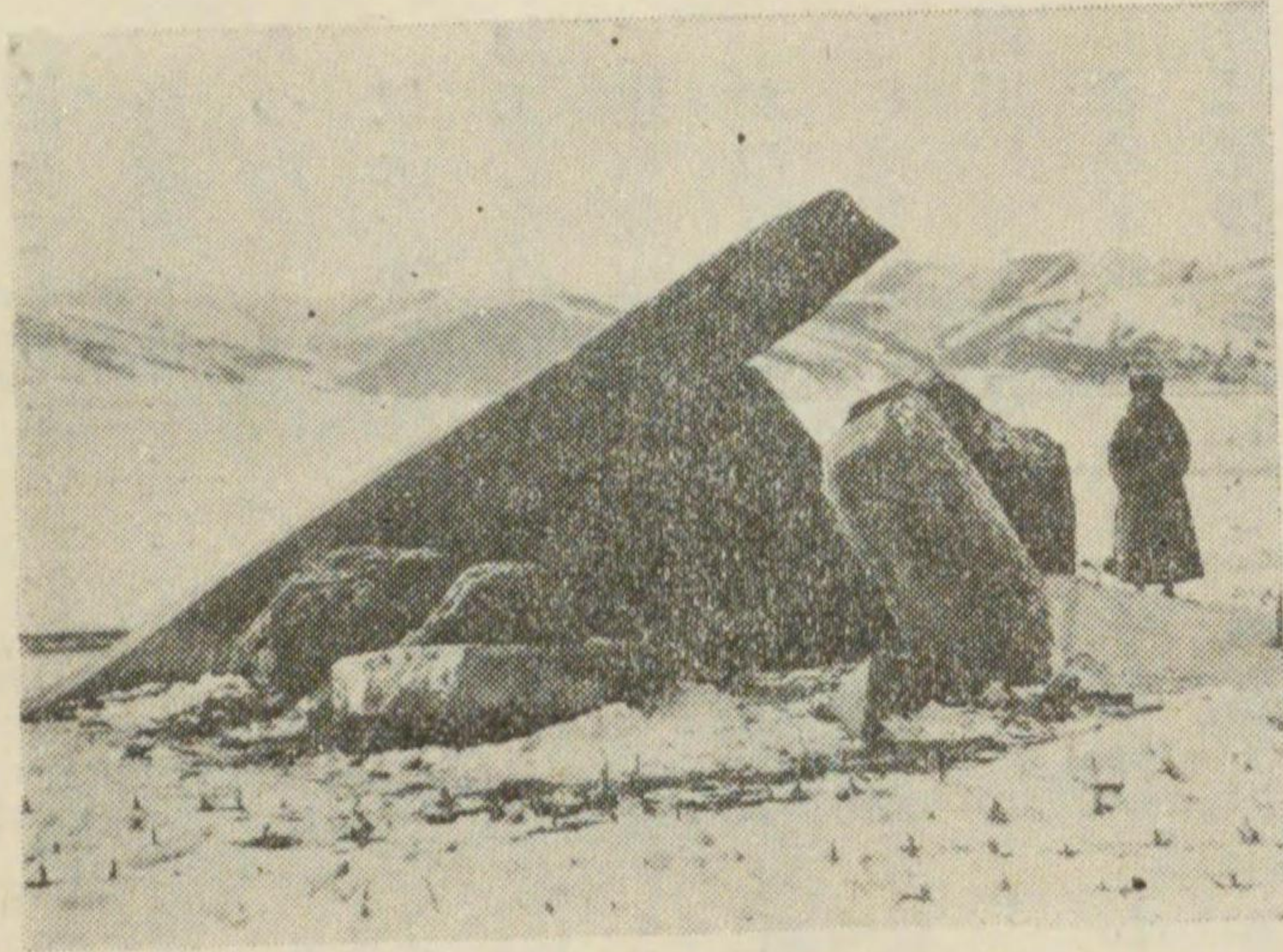
それで宿を出て、暫くして沙河を渡つた。この沙河はその名の如く、美しい砂の中を流

れる河であつて、大變美しい。或所では結氷してゐた所もあつた。對岸に渡り、支那人の村落を通過し、山に向つて進んだ。さうして山から突出してゐる丘陵の下で車を止どめ、丘陵の上に乗ることとした。

この丘陵にドルメンが二つある。一つは下の方に、一つは丘陵の上に存在してゐる。下の方は崩れて破壊されて居り、天井石は傾斜して存在してゐる。上の方は完全に残つてゐる。下の方の壊されてゐる方は、或石は八角形に石を打割つた形跡がある。這是尊勝陀羅尼幢などを造らん爲にかうしたものであらうか。

二つのドルメン共すべて花崗岩で、大きなものである。このドルメンは龍藏が明治二十八年の秋に発見したもので、當時沙河を中心として調べてゐる際に、海城と秀巖の間を往來の際、発見したものである。當時このドルメンの爲に數日滞在して調査したことがあつた。その當時と今と變つてゐない。

村人の話によると、或石屋が下の方の石室を壊しかけ、腹が痛くなり一命を損じようとしたことがあつた。その爲にこのドルメンは手を付けず今日に残つてゐるとのことである。



(影撮者著) ンメルドルあに下丘

當時龍藏の発見した時は、初めてドルメンに接して、これが果してドルメンか疑問を抱いた。しかし外國の書物を見てゐたので、どうしてもドルメンと思ひ、思ひ切つてドルメンであると『太陽』誌上に發表したのであつた。

これは思へば最もなつかしいものである。

けれども以上のドルメンは、この傍に石器時代の遺跡があつて、石器時代の遺物が出るから、このドルメンは石器時代即ち有史以前のものであらう。形状から見ると、龍藏は朝鮮のドルメンを南北二つに分けてゐるが、そのうちの北部のものに似てゐる。

即ち朝鮮南方のドルメンは簡單なる支石三個又は四個を以つて、上に一枚の天井石を支えてゐる。然るに北方のドルメンは四枚の戸をもつて組

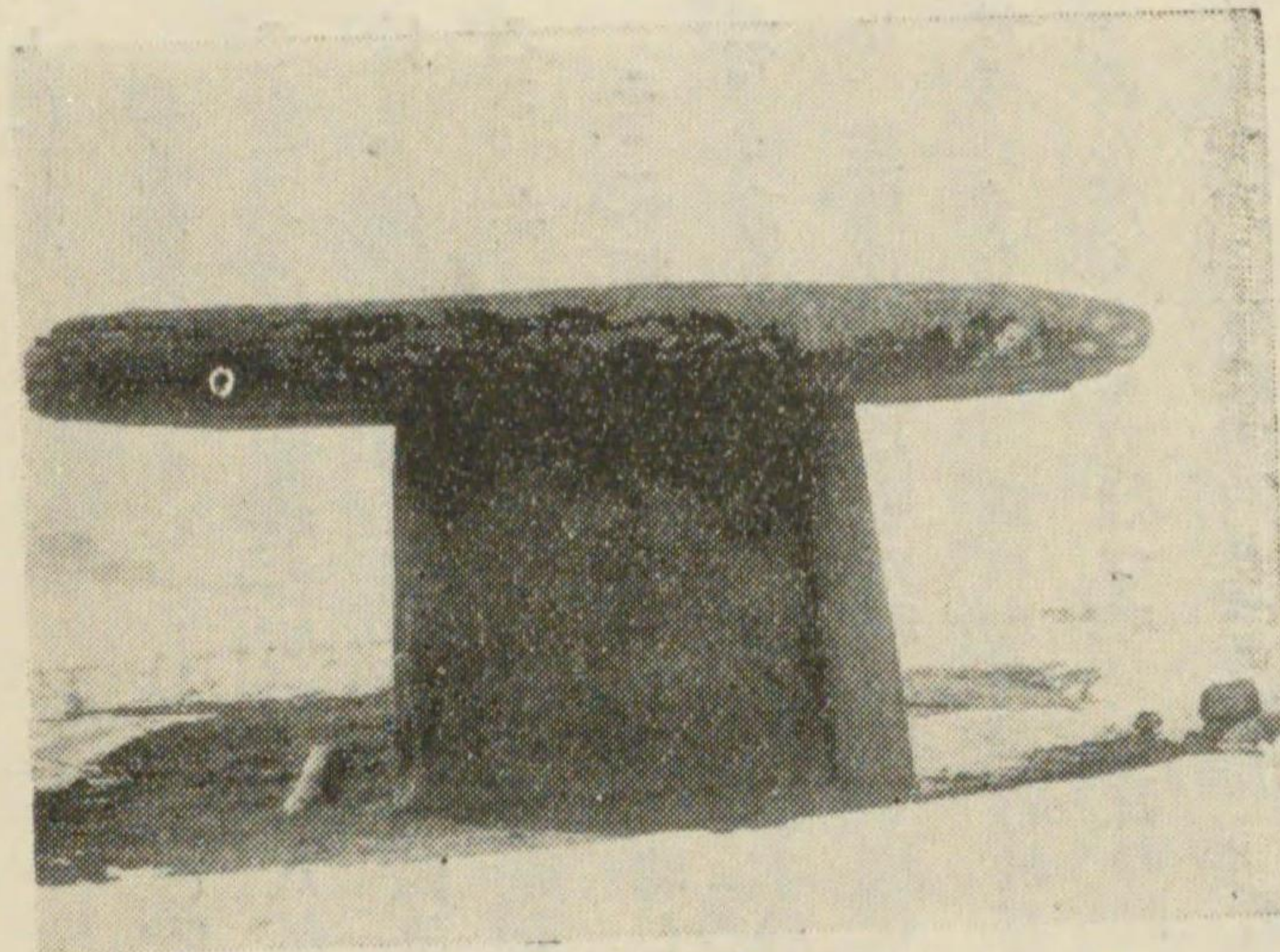
合はせてその上に一枚の石を置いてゐる。此處のドルメンは北方系のドルメンである。此處でドルメンに就いて色々な調査をしたが、此處も雪が積つてゐる爲、調査に困難であつた。

以上丘陵上にある完全なるドルメンをよく注意すると、或面には金屬を以つて壁の所を加工した痕跡がある。これは此處に或時代に殿堂の様なものが、このドルメンを中心として建てられたものでは無からうか。

かの蒙古で見た二つの石室も利用されてゐるので、これも利用されてゐる傾きがある。これは想像であるが、遼代あたりに二つのドルメンを利用した様に、拆木城のドルメンも利用したものではあるまいか。

このドルメンの附近で布目瓦の小さな破片を得た。又丘陵の下でも拾つたから、丘陵一帯に建物があつたことが考へられる。この附近の支那人は以上二つのドルメンに就いてフオルクローアを傳へてゐる。

それは嫂と姑の話である。兩女が仲が悪く、嫂はその家を逃れて悲しみの餘り泣叫び、



(影撮者著) ンメルドルにあに上丘

遂にそれが石室となつた。これが今丘上に残つてゐる石室である。しかるに後から後悔して姑がこの處へ来て見ると、彼女は既に石となつてゐるので、自分も後悔して歎き、石となつた。下に残つてゐる石室がこれである。そこで此處の土地を姑嫂石と呼んでゐる。

この邊沙河を前にし、丘陵が沙河に突出して眺望に宜しい。此處にドルメンのあるのは偶然のことではない。以上の二つのドルメンは當時此處に住つてゐた大酋長の葬られた所と思ふ。

以上調査を終つて更に金塔の方に行かんとしたが、最早時間が無い爲本日の調査はこれで打切り、これから海城へ歸ることにした。午後二時ドルメンの所を出て、沙河を渡り、拆木城に歸り、公安局出張所に一寸挨拶して、これから歸途に就くこ

とにした。

抑も拆木城を中心として、この附近に三つの塔がある。これは鐵塔・金塔・銀塔である。この三つの塔は龍藏が明治二十八年の時發見し、細かく調査し、又先年此處に来て銀塔を除き、鐵塔・金塔を調査した。鐵塔は拆木城にあるもので、他の二つは離れた所に立つてゐる。共に遼時代のもので、研究上最も面白い。

そこで拆木城を出發したが、時しも天氣は曇り、水蒸氣の爲に暗くなつた。車を進めたが、四方も辨じ難い。地上の樹木の枝は、雪の花の如きものがかり、銀色を呈して美しい。道路は此處に來た時は堅く氷り、馬車で行くのは困難であつたが、今や氷は溶け地面は柔かくなつた、爲に車の進行は非常に樂である。

だんだん進んで行つて、昨日の峠に來り、これを上つて行つたが、夜になりだんだん暗くなつた。車は雪明りで進んだ。雪の夜道を進むことは氣持のいゝことではない。幾多の村落を通過して、沙河の岸に來た。

海城の城は對岸に見えるのであるが、時間の都合でもう閉門してゐて、此處を通る譯に

は行かない。一體支那の城は時間があつて門を閉ざし、それから容易に中に入れぬものである。そこで道を変へて行くことゝした。

これから進み、最早沙河の橋を渡ることは無駄になつた。そこで道のない氷の上を車で渡り、海城の西門外に沿うて西の方に少し行き、日本の居留地の入口に出た。さうして午後八時漸く海城の旅舎に着いた。

この時に同行の宿氏は海城と拆木城との間は馬賊が出沒する所で、殊に貴下等の如く夜間通過は何人もせず、途中幾度か心配して馬賊に注意して來たと云つた。

このあたりは蒙古・北滿と違ひ、今日は氣候暖く、水蒸氣が上り、地上の氷つてゐる所は溶け、河が流れてゐるのを見ても暖かいことが判る。又北滿・蒙古の方が耳が寒くなるが、今や夜間を通して馬車に乗つて來たが、耳は寒くない。これで南滿とは氣候に變化あることを覺ることが出来る。

十二月六日 午前八時二十分の汽車で海城をたち、九時半頃鞍山に到着した。先づ扇屋旅館に投じ、それから直ちに馬車で鞍山地方事務所に出向き、林所長を訪ひ、今回發見の隆昌州の畫像のことに就いて相談した。

一體この隆昌州の畫像石といふのは、この夏支那人が日本人のU氏に話した結果、どうかしてその人が買取りたいといふので、何人にも話さずに秘密にして置いた。これがだんだん問題で大きくなり、終に林所長に相談を持ち掛けられた。ここで初めて隆昌州に畫像石があることを知つたのである。

然しU氏はこれまでの行きがかり上、一切秘密にし、何處にあるかはつきりした所を知らさない。これは氏の都合もあらうが、學術上のことは秘密にすべきでないと思ひ、これを見に行くことに就き、私共は林所長に相談したのである。

林所長が知らうとしても、U氏が話さぬので、彼方此方聞き合はして、隆昌州の某所に存在してゐることを漸く知り得た。鞍山地方事務所苗圃に勤めてゐる支那人のM氏が、これを知つてゐるといふので、その人に案内させることにした。



(影撮者著) 花の雪の景校學中鞍

かくして所長の所を終り、鞍山中學校を訪ねたが、矢澤校長・梅本氏等が出て來られ、暫く談話した。それから中學校に集つてゐる古物を見、その中二面の鏡を撮影した。這是

遼時代のもので、一面は遼陽附近から出たもので、もう一つは鞍山の某山麓から出たものである。

中學校を出て宿に歸つた。今日は早朝より昨日の天気と同じく、空は曇天、地上は雪景色で、樹の枝には雪の花が懸かつてゐる。この雪の花の懸かつてゐるのは珍しいのであつて、稀にこれがある。本年は雪の花が久しぶりに懸かつたものであると云ふ。

きみ子は林所長・矢澤校長・來島・梅本の諸氏を訪問したが、今夜梅本夫人・林所長・四本氏など來訪して互に談話を交換した。矢澤校長から來訪の

由話されたけれども、明日の出發が早いので他日にした。
 十二月七日 今日隆昌州に行かんとしたが、日曜日であるから止した。それは奉天の博物館は日曜日の外見せないことになつてゐるが、今日は開館してゐる日に當るから、特に奉天に行くこととしたのである。

それで午前七時四十分の汽車で私共は出發した。今日三好氏は發熱甚だしく、宿に残して置いた。停車場に着いて汽車に乗つたが、宛も梅本氏・小野氏等と乗合はせた。氏等は奉天に鞍山中學校の運動會を監視しに行かれるのである。暫く談話し、食堂に入つて又話しあつた。

本日天氣は曇天であつて、地上は雪に覆はれてゐるが、次第に溶けて行き、雪の花も次第に消える様である。小野氏は博物學の先生で、ながらく滿洲にゐらるゝ方であるが、斯くの如き雪の花は十數年間に二三回見たとの由である。

午前九時奉天に到着して、直ちに瀋陽館に投じ、一寸休息の上、滿鐵の公所を訪ひ、木村氏が出で來たられ、暫く談話した。滿鐵公所より木村氏をつけて戴き、博物館に赴き金

氏に會つた。

先づ開泰七年の銘のある石棺の拓本を始めた。この石棺は大理石で造り、彫り抜いたものである。外部の側には龍の浮出し彫刻がしてあつて、側に開泰七年の銘がある。蓋には寶相華の模様が沈み彫りにしてあつて、非常に立派なものである。

開泰七年は遼の興宗の時である。その時の人を火葬にして骨を入れた棺である。この棺は朝鮮の高麗朝に存在するそれとよく似てゐる。これは日本の藤原時代の經宮の模様によく似てゐる。五代から北宋あたりの佛が十分窺はれる。この石棺は奉天から出たといふが大變研究に値するものである。

私共が奉天に來たのは博物館の以上の石棺のみを見に來たのが、一つの用件であつた。それから此處を終り、晝飯を済まし、午後一時半から木村氏の案内により、兼ねて面談を申込んであつた遼寧省政府秘書長の金氏に會つて種々話した。

同氏は歴史・地理に興味をもつて居られる。私共の今回の調査のことを聞かれ、同氏も話され、氣持のいゝ會合であつた。同氏は私共の爲に同氏が發起で、奉天の學者を集めて

一夕歓迎の意味を兼ねて晚餐の會を開かんと、日を決めて會合せんことを約された。それから總領事館を訪問し、宿に歸り、午後四時四十分の汽車で鞍山に向つた。汽車で途中を見ると、地上の雪は溶け、河上の氷も溶けて流れをなしてゐる。かくする中に空に十八夜の月は出て、下界を照らし大變美しい。

鞍山に到着し、宿に歸り、三好氏の容體を聞いたが熱が高く非常に悪い。宿屋に寝かして置くのは心配であるから、鞍山の病院に入院させた。

今夜四本氏が來訪され、明日畫像石を見に行く準備が出来たといふので、色々打合せ等した。

隆昌州に畫像石のある墓を探る

十二月八日 今日には隆昌州の畫像石を見に行かんとしたが、朝食後三好氏の病氣が心配になつたから、行くのを一日止め、三好氏を病院に訪問した。看護婦・病院の人々から、熱も下り心配する程のことはないと言はれたが、此處で數日治療することとした。三好氏

と別れ、私共は市中を散歩して買物等した。

四本氏から電話があつて、「護照が未だ到着しない。警察の人が遼陽に行つて、護照を貰つて來るから、それ迄待つて貰ひたい」と云はれた。そこで今日は數日調べて來た所のノートの整理などして一日鞍山で暮らした。

十二月九日 今日は隆昌州に行くので早く起きた。今日の一行は龍藏・きみ子・鞍山地方事務所苗圃の支那人M氏とT氏との二人である。

鞍山から輕便鐵道で大孤山探礦所事務所に到り、其處に車など用意して呉れてあつたら、其處から車に乗つて、午前八時に出發した。尙出張事務所の巡警一名、公安局出張所の巡警一名がこれに従ひ、護衛されて進んだ。

道は千山を左にして進んで行く。その間に支那の村落があり、小河の流れがあつて、道は岩が出たり石塊道で、馬車の動搖が甚しい。それから或峠に到着した。峠を下りると千山の麓であつて、千山を見上げると千山の奇觀がよくわかる。傍には雜木林があり、松の樹があつて、他の滿洲では見られぬ景色である。

大孤山から五十支里で、隆昌州の入口に到着した。入口の所に古墓の跡があるといふので、同所の支那人に案内させた。其處を見るに、もう既に壞はされてゐるが、僅かに内部がわかる。この墓は塼で壁を積み、その壁を漆喰で塗り、その上に下手な鳥を描いて居りこの鳥には赤の様なものを塗つてゐる。

這は小形であるが、壁畫のある墓であつて、これ迄知られてゐないもので、私共の今日初めて發見したものである。

その傍に石を積み、地平線の下に石室の様にしてゐる墓を認めた。これは天井に數枚の石を蓋として置いて居るのである。中に入れないから上から見る許りである。これも遼時代の墓である。

斯くして太陽の没する頃、私共は隆昌州に到着した。此處に河の流れがあつて、隆昌州はその流れに沿うて五六十戸許りある村である。宿屋もあれば酒屋もあつて、田舎の一小村落的市街である。此處を中心として點々と家がある。

河の岸には柳の樹が生えて居り、周圍は山で景色よく、支那の山水畫を見る様である。

此處に巡警局の出張所がある。警部は巡警を連れて夕方私共を訪問し、私共が何の爲に來たか聞いた。そこで護照を示し學術の研究に來たと話し、析木城の様なことはなかつた。今夜隆昌州の警部が御馳走しようと云つて來たが斷つた。警部は巡警一名を宿につけて、この邊は馬賊が出沒し、安心出來ぬと注意して呉れた。

今夜この附近の人を集めて畫像石のことを聞いたが、誰も知つてゐる者がない。色々な方面を聞き始めたが、何等手懸りが無い。折角來たのに場所が知れぬのは残念に思ひ、出來るだけ聞いたが、遂にわからずじまひで寢に就いた。

十二月十日 早朝巡警によつて畫像石が此處から西方十二支里の鸞峯と云ふ所にあることがわかつたから、私共は特に朝早く起き、早速人を先に遣はして掛合はした。斯くして後から此處を出發して同地に向つた。巡警一名が隨行してくれた。このあたり河が流れ、左右は山でこの河流に沿うて進むのである。

途中二三の村落があつて、昔は相當な街道で、海城と遼陽との間の往來であつたが、今は南滿鐵道の出來た關係上、淋れてしまつたとの話である。巡警は途中から村から村長を

伴ひ、同人等の案内で畫像石のある所に行くこととなつた。

畫像石は流に面した小高い山の上にあるので、道から大分入込まなければならぬ。即ちこれまで沿うて來た河水に流れる谷間の丘上にあるのである。後にはピラミツドの様な山が聳えてゐて、ワール マンハの様な處である。このピラミツド型の山が聳え、これが鸞に似てゐるから鸞峯といふので、この裾に畫像石のある墓があるのである。

地主が出て來て案内された。古墳は地下に存在し、すべて綠泥片岩の石片からなり、八角の穹廬形を呈し、直徑約十尺三寸五分、高さ六尺八寸、南に門が設けられ、門に二枚の石の扉が入つてゐる。各面の壁には畫像を彫刻し、その畫像石の間には各々石の柱が一本づつ置いてあつて、その柱に各壁が差し込まれる様になつてゐる。柱にも等しく彫刻がある。

天井は穹廬形であるから上に行くほど、頗る狭くなり、その最頂の所が開き、その上から笠形の蓋石が入れられ、蓋石は下から見えるやうに花形が彫刻せられてゐる。

以上に據つて見ると、この墓の形はワール マンハに在る陵墓を小さくして、塼で積む

所を石で積んだものである。そしてその石も一枚一枚の壁石で、これに畫像や紋様を彫刻してゐるのは、彼の壁畫に相當するものである。這是遼代の陵墓で見るやうな墓形の略式であると思はれる。

畫像石は綠泥片岩で出來て居り、それに人物・鳥・獸・花等を彫つてゐる。人物は色々の忠臣・孝子・烈婦を示し、或所では二十四孝にある孝行息子が魚をとる所・釣りしてゐる所や、獅子に垂つてゐる人物や、孫悟空のやうなものもあつて、非常に面白い。動物には象・獅子・山羊等があり、植物は牡丹が主となつてゐる。獅子が牡丹に戯れてゐる所の牡丹の模様の如き大變よく出來てゐる。

入口にある二枚の石の戸は、内部の模様には龍が兩方とも彫られてゐる。

この穹廬形の畫像石のある墓は、一昨々年私共が鞍山苗圃で畫像石のある墓を掘つたがそれと同じである。それは畫像石を八角にし、入口の所に門があつて、天井はわからなかつた。當時私は八角で門があることをプランに描いた（拙著『西比利亞から滿蒙まで』を参照せよ）が、これを見ると正しくその通りである。

今も云ふ通り、この墓の天井が上に行くほど狭くなつてゐる具合は、ワール マンハの陵墓を小さくしたものである。そしてワール マンハの壁畫が、此處では畫像石となつたのである。

本日到着した時は曇天で、地上の雪は溶け始めたが、墓の内部は非常に暖く、拓本をとるのに都合が好かつた。一行は全速力で拓本をとるもの、ブラン・セクションをするもの等あつて、大變に忙しく仕事をした。

三時半頃宿泊所の都合があり、馬賊の出て来るなどの注意もあり、且つ道も遠いからこれ打切り、明日來ることにして、丘陵を下つた。それから河に沿うて進み、六時宿に歸つた。一同愉快に食事し、隣の巡警二名も來て、一緒に會食し、明日の仕事の相談をした。

本日は巡警が仕事して呉れたので、非常に調査が捗つた。巡警が斯ういふことに興味をもつてゐるのは珍しい。

今日は曇天で、地上の雪は溶けかけ、私共の支那靴は水が浸みて非常に心地悪かつたが

墓の中はさういふ憂ひがないから仕事するに大變宜しかつた。

十二月十一日 今日も引續き昨日の畫像石のある墓の調査に行かうと思ひ、朝六時に出發したが、今日は巡警二名が隨行してくれた。

先づ河に沿うて行き、二時間で墓に着いた。今日は幸曇天でなく、太陽が出て暖かい。

そこで私共は早速墓の中に入り、墓の長さ・廣さを精密に計り、拓本に従事した。昨日の拓本が面白くなかつたから、今日は昨日より美しく拓本した。

それから各面の下部が尙土に埋まれてゐるので、支那人を頼んで土を外へ運び出さうとした。その時、昨日からさうであつたが、支那人はこの中に入らず、土を取らうとしな

い。これは觸はると祟るとか、一家に死人が出來るとか、家が斷絶するとか云つて誰も觸

はらない。又中に供物を捧げてゐるが、これは祟りを恐れて墓の主を祭つたものである。誰も近寄る者がないので、仕方なく持主の弟に依頼して、仕事をしてもらふ事にし、同人が恐るゝ墓の中に入つて土を出してくれた。かくして八面の畫像石がすっかり現はれたので、拓本を盛んにとり始めた。

この様に全面を現はして見ると、前にも書いたが、今度現はれたものは、動物には山羊鳥類には鳳凰の外、孔雀、植物には菊などが現はれて来た。

又獅子が二頭走つてゐる所が描かれてゐるが、獅子の活動の状態を示してゐて面白い。獅子の安座したのは見るが、斯くの如く活動してゐるのは立派なもので珍らしい。獅子は二つあるが共に獅子に牡丹を配してゐる。この牡丹に唐獅子は五代・北宋あたりから起つたもので、この繪は遺憾なくこの時代相を表はしてゐる。

扉に二匹の龍が彫られてゐるが、龍の頭は一方は下に向けて彫てゐる。又鳳凰が描かれてゐるのを見ても、頭を下に向けて彫つてゐる。

昨日の旅誌にも、孫悟空のやうな圖があると云つたが、之れは雲に乗つてゐて、その下に玄奘三藏のやうな法師が合掌してゐる。この圖様は古くから行はれたもので、歐陽修が京師の塔に孫悟空式の圖様を見た旨記されてゐるが、この畫像石にもこの圖がある。さうすると、この圖様は古くから行はれたものらしい。

この墓は穹廬形で、壁及び柱に彫刻してゐる。又昨日の所で書いた様に、天井の所の笠



(影撮者著) 石像畫の州昌隆

の裏には花形の彫刻がある。是等を綜合して見ると、這是蒙古人のテントの内部に似てゐる。テントの入口に二枚の扉があつて、扉の開閉は自由で、扉には双龍が描かれてゐるのである。

然るにこの墓は既に發掘せられて中に今何物もないが、墓内にはもと死體を棺に葬り、供物を捧げたもので、副葬品もあつたのである。斯くしてその上をワールマンハに於けるが如く、細石と土を混じたもので覆つたものである。這是ワールマンハのプランと同じもので、その略式である。

鞍山から千山一帯にかけて存在す

る畫像石も、斯くの如き構造の墓の畫像石である。これは私共が屢々云ふ私共の鞍山で發掘した畫像石のそれと同じものである。

斯くの如く鞍山から千山一帯にかけて綠泥片岩の石造で、穹廬式の壁畫のある墓が存在してゐることは注意を要する。這は何れも遼代のものである。この地方は綠泥片岩の名産地であるから、これを利用して造つたもので、千山麓一帯の地方に存在するものと思はれる。

此處から尙一支里の所に、小さな畫像石のある墓がある。此處へ行つて調査しようと思つたが、時間の都合上中止して又來ることとした。

かくして午後二時半頃此處を出發した。もと來た道を河に沿ひ、五時過ぎ宿に歸つた。本日は昨日に引き続き畫像石のある墓を調査したが、不十分ながらこの調査の完了したのは最も愉快である。

この土地を隆昌州といふのは古い地名であらう。私は『遼史』・『金史』等により、この隆昌州を見出さんと試みたが、この地名が終に見つからなかつた。これは多分洩れてゐるか

或は是等の書に記載してゐる地名の何處かに包含してゐるものと思はれる。

隆昌州といふ地名からして、昔盛であつたやうに考へられる。滿鐵線が出來てから、道は鐵道に沿ふ様になつたが、昔は遼陽から海城の間はこの道を通つたのである。これ等から考へると、此處は考古學・歴史上最も注意すべき所である。

十二月十二日 此處の調査も略ぼ出來たから、今日は朝早く起き、午前六時に鞍山に歸ることとした。そこで警部・巡警や宿屋の人々は門前から小河の邊まで送られたが、一行の外に巡警一名が護衛として隨いて來てくれることになつた。

先づ小河を渡り、西の方に八支里許り行き、それから道は北に向ひ、二十支里程進んで双塔嶺の麓に達した。道はそれから上りとなる。左方は梨を數多植ゑてあり、此處は或期節に梨花を見に遊びに來る場所である。

峠を上ると、上に寺院があり、この寺院の前の丘の上に、相對して各々一基の磚塔が立つてゐる。西の塔は壞れてゐるが、東の塔は壞れながら残つてゐる。

残つてゐる塔の下部は破壊し、石で補つてある。上の方は三層の所と、佛龕の所のみ存

在してゐる。佛龕の中にも佛像は無く、左右に脇侍のみ認められる。又上の天人も僅かに認められる。脇侍は観音の姿で、遼代の佛像の倣を止めてゐる。

此處の峙に相對して二つの塔のあるのは、昨日一昨日見た畫像石のある墓等と關係してゐるもので、遼代に於いてこの土地が盛であつたことを知ることが出来る。

今塔の側に寺院があるが、この位置には昔からあつたものと思はれる。地名が双塔嶺と云ふのも古くからの名前であらう。此處は鞍山・千山・湯崗子方面との往來が頻繁な所で、人馬は上下往來してゐる。又此處は今記した如く、塔の附近には梨樹を植ゑてゐるから、春の季節には大變景色の佳い所であらう。

これを調査して峙を下り、十支里許りで一小市街のある所に出た。私共は其處の豆腐屋をしてゐる支那人の家に入り、食事し茶を飲み、馬に草を與へたりした。

峙を下る西の方に畫像石らしいものが存在してゐる話を聞いたが、このあたりを探ればかゝる遺跡・遺物に出會はずであらうから、尙注意を要する。

それより此處を出て進んだ。双塔嶺から流れてゐる河に沿うて下つた。この双塔嶺の河

の東は遼陽縣であり、西は海城縣である。この河は千山の南に流れるのである。

この河に沿うて進むと、前に一つの山が現はれた。その西北に鞍山方面の山を望む。又後を振りかへると、双塔嶺の峙に古塔が立つてゐるのが眺められる、又東の方には千山の奇觀が望まれる。昔は峙の上に相當の建物があつて、最も景色の佳い所に思はれる。

五支里程來て、これより東に向ふと、千山の奇觀は目前に現はれ、非常に雄大な景色である。かくして丘上を下りて平地を行き、大孤山に到着した。大孤山は先日出發した所である。採鑛所事務所に入り、暫く休息した。

此處からは電車に乗るのであるが、未だ少し時間があるから、その間に隣の寺院を見物し、四時半の電車が來たから、これに乗つて出たが、途中停電で三十分許り停り、五時半漸くにして鞍山に到着した。四本氏の出迎へを受け、馬車で宿屋に歸つた。

奉天で中華民國側學者との會談

十二月十三日 午前九時十八分の汽車で龍藏は奉天に行く。きみ子は昨日停電の電車中

で冷えた關係か、腹痛の氣味があつて奉天に行けないので、午前九時十八分の汽車で龍藏だけ出發した。三好氏は病氣が未だ全快しないので、暖かい大連の病院で養生することにし、先に歸らすこととして、停車場迄共に來たが、南行の汽車で大連に向つた。

龍藏は此處を出發したが、營口商業會議所日下清氏と會した。氏は龍藏を見るなり直ちに近づいて來て話し掛けた。氏は二十四年前三島海雲氏共に北京にあつて、私共と會談したとの話である。

午前十一時四十分奉天に到着した。直ちに瀋陽館に行き色々な用件を濟し、更に總領事館に行き、これまでの禮を述べ、總領事林氏や領事守島氏を訪ひ、守島氏の宅に預けてある採集品二箱「海城縣志」一帙を受取り、奉天の用事は終つたから、午後一時四十分の汽車で鞍山に歸つた。きみ子の病氣も全快したので、夜間共に鞍山の市街を散歩した。

十二月十四日 鄭家屯に未だ荷物其他が預けてあるから、私共は鞍山を午前四時頃の汽車で出發し、四平街に向つた。午前十時四平街に到着し、下車し、植半旅館に一寸休息して、直ちに鄭家屯行の汽車が出るから、これに乗り同地に向つた。

私共蒙古探査一行の淺野氏が、先日滿鐵沿線に出て來ようとして、鄭家屯から四平街に汽車に乗つて出て來る途中、八十名の馬賊に襲はれ、所持金其他を取られたさうだ。これは汽車のレールの釘を外してやつたとの話である。馬賊の襲うた跡を眺め、汽車で旅客と馬賊の話などしてゐる中に、いつとなく汽車は鄭家屯に着いた。

滿鐵公所のボーイが馬車を持つて迎へに來てゐたので、この馬車に乗じ、鄭家屯に至り菊竹氏を訪問した。菊竹氏は最早病氣は宜しく、平熱となつて居られた。この夜遅くまで菊竹氏のお宅で談話を交換した。

十二月十五日 午前十時餘に菊竹氏のお宅を辭して停車場に來た。そして公所の各位に見送られながら、鄭家屯を去つた。この時蒙古行に同行せられた人々は皆來られて別れを惜しまれた。

四平街に汽車が着くなり、直ちに滿鐵線に乗換へ、奉天に午後八時餘に到着したが、今度はもとのヤマトホテルから迎へが來てゐたから、會館に投じた。明日支那の學者から歓迎を受けることになつたと、滿鐵公所の木村氏から電話で通知があつた。

十二月十六日 午前十二時前ヤマトホテルを出て、總領事館を訪ひ、林總領事・守島領

事に會ひ、今後のことに就き相談をした。

金 梁 息侯

午後二時ホテルに木村氏が來られ、今夜歓迎會の打合せをせられ、それから私共は奉天の市街を散歩した。

袁金鐘 深珊

吳廷燮 向之

午後六時支那の學者に招待せられ、私共は支那某料亭に行つた。出席せられた人々は上掲の諸氏である。金氏敏紱氏はこれ等の諸氏を自記せられた。

于省吾 思伯

卞鴻儒 宗直

金敏紱 靜庵

十二月十六日

諸氏は何れも奉天で有名な人である。食卓を共にし、後私共の今回の探査旅行に就いて龍藏がこれを話したが、一同大に満足し、今後日支共に共同研究すべきであると、日支學術の爲に祝杯を擧げた。これを終り、遼時代のことに関して、拓本・遺物等に就き腹藏ない意見を交換した。

今回の探査は遼寧政府の後援もあつたが、これは今日出席

された學者諸氏に敬意を表するものである。將來滿洲・蒙古の探査は日支協力してやらな

鳥居博士雅峯

鳥居博士

朝山油と

費思古之出情

金鐘

袁金鐘敬書

贈 鳥居博士

擔簦兩度到臨漢訪古歸來整己
蒼幸有夫人嫺羊札敢將博士傲
侯王記游文似年神甫贈別詩慙
鄭海藏前席虛君一夕話即今無
負歲堂々 全毓毅 未定州

ければならぬ。その中の袁氏の如きは他日私共が著書を出版するならばとて、上掲の題字を贈られた。

それから金氏は私共の爲に右の詩を賦して贈られた。
今夜の會合は大變有益であつた。此處を去り、ホテルに一寸歸つて、午後十時發の汽車で大連に向つた。

奉天から大連

十二月十七日 午前二時餘汽車は大連に到着した。大阪毎日新聞社員・三好氏等が出迎へられ、自動車でヤマトホテルに行つた。

新聞記者各位は多數訪問せられたが、その後私共は自動車で満鐵本社・其他の知己・高山満鐵日報社長其他知友を訪問し、正午に高柳氏其他の各位から歓迎を受け、互に話し合つた。

それから私共は高柳氏と羅振玉氏の書店に行き、書物を買ひ、ホテルに歸つたが、色々

な來訪客があつた。

時にきみ子の弟、市原廣中氏は子供を伴ひ、上海から大連あたりを漫遊の歸途、私共がホテルに泊つてゐることを聞きつけ、ホテルに訪問されて、暫く談話した。

今夜午後五時から滿洲考古學會は、私共の爲に歓迎會を催されたが、出席者二十名許、いづれも滿洲の考古學者の人々である。龍藏は遼代の古蹟に就いて一寸講話し、終りに各位と談話を交換し、七時過散會した。この會合は實に有益であつた。

それからホテルに歸り、電報を打つたり、手紙の返事を書いたり、また讀書などして忙しかつた。

大連から東京まで

十二月十八日 大連にカトリック教會の御堂が建てられてゐる。アメリカの靈父が此處に居られ、アメリカの教會である。傳導師の井尻孝二氏が前夜に來てられ本日早朝にミサをたてるから、出席ありたしといふ話があつたので、午前七時伏見臺のカトリックの教會

に赴いた。

アメリカの靈父の下にミサが舉行せられ、終つて同靈父・童貞さん達と談話をしながら朝飯の饗應を受けた。

それから此處を辭し、自動車でホテルに歸り、更に自動車を走らせて、香港丸に乗船した。昨夜の考古學會の八木氏・小林氏其他の人々、滿鐵社長・副社長の代理や井尻氏等が見送られた。

かくして船は午前十時頃に出帆し、懐しい滿洲の地を出て、私共は波止場の諸氏と互に別れを惜しんだ。

今日は風なく、海上は至極穩かである。一等室の船客は少く、十名内外である。乗客中には家族連れの婦人・子供等もあるが、食卓には出席せられなかつた。

きみ子の弟市原氏もこの船に乗られ、話に來られた。三好氏の病氣も殆ど癒つたので安心した。夜間サロンで大阪のラヂオを聞く。

十二月十九日 船は午前中に朝鮮の多島海に入つた。この間島ばかりであつて、船は島

の中を走る。今日は風も静かで、殊に多島海の中は波も立たず、非常に氣持がよい。雑誌等を読み耽り、又三好氏と鹿兒島縣の隼人塚のことなどに就き談話をした。市原氏は夜間得意の謡曲など謡はれた。

十二月二十日 午前十時船は玄海灘から門司に着いた。此處で久しぶりで日本の山を見た。樹々の生々して緑色を呈してゐるのは何より愉快である。

滿洲は晴天であるが、日本は風があつて曇つてゐる。これまで久しく滿洲（蒙古も）の晴天の所に居慣れると餘り氣持が好くない。然し風は吹いても暖かで、氣持が宜しい。

此處で三好氏は船を降り、延岡にかへられたが、久しく一緒に居つた人と別れるのは悲しい感じがする。報知・時事・大阪毎日・大阪朝日・電報通信社・福岡日々・九州日報等の記者が來られ、サロンで談話した。

それから下關に上陸した。微雨の微あり、門司に渡り買物等して本船に歸つた。船は正午に出帆し、私共は食事後甲板から瀬戸内海を靜かに走るのを見た。瀬戸沿岸諸島の景色は非常に住い。本日は正午から天氣が好くなり、晴天となつたので、瀬戸内の景色は一層

よく眺められる。

十二月二十一日 船は午前七時神戸港に着いた。大阪毎日新聞其他の記者が訪問せられ私共を撮影した。午前九時發の汽車に三宮から乗車し、市原氏と別れた。

さうして午後八時に東京驛に着き、我が子緑子・龍次郎は停車場迄迎へに來てゐた。また中島・三輪・榊原・野尻・三戸・京・門馬の諸氏の出迎へを受けたが、これ等諸氏に對し感謝する所である。

私共は緑子・龍次郎と共に自動車で歸宅したが、幸子は早速出迎へ、久しぶりに自分の宅で、夜更くるまで家族的な談話をした。

かくして今回の滿蒙探査は終りを告げたのである。

今回の滿蒙探査で得た考古學的事實

私共は以上旅誌に記した如く、滿蒙を約五ヶ月に亘つて探査した。この探査はどんな事をしたかと云ふと、這は主として東蒙古に於ける有史以前と、契丹（遼）の文化の二つの事項に涉つてであつた。

私共のこの方面の探査は敢て今日に始つたものではない。今を去る二十六年前から既に手をつけてゐるのであつて、その當時未だこの方面は外國の學者や日本の學者も手をつけてゐなかつた。然るに私共はこの方面に手をつけて、さうして内蒙古から外蒙古方面に及びこれに就いて殆ど三ヶ年間に亘つて仕事をしたのである。これは私共の著はしてゐる前著に記述してゐるから、茲には述べない。



蒙古ハロールのストーンサークル

かくの如く本事項の研究は、その當時から引續いて今日に及んだもので、今回に始つたものではない。今回の探査は以前の補遺として連続したのである。二十五年前と今日との滿蒙、殊に蒙古に於ける状態は非常に變化してゐる。

私共が最初に探査したのは、未だ清朝末であつて、蒙古各地には滿洲隣接地・長城附近を除く以外は支那人の勢力は及んでゐなかつた。是等の蒙古は蒙古人の蒙古であつて、非常に蒙古氣分のものである。當時は蒙古各旗には蒙古王が居り、それに蒙古の役人が居り、一般大衆も悉く蒙古人であつた。さういふ有様であつたから、蒙古の土地を歩くといふ感じが餘程濃厚であつた。蒙古の平野にあせらず、急がず無事平穩に彼等は生活してゐるのである。

私共が當時旅行したのは、蒙古の王府から王府に頼り、研究しつゝ探査したのであつて費用も割合要らなかつた。對話は喀喇沁旗で學んだ蒙古語を使ひ、通譯は伴はなかつた。當時は私共夫婦と、乳呑兒の幸子の三人で、其他の日本人は同行しなかつた。行く先々にも日本人は生活してゐなかつた。私共は特にきみ子と幸子が女性であることから、普通接

近なし難い蒙古の婦人・小兒等に接觸する機會が多かつた。毎夜テントの中に泊り行き、牛糞の焚火をして旅行し、外蒙古の車臣汗部まで行つた。

この當時調べた事項は、第一に蒙古に於ける石器時代、鮮卑・契丹等の考古學的調査等であつて、尙各所で蒙古人の體格を測定して行つた。王府の方から與へられる牛車一臺に道具を積んで、急がず、せかず沙漠の中をおとなしい牛車で緩やかに歩いた。途中で石器や土器があれば、牛車に載せなどして歳月を費して、探査したのである。この爲比較的多く、遺物・遺跡に接することが出来た。當時この地方で考古學的調査をなしたものは無い。私共は不完全ながら蒙古の調査をなし、色々發見したのである。

當時この地方の考古學・人類學的の記述は歐米人の書物もなく、日本人では誰も書いて居らず、僅かに張穆石州撰『蒙古遊牧記』があるのみであつた。この『蒙古遊牧記』は蒙古の歴史地理を書いたものとして大切なるものであつて、その地方地方の支那の文献を網羅し、更に支那人の旅行したもの等を加へてゐる。當時私共にとつてこの『蒙古遊牧記』は大切な書物であつて、これによつて多少見當をつけて歩いたのである。

東蒙古の有史以前は石器時代に至つては、未だ何人もこれに就ては手を下してゐなかつた。當時歐米人にもこの方面の石器時代に手をつけた人なく僅かにドロノール附近で佛蘭西人の宣教師が二個の石鏃を採集した以外には知られてゐない。それで今日同蒙古に於ける石器時代の研究は、何れも私共以後であると云ふのを憚らない。その石器時代の二十五年前に調べた事項に就いては既に大正三年東大理學部紀要第三十六卷、第五冊に於て私共は *Populations primitives de la Mongolie orientale* と題して發表し、その後、滿洲のものも引續き大正四年同紀要第三十六卷第八冊に *Populations préhistoriques de la Mandchourie méridionale* と題して書いた。これより外國人の研究が起つたのである。

東蒙古は蒙古といつても、考古學の上から見ると、蒙古人そのものの遺跡よりも、寧ろ東胡民族たる鮮卑・契丹・奚等の遺跡の方が多し。殊に契丹人の設立した遼の遺跡はこの地方の特色である。

抑もこれ等の地方は日本の所謂東蒙古であつて、東胡民族の發祥地として名高い。此處は匈奴・鮮卑・烏丸の活動地であつて、西喇木倫河・老哈河の流域は彼等の搖籃地である。以

上の土地は黒龍江邊から南に走る興安嶺と、西から東に走る陰山脈が合してゐる所である。興安嶺から流れるシラムレン河と陰山脈に源を發する老哈河が落合ひ、遼河となつて流れてゐる。昔からこの流域が東胡民族の發祥地である。

この地方は滿洲・支那に接近してゐるのに拘はらず、外國人はこの方面の考古學・人類學上の探査を行つて居らぬ。西蒙古（外蒙古）には外人が手をつけてゐるが、東蒙古に手をつけて人は誰も無く、關係書物も一向出てゐない。

この方面の先覺者は白鳥博士である。博士は實踐調査はして居られないが、言語學・歷史上より東胡民族の研究をされ、その言語學上より見たる東胡民族といふ論文を『史學雜誌』等に發表されてゐる。それ以外には私は寡聞であるが、何人も該地方の斯學上の研究はしてゐないと思つてゐる。私共がこの調査を實行したといふのも、畢竟人類學・考古學上から暗黒なこの土地を明るみに出したいといふ考へがあつたからであり、それが爲めにこの方面に手をつけたのである。

石器時代のこれ迄の研究の結果は、東京帝國大學理學部紀要に發表した通りであるから

讀者は一覽せられんことを望む。當時その論文に於て、東蒙古の石器時代の位置、滿洲・朝鮮とを比較研究し、分布地圖も加へた。其後は等の研究を一層精密、明確にせんが爲、屢足を滿洲蒙古に入れ調査した。今回はその石器時代の補遺として調査し、得る所があつた。旅誌の中にある各所で石器時代の遺跡を發見し、又遺物を採集したといふ記事がこれである。

私共の調査中シラムレン河畔（チャガンムレン）で骨塚を發見したのは最も有益であつた。これはまさしくクゼツケンメーデキンデルである。それに據つて當時の食物と哺乳動物の種類が知られる。

今回の是等の調査に就いて、殊に記すべきは巨石遺跡の存在である。蒙古の石器時代遺跡には巨石遺跡が伴つてゐる。メンヒル・ストーンサークル等がこれである。更にドルメンの存在と思はれるものを各處で發見した。這は今日調査した著しい事實の様に思はれる。

ドルメンは朝鮮の多島海（鬱陵島にも巨石遺跡がある）から鴨綠江・豆滿江迄に分布し

てゐる。近時島崎氏の實踐で通化縣の方面にまであることがわかつた。又豆滿江の龍井村に行く途中にメンヒルの跡のあることを私は早く知つた。かくの如く朝鮮にはドルメン・メンヒルの様なものが存在し、これが豆滿江・鴨綠江を越えて分布してゐる。その以外は今日それを認めることが出來ぬ。尙滿洲の海城以北・鳳凰城方面に於てドルメン・メンヒルが在存することが認められる。又ストーンサークルは北方鞍山附近迄分布してゐる。

滿蒙に於ける巨石遺跡は殆ど同一のものである。殊に朝鮮のドルメンに南のドルメンと北のドルメンがあるが、滿洲のドルメンはその北方のものによく似てゐる。然るに此處のドルメンは蒙古の巴林に於て二つ認められる。一つは遼の太祖陵にある石室で、一つはコルバン トロガイにある石室の二つである。

この二つの石室は遼時代に於て改造せられ、檐の出張りは取られ、四面の石壁の面は加工せられてゐる。けれども、もとの構造は滿洲・朝鮮の北にあるのとよく似てゐる。この點から見ると蒙古の巴林に於けるドルメンは滿洲の延長と云ひ得る。

ストーンサークル・メンヒル・ケールン等の如きは又今回蒙古で發見した。これは私共が

二十五年以前既にこの地方に於て發見したものである。これ等は外蒙古や西比利亞のそれとも深い關係があるやうに思はれる。固より滿洲や朝鮮のそれと類似するのは云ふまでもない。

朝鮮の南方式ドルメンは多島海・全羅南道・慶尙南道に分布して、尙延いて山東省に及んでゐる。山東省のドルメンに就いては、龍藏は最近佛國巴里萬國聯盟人類學院の論文や東洋文庫發行雜誌上で外國文で發表した。

下つて石器時代から契丹になる迄の間の遺跡・遺物に就いては、既に各處でその事實を發見してゐるが、今回更にその墓場・その遺物等の上に於て、發見することが出來た。その次に契丹（即ち遼）に就いては、今回の主として研究してゐる所であつて、面白い結果を齎した。

東胡民族は東蒙古を中心として活動し始め、歴史的に連續してゐる。彼等は五代の際に支那内地の動亂するに乗じ、ここに於て遼の王國はシラムレン流域に建設せられた。これ契丹の阿保機である。彼はウルジムレン河の河畔に上京城を造つた。これは旅誌のポロホ

トンがこれである。

ここで各部族を統一し、尙北にある民族を征服し、西突厥まで勢力を及ぼし、更に南にある支那民族に打撃を興へ、東に進み女眞族を抑壓し、渤海王國を滅亡させた。彼は是等の捕虜・征服者を上京附近に伴ひ、各所に縣を設け、上京の土地を盛にした。それより遼の勢は遼陽の土地に東京を設け、南即ち北京に南京を、山西省の大同に西京を設け、南京と上京の間の喀喇沁蒙古に中京を設け、さうして彼の勢力を張つた。

契丹は遼と號し、自ら皇帝を以て稱した。更に聖宗・興宗等の時代は全くの黄金時代であつて、支那の北宋から夥多しい貢物を取り、自分達の家畜を整理し、鹽・鐵等に向つての利益を占め、一大黄金國を東蒙古に現出したのである。

遼の城・堡寨・陵墓・墓・住居跡・寺院等は東蒙古の到る所に存在してゐる。これ等は私共が二十五年前に調査した所で、今回の探査はこれの足りない所を補つたのであるが、新事實の發見も多かつた。是等は前篇の旅誌によつて明かになるであらう。

私共は今回の探査に於いて、石器時代のみならず、遼の事項に就いて、多大の努力をし

た。これは今日不毛なる東蒙古も、昔は相當の文化を形成してゐたのである。これが十分知れるとこの結果は支那・滿洲・西比利亞のそれと比較研究することが出来るのである。我が日本の如き土地は隔つてゐて、それと關係が無いと思はれるが、遼の文化から考へると、平安・藤原時代の文化によく似てゐる。繪畫・彫刻・宗教等の上にこれが認められる。遼の文化は彼等も咀化した所があるが、そのよつて來る所は唐末から五代・北宋にかけての文化の影響である。這是色々な點に及んだ。五代から北宋の文化は日本にも影響した。平安・藤原の文化がこれである。この點日本と契丹は北宋を中にして聯結してゐる。契丹人は支那の文字からヒントを得て、契丹文字を古くから創作した。この契丹文字が契丹人にどれ位の程度で行はれたか、又何時頃まで行はれてゐたかといふ問題は興味がある。

然るに今回遼の興宗陵の壁畫の人物の肩の所に、その文字で記載してゐるものを發見した。今日石刻した碑文中に見える契丹文字はあるが、これは筆に墨を含ませて書いたもので非常に珍しいものである。壁畫に描かれてゐる人物それ自身が、各々契丹文字で自署

してゐるのはこれまで見ない事實である。これは筆で書いてゐるから、個人個人書方が違つて居るのが認められる。これ等は契丹文字研究上面白い事項である。

更に道宗陵の中に契丹文字を刻した碑文がある。これで見ると少くとも道宗の時代迄契丹文字が彼等の中に用ゐられてゐたことが證明される。這是契丹文化史上大切な資料である。

彼等は湖北の民族であり、その住居はテントに住ひ、所謂穹廬式である。當時一般の庶民階級が毛氈の穹廬形家屋に住つてゐた許りでなく、公の役所に於ても普通これが用ゐられてゐた。然るに當時契丹人ではこの穹廬を用ゐるといふのが普通であつた。王侯・貴族・衙門等に於ては支那風の建築をしてゐた。然るに今日ワールマンハに於ける聖宗・興宗・道宗の陵墓を見るに、その形は正しく穹廬形である。更に遼の皇都内の西北隅の丘陵上に營まれてゐる陵墓の如きも亦穹廬形である。更に滿洲の鞍山一帯に於ける畫像石のある墓の如きも穹廬形である。

是等を以て推察すると、當時彼等の上流社會では支那家屋と穹廬式家屋との折衷したも

のを有るてゐたことが考へられる。これは今回の調査によつて確かに然りと云ひ得ることになつた。今日蒙古人が毛氈よりなれる穹廬式家屋が、支那のオンドル式家屋と折衷したものになつてゐることを認めるが、これは互に調和してゐる形式であつて、契丹の當時に於ても、斯くの如き状態が行はれたと思はれる。

シラムレン河流域に遼の皇都即ち上京城がある。これは即ちボロ ホトンそのものである。この城を見ると、ウルジムレンの沿岸に築かれ、土城よりなつてゐる。この土城には門があり、内部には諸所に宮殿・寺院等の跡が残つてゐる。是等の制度は正しく支那式である。

さうしてこの皇都の北の丘・南の丘には各々一基づゝの磚塔が建てられてゐる。その内部には緑の瓦・磚・陶器等の破片が散亂してゐる。この皇城内に於ける遺跡・遺物は遼の文化を優に語る事が出来る。

更に南北の丘陵に建てられてゐる古塔の如きは、その塔面に表はされてゐる佛・菩薩・天人・迦陵頻迦其他の裝飾は、彼等の文化史・宗教心を明かに語るものである。



(影撮者著) 墓の塚石積

更に白塔子即ち慶州城の如きも、土壁を以て繞らし、各々門がある。内部には建物等存在し、磚塔一基が高く聳えてゐる。この磚塔の圖様・裝飾等は大いに注意すべきものである。又當時の碑文の斷片も存在してゐる。かくの如き土城は彼方此方に存在してゐて、何れも遼の當時を語るものでないものは無い。

更に彼等の古墳も各處に存在してゐる。その著しいものは遼の皇都の西北にある太祖陵である。尙慶州の北ワール マンハには聖宗・興宗・道宗の三陵が相並列してゐる。是等の三陵は美を極め、贅を盡したものであつて、内部の裝飾・壁畫等は大いに見るべきものである。これの略せられたものは滿洲の鞍山・千山・隆昌州に存在してゐる畫像石墓がこれである。

更に契丹人はケールン内に組合石棺を入れて葬られて居り、その周囲は二重のストーンサークルで取巻かれてゐる。或はツムルス式の日本の古墳の如き構造の略せられたものもある。又火葬してその骨を壺に入れ埋葬してゐるものもある。是等は彼等の埋葬の研究の資料である。

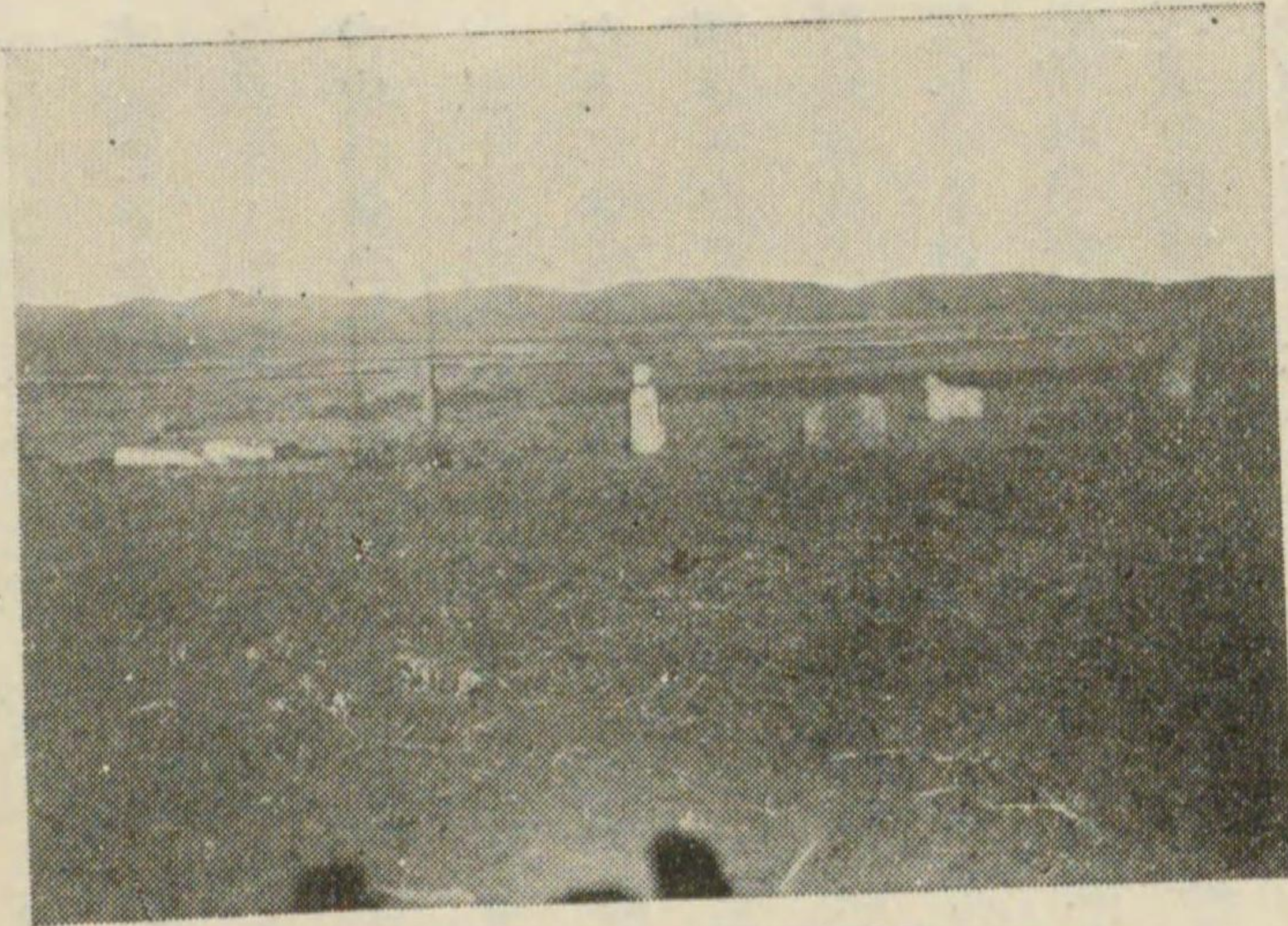
殊に滿洲に於ける遼の墓として注意すべきは、畫像石の存在する墓である。畫像石の石室は綠泥片岩よりなつてゐるが、これは普通磚等を積んで壁としてゐるものを綠泥片岩でなしたものである。それに彫刻してゐるのは、壁畫と同一状態を表はしたものである。

この綠泥片岩を用ゐて當時墓を築いたのは今云つた如く、鞍山・千山・隆昌州一帶の地方に限られ、其他の地方には今日迄の事實では認められぬ。これは日本で綠泥片岩を産する關東・阿波に板碑が存在してゐるのと同じ事實の様に思はれる。特異相の考古學的事實の様に思はれるのである。

支那に於ける石人・石獸を墓前に立てる風習は尙遼人もしたのであつて、這は今回も以前に於ても發見した。這は儒葬の風である。また墓碑や龜の臺石も存在するが、固よりこ

れも支那のそれを模したものである。

遼の考古學的調査に注意すべきは寺院の址である。この址には古塔が残り佛像・建物の礎石等が残つてゐる。今回これを調査したのは遼



(影瀟者著) 所るみてつ立の羊石 人石

の皇都内・慶州城内・ワールマンハ及び皇都の南の山上にあるアルグイブルジャウ・ウブルグイブルジャウ・ハバチル廟等である。殊に後者のアルグイブルジャウ・ウブルグイブルジャウ・ハバチル廟等遺蹟の如きは佛像・佛幢・石碑・彫刻等が残つてゐる。例へば金剛界の大日如來も存在してゐて之等は密教の行はれてゐたことを證明してゐる。

更に此處に涅槃像・仁王像等が存在し、尙ほ尊勝陀羅尼幢がある。當時契丹人の間に尊勝陀羅尼の信仰が盛んであつたことが窺はれる。茲に面白

い碑文がある。それは佛陀波利が五臺山に上り、文珠に會ひ、尊勝陀羅尼を支那に持つて來たことを刻してゐる。そのうちに唐の沙門志靜の『尊勝陀羅尼經序』に書いてゐるものを其まゝ刻したものがあつた。是等を見ると如何に當時尊勝陀羅尼の信仰と共に、延いて天台山の信仰も伴つたことが考へられる。

以上の三つの遺跡は契丹に於ける信仰心・藝術史・文化史上興味ある問題である。抑も山の上に寺院の址があるのは何故であらうか。這是當時日本の寺院の平安朝に於ける叡山の如きもので、遼の皇都鎮護の意味で此處に寺院を設けたものである。即ち此處は叡山・高野或は支那の天臺山の如く山の佛教であつて、當時に於ける山の佛教の信仰を遺憾なく表はしてゐる。這是最も注意して研究しなければならぬ所である。

當時契丹人の信仰は佛教殊に密教の信仰が盛であつた。支那に於ける眞言密教は、唐の武宗の排佛以後は行れなくなり、寧ろ日本に行はれる弘法大師によつて持參されたやうである。更に日本の天臺も密教を加味したものであつて、我が國の僧・俗の學者は密教は日本に來て支那に跡を絶つたと云つてゐる。

併し密教は支那本土に滅亡し、日本に來たと共に、また遼に入つた。這是考古學上の事實が證明してゐる。これのみならず碑文・佛幢等もこれを證明するものである。而もこれ等は五代から北宋にかけてであつて、日本の平安・藤原末に相當してゐる。日本に密教が盛であつたと同時に、北方の遼に於てもこれが盛に行はれた。されば密教の研究は遼に於てもしなければならぬ。

彼等の信仰に道教がある。這是唐末五代から北宋にかけて一異彩を放つたもので、これが契丹に入つたのである。契丹の皇都の南丘の塔面に表はされたものに、道教の玉皇の如きものを見る。當時佛教と共に道教は契丹に入つたのであつて、支那に於ける道教の初期の思想の傳播である。

然し元來彼等契丹人固有の宗教は朔北民族に共通なシャーマン教であつた。このシャーマン教が行はれたことは、考古學上の事實が證明してゐるのみでなく、文献もこれを示してゐる。

これ等の思想界に於ける事實は、契丹の文化史を考察する上に於て、最も大切なる資料

であると云はねばならぬ。

彼等の信仰心に於て、考古學上に著しいものは、佛幢や磚塔の如き存在がこれである。磚塔は遼の皇都に於て二基存在し、慶州城に白塔が存在し、二十五年前遼の中京に於ても存在するのを調査した。今日の北平、即ち遼の南京の各地にもそれがある。滿洲に残つてゐる遼陽・奉天・開原・鐵嶺・柞木城・昌圖等の磚塔の如きもこの時代のもので、即ち遼の東京である。これ等の塔は遼が滅んで寺院は無くなつて後も残つてゐるのである。

磚塔は支那の工人が築いたものであるが、契丹人にもこれの上手な人があつた。磚塔には信仰上の象徴を示す佛・菩薩・天人・天部等を示してゐる許りでなく、これに多數の鏡を懸けてゐる。この鏡を懸けてゐることは、これを信仰上から見て面白く、鏡が當時のものであるから、鏡そのものの研究としても面白い。これ等は土中に存在してゐるものでなく當時から此處に懸けられてゐる所謂空氣間に保存してゐるものであるから、この種の研究上注意を要するものである。

彼等の信仰はもとシャーマン教であり、それに佛教として密教が主となり、道教が入り

又儒教も盛に行はれた。後者は皇都内に孔子廟があるので判る。

ワールマンハに於ける陵墓を見ると、埋葬はシャーマン的であつて、佛教の分子を交へて居らぬ。即ちその壁畫には佛・天人等は描かれて居らず、佛教のシンボルの蓮華すらも見えぬ。彼等の葬り方は固有のシャーマンである。然し彼等の信仰はどこ迄も佛教に篤かつたことは、此處を離れた所に佛幢・陀羅尼幢を立て、陵墓に向ひ磚塔を建て冥福を祈つてゐることからも知ることが出来る。この信仰は契丹の文化を研究する上に注意を怠つてはならぬ。

遼の當時にはシャーマン教が固有の宗教であるが、これに佛教・道教・儒教等があり、これが混合してゐることを記したが、こゝに觸れなければならぬのは、ネストリアン教の存在である。

ネストリアン教は唐時代から支那に入つたもので、所謂景教である。この宗教は歴代の唐皇帝の信仰を受け、日本の國分寺の如き鎮護國家の寺院が各道に設けられた。唐の武宗の排佛の時支那内地からは殆ど姿を秘めたが、後に支那西南夷の方に尙行はれてゐること

はマルコポーロの旅行記に記されてゐる通りである。近時、文献及び遺物の上に於て、成吉思汗の當時、蒙古人が景教を信じ、これの洗禮を受け、洗禮名がわかつてゐる。然らばこの蒙古人以前にネストリアン教が朔北に行はれてゐたか、否か。これに就いて龍藏は金の上京即ち哈爾賓の東阿什河畔に於て、二つの景教のメダルを發見した。それで金人はネストリアン教を信じてゐたことがわかる。

更に北滿洮南府附近の土城に於てもこれと同一のメダルを發見した。この土城はもと遼人の築いた城で、後金人がこれによつたのである。これ等は何れの時代のメダルに屬するかといふと、私共は他の遺物の關係上、遼のものと推定する。其後滿洲の鞍山の墓を發掘した時に、七本の土製十字を發見した。これを發見した所は遼代の墓で、當時の古錢も共にあつた。遼人はネストリアンの信仰者であることが證明せられる。

然るに今回の調査に於て、遼の皇都内で半月形の磚に十字を刻せられたものを發見し、更にハバチル廟附近に於て、石窟内にネストリアン教のものらしい殿堂を發見し、その壁に十字を刻してゐるのを見た。これ等の點から見ると、景教は遼時代に遼の土地に入つて

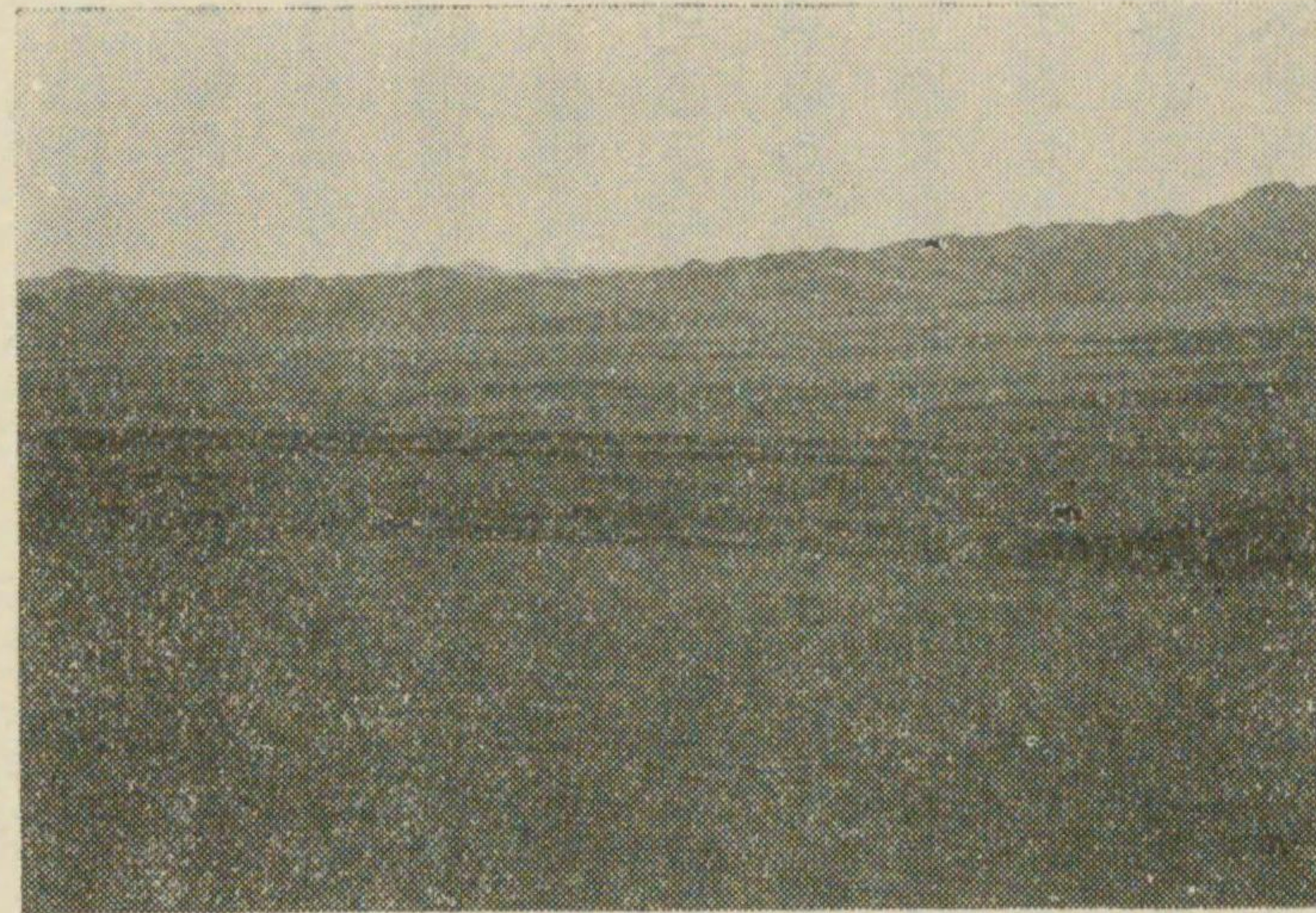
るたもので、上流社會の間にこれが行はれてゐたことを知ることが出来る。

今日蒙古の土地は荒れ果て、出水した際、河を渡るに困難であるが、遼の盛な時には各所に橋があつた。大きな河であるシラムレンの如きも、立派な石橋があつた。これ等から當時の交通がよく判る。又交通には馬が盛に用ゐられた許りでなく、車も用ゐられた。這是今回考古學上、車の鐵心を採集したので一層證明が出来る。宋人の旅行記を見ると、當時渤海の捕虜が上京附近で鍛冶をし車を造つてゐたといふ記述がある。

彼等のもと牧畜の生活をしてゐたが、早くから農業が入り、今日の蒙古人よりも發達してゐる。這是考古學的に當時の唐臼・石臼等が残存するので知ることが出来る。元來牧畜であつた遼人の生活に、農業のあつたのは大切な事實である。

遼人の文化は牧畜・農業をなし、又武力が最も強かつた。幾多の捕虜を使用し南支那北宋あたりから盛んに貢物を運んで來たり、内部に於て鹽・鐵・家畜等が富裕であつたから、全くの黄金時代を呈した。支那より盛に贅澤品が入り美しい織物や貴重な裝飾品も多く入つて來た。織物は契丹人自身にもあつたのである。これは織物を北宋に贈つたことで知ら

も他に比較すべきものである。
更に注意すべきは、遼の防禦として長城の走つてゐるなどであり、これは土壁を延長し溝を掘り、各所にそれに接して小さな堡城が設けられてゐる。これ等は彼等の土城の研究と共に併せて見るべきものである。



(影撮者著) 城長るあに林巴

知るよいパロメーターの様に思はれたのである。

遼代に於ける古銭・陶磁器・瓦・磚その他の研究も今度の探査で大に判つて來た。これ等

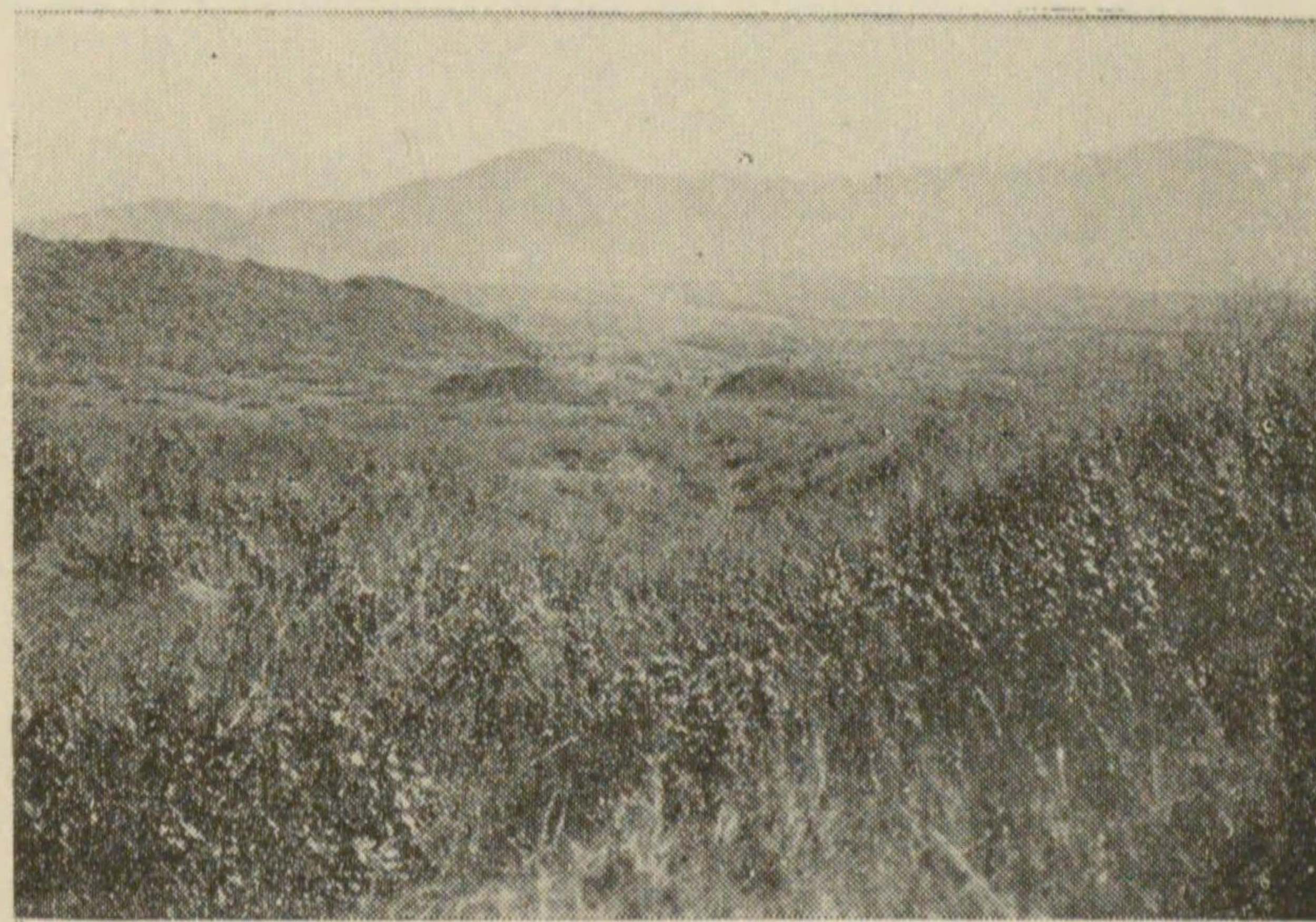
れる。

武力が強く、富があつて契丹人の貴族には文藝に精通した人があつた。東丹王の如きは遼西の醫巫閭山上に圖書館を建て、藏書する所があつた。遼の貴族中書を能くし、文に通じ詩を賦し、繪に精通してゐたものが多かつた。五代から北宋の繪師も多く用ゐられ、またこれ等を多く所藏せられて居た。彼等は南にあつた五代から北宋の文化が遼に植ゑ付けられたものである。此處に残る遺跡・遺物や、かのワールマンハに於ける壁畫の如きは彼等の文化がどこ迄進んでゐたかといふことを

遼代の壁畫について

私は昨年東蒙古に遼(契丹)の文化の遺蹟を探查し、それに就て種々の発見もあつたが、その中でも彼等の文化史・藝術史として頗る大きな繪畫(壁畫)を發見したから、茲にこれを紹介し斯學の參考としたい。

茲に記るさんとする繪畫は、遼代帝王陵内に描かれた壁畫であるから、まづその陵墓のことから記さねばならぬ。この王陵は内蒙古の巴林(現今林西縣)の北邊、烏珠穆沁に接近したる興安嶺の内部、ワールマンハと云ふ所にある。此處は遼河の水源潢河(遼代の



所拜遼の墓陵ハンマルーワ

潢水)に注入する白^{チヤガンレン}河の上流に存在する頗る深い山中で、後は奇岩亢立し、前は少しばかりうち開いた砂丘^{サンドヒル}である。遼墓はこの山中に三ヶ所、少しく相離れて相並列する。這は即ち遼の聖宗・興宗・道宗の三陵である。

此處には以上の三陵のみならず、尙ほ遼の行宮の遺址やその他の遺蹟もあり、これ等の礎石・瓦・磚・陶磁片・古泉等も残存散分して居る。蒙古人がこの地を殊更にワールマン^{マン}と種するのは、ワールは瓦の義、マンハは砂土の義即ちこれ等の瓦・磚等の存在する砂土の意味を有するのである。これを以て見てもいかに此處に瓦・磚・陶磁器破片等が美しく散亂して居るかを知ることが出来る。

遼の初期ではワールマンハの地は、もと黒山と稱し、それから流れ出てシラムレン河に注入する河を黒河或は黒水と云つて居つた。今日はこの黒河は反對にチヤガン(白)ムレン(河)と稱するやうになつて居る。けれども遼代では黒水または黒河と稱して居た。そして此處はその位置が深山にあるからその當時から夏は暑をさくによろしく、冬は嚴寒、極夏といへども地を掘る丈餘堅氷がある。春から夏にかけて樹草が繁茂して居る。『遼史』の

宋大中祥符九年の『薛映記』にも左の如く記るして居る。

臨潢西北二百餘里(●)號涼淀、在饅頭山南、避暑之處、多豐草、掘地丈餘、卽有堅氷今日ではワールマンハは樹木生え雜草茂り一人の蒙古人すらも住つて居ない。古來野獸棲息し狩獵の地としては最も適當の所である。されば遼代の諸帝王は常に此處に狩獵をして居られた。

遼の穆宗は獵を好み、いつも此處に出獵したが、後は此地を愛し好むあまり終に城を建て黒河州を置くことゝなつた。然るに彼は應歷十九年三月出獵から歸つて行宮に入られたが、その夜近侍・盟人・庖人等六人のために殺せられたのと、且つその地が、餘りに寒氣の強い爲めとで、此處が漸次衰微し、聖宗の統和八年に至つて、遂に州を廢するに至つた。この州城の址は今日も尙殘存して居る。

然るに遼の聖宗は屢々此處に狩獵せられて居る。或時彼は此處に来て駐蹕、愛羨して曰へらく、我萬歳の後當さに此處に葬るべしと、そこで後に陵を設け殿堂などを建て行宮とした。『遼史』地理志に左の文がある。

慶雲山、本黒嶺也、聖宗駐蹕、愛羨曰、我萬歲後當葬此、興宗遣命建永陵、陵有望仙殿御容殿、置蕃漢守陵三千戶、並隸大內都總管司、在州西二十里、有黒山赤山太保山老翁嶺饅頭山興國湖、轄失灤黒河。

『金史』地理志にも此處を左の如く記して居る。

…北山有遼聖宗興宗道宗慶陵、城中有遼行宮、比他州爲富庶、遼時刺此郡者非耶律蕭氏不興遼國寶多聚于此…

即ち聖宗の遺命に據つて、その子興宗は父聖宗を此處に葬り、これを慶陵と稱し、またその山を慶雲山と名づけ、傍に行宮を設くるに至つた。そして更に興宗が崩するや、またその子道宗は父興宗を此處に葬り、更にまた道宗も此處に葬られた。されば此處には三帝の陵墓が存在するのである。慶陵は更に永慶陵とも名づけられた。

『遼史』・『遼史拾遺』・『契丹國志』等を以て、聖宗崩後の當時を見ると、左の事が記さされて居る。

興宗景福元年七月 慶州を慶陵の南に建て、民を徙して之れに實て奉陵の邑に充つ。

同九月 躬ら慶陵を視る。

同十一月 慶陵に謁し、遺物を以て群臣に賜ふ、其山を名けて慶雲と曰ひ、殿を望仙と云ふ。

同十二月 躬ら慶陵に行き、皇太后を聽き、帝親しく庶務をなす。

重熙元年五月 皇太后を上置き、躬ら慶陵を守る。

同七月 慶陵に謁し、望仙殿に致尊し、皇太后を迎へて顯州に至り、園陵に謁し京に還る。

以上に據て見るも、當時興宗の慶陵に行き、陵を謁するの頻繁なるを知ることが出来るであらう。そして慶陵を築造した興宗もその父聖宗の傍に葬られ、またその次の道宗もその傍に葬られ、斯くして慶雲山上の慶陵は共に三帝の陵墓となつたのである。

興宗は聖宗を慶陵に葬ると共に奉陵の邑として慶州をその南に建てたが、その慶州の廢址は尙ほ残存し、此處に土城や殿堂・石礎の趾や、碑文・佛幢なども存在し、立派な磚塔一基も建てられて居る。この磚塔は興宗が建立し、慶陵の方に向て居るが、これは冥福を

祈られた供養塔の意味を有するものである。塔は白色に塗られて居るから、此處の地名を今日白塔子チヤガンザバラガと稱して居る。またもとの慶州をチンジンホトンの名で残されて居る。此處は喇嘛僧の家と蒙古貿易の支那商人の家が各々一軒許あり、他は若干の蒙古人の家があるのみである。

二

慶陵に行くには、慶州から行くのが順序で、その間の距離は凡そ三十五支里位ある。この道路は山の間、右にチヤガンムレン河に沿うて行くので、慶州を出るとしばらくにして長城の址があるが、これを超えて無人の所を行く。慶陵の下は一帶に砂土の丘陵が發達し栢や白樺などが生え、雜草は茂つて居る。

慶雲山は東南を受け、日當りのよい所で、下はマンハであり、うち開き、最も風景のよい所である。此處は三陵が並存して居る。そしてこれ等の三陵は各々後にバツクとしてよろしい奇岩を背負ひ、遠くからこれを望むと誠に配置がよく、慶雲山・慶陵の名にふさは

しい所である。

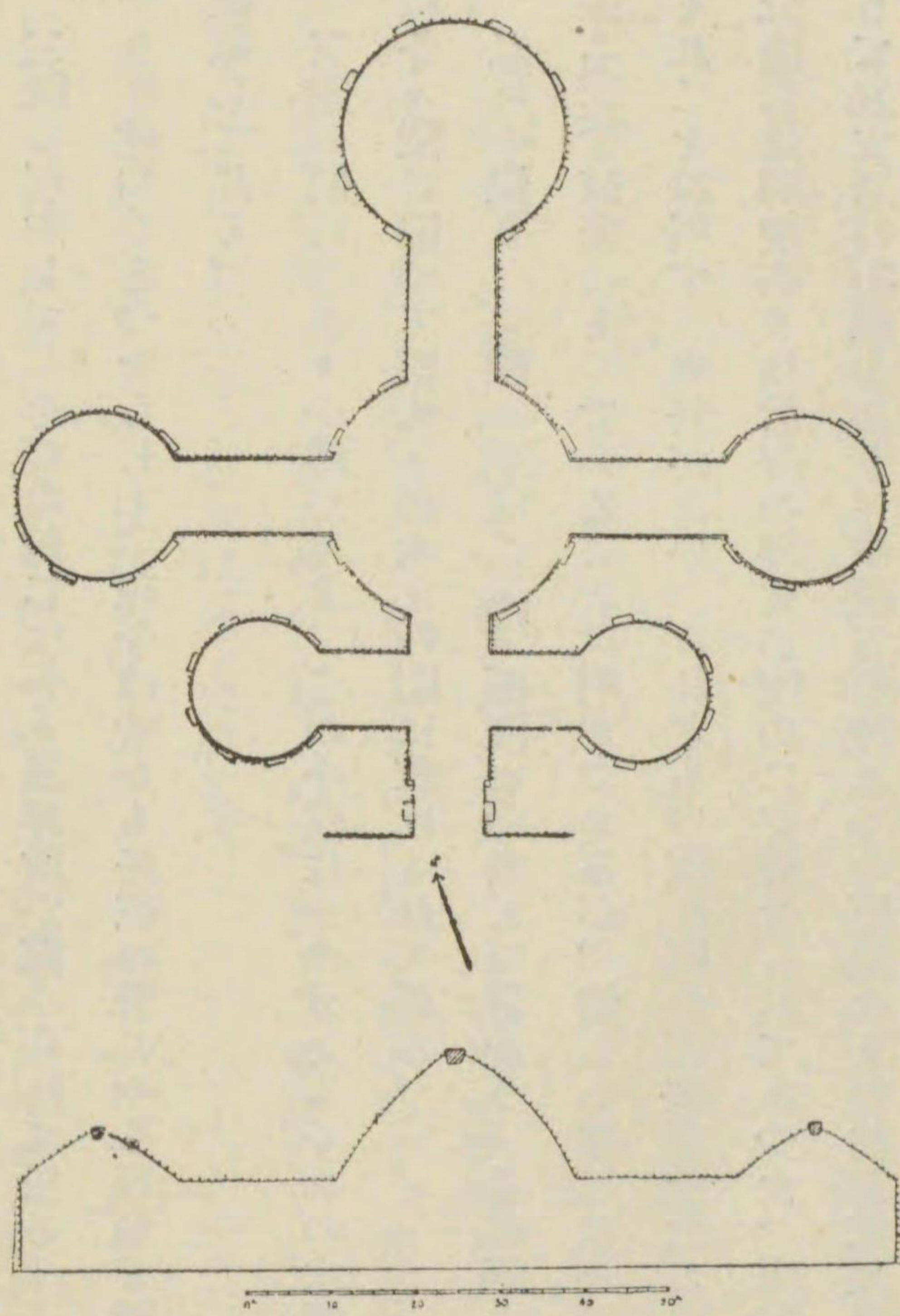
三陵に相對して、その山麓には各々遙拜所が設けられて居る。これ等のもと立派な門のやうな建物であつたらしく、現今は恰かも駱駝の脊のやうな形で残り、瓦や磚の破片が相散亂して居る。

三陵の間には各々小溪があり、この小溪はチヤガンムレンの水源をなして居る。遙拜所は各々陵に向つて溪水と溪水との間に設けられて居る。

私は今假りに三陵を東陵・中陵・西陵と命名して置かう。これ等の三陵は確かに遼の聖宗・興宗・道宗のものであることは明かであるが、惜しい事にはその中陵の外には今日正しくこれを證明する資料がない。けれども中陵は明かに聖宗陵たるは疑ひない所であつて、此處には同聖宗及皇后等の碑文が陵内に安置せられてあつた。東陵から中陵までは山に沿うて五支里の距離があり、中陵と西陵までの距離はまた約五支里強程ある。

興宗は東陵に葬られて居るか、西陵に葬られて居るか。或は道宗陵が東陵か西陵であるるかは今日正しく認める事が出来ない。けれども私は種々の點から東陵が興宗のもので、西

陵が道宗のものらしく考へられる。そして西陵内に契丹文の碑石が安置せられて居たが、それに漢文が刻せられて居ないから、充分これを讀解することが出来ぬ。



面斷從と面平の陵西

更に東陵には碑文らしいものは一片も存在して居なかつた。これ等の三陵はいづれも二度三度にわたつて既に發掘せられたもので現に十年程前に西陵が盜掘せられ、

昨年には東陵中陵が約三ヶ月にわたつて盜掘せられた。されば以上三陵とも一度その陵内

に這入つて見ると、實に室内は亂暴狼藉の跡を留め見るも氣の毒である。嗚呼遼代の黄金時代を形成した以上三帝の陵墓が今日斯くの如き現状を呈するのは、轉た彼の夏草やつは者どもが夢の跡の歎をせしめ、今昔の感に堪へぬものである。

三陵中、破損の比較的少ないものは東陵で、その次は西陵で、その最も甚しいのは中陵即ち聖宗陵である。若しも完全にこの聖宗陵が残つてゐたとすれば、この陵は頗る美をつくしたものであらうと思はれる。けれどもこの陵前の延長せる丘上には石製梵字の陀羅尼幢や石製佛幢等が残存して居て、これ等は當時の藝術品として見るべきものである。

東陵・中陵(聖宗陵)・西陵はともに、地上にあらず地下に設けられたもので、若しこれが完全にもとの儘であつたとせば、容易にその陵墓の内部は固より、その美麗なる外形すらも見る事が出来ない。而かも地下の陵墓を土でかたく密閉して居る。この密閉して居る土は、先づ土を盛りその次に細小にうち割つた石片を積みたゞき、その上に盛土し、その上に石片で積みたゞき、斯くして密閉して居るから陵墓を容易に發掘することが出来な

遼の陵形を見るに、這是支那歷代帝王の陵墓のそれと大に相違して居るやうであつて、遼の陵墓の形式は専ら穹廬の形をして居る。この穹廬の各室が出来、それを中央の穹廬で連接して居るのである。

三陵とも天井・壁・入口等すべて磚を積み重ねたもので、正面は普通支那の家屋の如き瓦を葺き、棟木の木を出し軒その他は磚で作り、アーチ形の入口を設ける。そしてそれに悉く石灰漆喰で塗り、更にその上に金・赤・青・緑・褐等の諸色で彩色して居る。軒瓦は實物の瓦を見せて居る所もあれば、漆喰でその形を造り、その上に彩色して居る所もある。これ等屋根・軒・棟木等の形式は、彼の『李明仲營造法式』と略ぼ類似するやうである。正面の裝飾圖樣デコレーションは時代的特質があり、非常に美麗である。

入口から通路があり、内部は中央の所に大きな穹廬式の角形の室があり、それに左右前後に同一形状の室が連接せられて居る。これ等は天井は上に行く程スボまつて圓錐形を呈し、下の壁は八角形で、その八角の各々角の所には香木の柱が入られ、天井と壁の境にも木の鴨居が設けられ、各室の入口には木の戸が設けられてゐる。木は非常に香り高く今

にも室内は一種よき感じの匂が漂つて居る。

稍や完全な東陵に就て云ふと、前にも云つた如く正面を這入つた通路から各室にかけ、すべて右灰漆喰で塗られ(正面と同じく)その壁にはいづれも等身(約五尺二寸五分)の人物畫が描かれ、壁の上・天井・各室入口の上等は一面に裝飾紋樣が施されて居る。そして中央の大きな室には四期の山水畫が描かれて居る。(山水の壁畫は各々高さ一丈八尺五寸・幅一丈二尺)これ等の人物畫・山水畫・裝飾意匠等は遼代の文化・藝術として見るべきものであるばかりでなく更に北宋、更に遡つて唐宋五代あたりのそれらの好資料と云はねばならぬ。況や現今斯學上これ等の資料に頗る乏しいであるから一層この感をひき起すものである。

室内に帝王の棺があり、その前に木偶が並列して居たのであつて、木偶の風俗は契人固有のものと、漢風のものとの二種があつた。

中陵(聖宗陵)は三陵中最も甚しく無殘な遺跡となり内部の木柱その他は悉く取り去られ、磚面の壁畫・裝飾圖樣等はすべて脱落消失し、今や惜しくもこれ等を見るべきよすがもな

い。加之室の或ものには流水が浸入し、殆んど天井の所まで水にしたつて居る。若しも此處がせめても東陵の如くならずとも、少しでもその面影を留めて居たならば、聖宗の陵墓であるから、頗る立派なものであつたらうと思はれる。

西陵は十年許前某外人に據てひそかに發掘せられ、更に昨年支那人に據て發掘せられた結果、人骨(頭骨)は散亂、壁面・天井等は大に破損し、壁畫その他は一も見つるものがない。木柱・木の戸も持ち去られた跡があり、これ等の木片が此處彼處に散亂して居る。もと此處を發掘した際には天井の丸穴(その前の發掘せし者の入りし所)より這入つたが、當時棺のやうなものもあり、入口には木製の犬と雞が相對して日本稻荷の狐の如き位置にて存在して居たさうである。昨年此處から契丹文字の碑文が發見せられた。

私はこの西陵の正面入口によつた通路の端で、漸やく人物畫の一小部分の所を發見した。これに據て考へてもこの西陵にもともと立派な壁畫の存在して居たことが證明せられるのである。

以上三陵はすでに記した如き、その形状はテントの穹廬形から來て居るものであつて、

もと蒙古人・土耳其人のなせると同様なテントを模したものであることは明かである。單に正面のみ漢式を模し内部はすべて契丹固有のテント式の球家ツブルゲルである。そして陵墓室内の裝飾圖様はまた當時テント内のそれを模したもので、這是今日土耳其人のそれに見ることを得るのみならず、蒙古人の王族のそれにも見ることが出来る。

斯くの如く立派な陵墓は地上大きく丘狀的に盛土せず地下に存在し、何人もこれを見る事が出来ぬやうになつて居る。これは抑も如何なる理由によるのであるか、今日の人から見れば實に不可思議である。けれどもこれ等は北方人の常になす所であつて、彼のカヅロフ氏に據て發掘せられた外蒙古の墓もまた深い地下にあつた。蒙古人の墓制もまた地下に設け、今に至るまでジンギス大汗の陵墓の知れないのもその理由から來て居る。

更に奇妙なるは各室の或所に水を出す場所を造り、其處から水を室内に入れる装置をして居るやうである。現に中陵の如きは或所は殆んど天井に達するまで水にしたされて居る。這是後人の來て陵墓を發掘し、副葬品等をひそかに盗み去るを防いだものか。

私はワールマンハの三陵の如き墓を、尙ほ遼の都、上京城(ボロホトン)内の西隅の丘

上に於ても發見した。これも帝王の陵墓であることは明かである。
更にその小規模である墓は、滿洲の鞍山或は隆昌州等に存在して居る。これ等は遼代のものに屬し、當時の遼の東京府治のものである。これ等は滿洲の東京府治にある穹廬形墓は、東蒙古に存在するものと相等しくいづれも地下にあり、壁・天井ともに人物畫・風俗畫からデコレーション等にいたるまで存在する。そしてこの墓は磚を積んだものもあれば、また石造のものもある。

三

以上の東陵・中陵・西陵の三陵はともに同一形式であるが、そのうちでも中陵と西陵は甚だしく陵内は破壊せられ、天井・壁等の白灰漆喰等は全體に脱剝し、その上に描かれた繪畫の如きはすべて消失して無い。唯だ陵墓の磚の組み積まれたるを見るのみである。これ等は藝術史上最も惜むべき極みと云はねばならぬ。然るに東陵は、不幸中の幸にも、陵内の壁畫は不十分ながらも今に存在せられて居るから、これに據て當時の面影をしのばねば

ならぬ。

これ等三陵は聖宗・興宗・道宗のものであると私は記したが、さて然らばこれを證明する何等かの證據はあるか。この事に就いて時代的證明をして見たい。

中央の陵墓が聖宗陵であることは、陵内に聖宗の碑文の存在したので知ることが出来る。這は『契丹聖宗宣皇帝墓碑』と題し、それに「文武大孝宣皇帝哀冊文」が刻せられて居る。尙ほ等しく聖宗の皇后の墓碑もある。これ等の墓碑は林西縣城に運ばれてあつたが昨年夏熱河の某支那人の爲めに持去られ今やなくなつて仕舞つた。けれどもその題字拓本の寫と、その哀冊文だけは残つてゐるから、この中陵が聖宗陵であると云ふことが明かである。

茲に掲げる『欽愛皇后哀冊』とある拓本は即ち聖宗皇后の墓碑の上にある題字である。この皇后は大行太皇太后で、道宗の清寧二年五月康午陵上、欽哀皇后と尊諡して癸酉慶陵に葬られたのである。

中陵は最初に聖宗が葬られ、その後皇后もまた此處に葬られたのである。

『遼史』・『遼史拾遺』・『契丹國志』その他に據ると、聖宗の崩ぜられたのは、遼の開泰十一年六月己卯であり、興宗の景福元年閏十月壬申に文武大孝宣皇帝と諡され、乙未に大行皇帝(聖宗)の梓宮を永安山太平殿に殯された。同七月癸丑には詔あり大行皇帝の御容を寫して居る。丁巳には上、したしく大行皇帝の御容に謁し哀慟之を久しくして居られる。丁卯には上、太平殿に謁し、先帝御する所の弓箭を焚かしめられ、八月壬午には皇帝の梓宮を葦塗殿に遷された。十一月戊申には興宗躬ら慶陵を見られた。これは慶陵の造墓の出来上りを驗せられたのである。辛酉には葬式の際使用する新造の鎧を閲せられ、十一月壬辰には上、西僚を率ひ葦塗殿を尊し、大行皇帝の服御玩好を出して焚かれた。斯くして甲午には文武大孝宣帝を慶陵に葬られたのである。乙未には契丹の風として天地を祭り、丙申には上、慶陵に謁し遺物を以て群臣に賜ひ、その陵墓のある山を慶雲と云ひ、その傍に殿を建て、望仙殿と曰つた。

聖宗の陵墓(中陵)は斯くの如く頗る鄭重なる儀式により幾多の時間を要して營まれたのである。私はこれ等の文献を読んで中陵に對すると何だか一種の感にうたれたのである。

西陵は道宗の陵墓であることは、陵内に『仁聖大孝文皇帝哀冊』の墓碑を存するので明かである。陵墓内のは契丹文の碑文もあつた。これ等の碑石も昨年夏に熱河の支那人某に據つて持ち運ばれた。

道宗は壽隆七年春正月甲戌に崩ぜられ、仁聖大孝文皇帝と尊諡して天祚帝乾統元年六月辛亥に宣懿皇后と慶陵に葬られた。この仁聖大孝文皇帝の墓碑は、西陵内に残存して居た。この陵が道宗のものであることは明かである。

この西陵には、陵の入口の左右に木製狗と雞が相對してあり、更に内部棺前には木偶が並列し契丹文字の碑文も存在してゐるが、これも昨年熱河の支那人某の持ち去ることゝなつた。

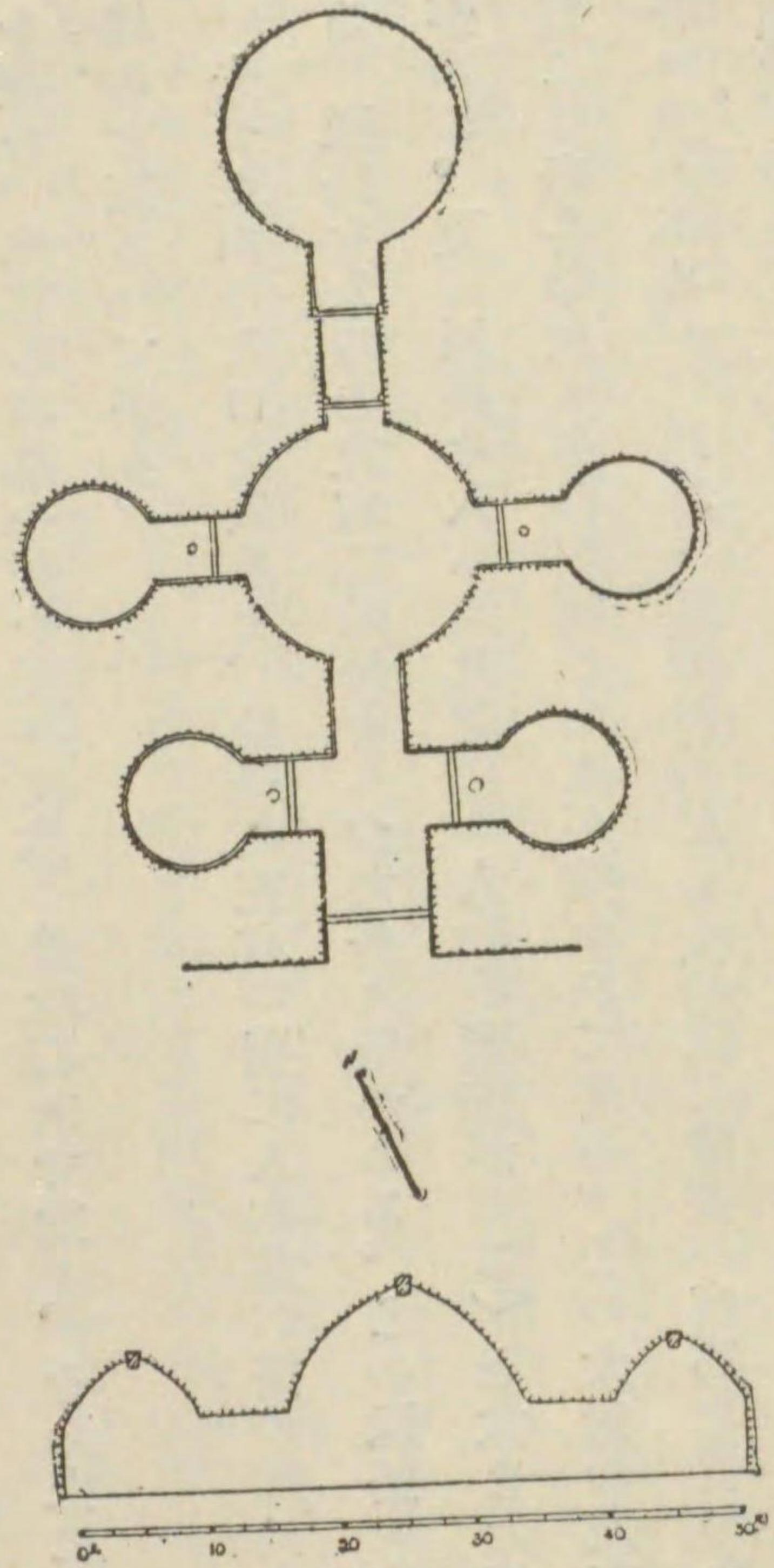
中陵が確かに聖宗であり、西陵がまた確かに道宗であるとせば、その残りの東陵が興宗のものであることは自づから推知することが出来るのである。されど惜しいことには、その碑石がすでに散逸消失して仕舞つた。

興宗は遼の重熙二十四年秋七月壬午不豫、巳丑行宮で崩ぜられたが、道宗の清寧元年十一月甲子興宗皇后と慶陵に葬られ、同二年五月戊戌上、慶陵に謁せられた。東陵は即ちこの興宗及び皇后を葬つた所である。

四

この興宗陵は『遼史』に據ると、道宗の清寧二年五月甲辰に興宗廟に事ありと記るして居るが、這は何か興宗陵に就て一大事變があつたのではなからうか。當時遼代の各陵墓に事あつたのは頗る注意を要する。即ち清寧元年壬申次懷州の太宗・穆宗廟に事あり、甲戌上祖陵に謁せられ、戊寅冬太祖・景宗・興宗廟に事あつて羣臣賀を受けずとある。これに據つて見ると當時各陵墓に何か事があり、殊に興宗陵にこの事があつたのは最も注意に價する。興宗は聖宗に續いての遼の帝王であつて、遼代としても彼の治下は實に黄金時代であつた。否な興宗の時は遼代に於ける全盛期の極頂に達して居た。幸にして興宗陵は比較的、昔の面影を認めることが出来るから、私はこれに就て記して見たい。

この墓陵は聖宗陵の東に存在し、墓は地平線下にある。墓陵はすべて磚で積み重ね、そのプランとセクションは左の圖の如くであり、高さ・奥行、幅等はこの尺度で見られたい。這は他の中陵も西陵も同一形式である。



圖面平と圖斷縦の(宗興)陵東

て居る。これ等の各室も等しく穹廬型である。

前にすでに記した如く、この陵も又穹廬型でもテナントを模したものである。即ち中央にある大きな一室を中心として、それから前後左右に各室が出

正面は一直線で塼壁となり、その上部に瓦を葺く形や棟木等を示し、これに美しい色彩で裝飾せられて居る。這是全く當時の漢式宮殿を模したものと云つてよい。入口はアーチを組む。内部の通路や壁や天井は悉く漆喰石灰で塗り、その上に人物畫・山水畫・裝飾紋様等を施されて居る。

先づ正面の入口を入ると、通路の左右の壁に人物畫が描かれ、中間に木の門の跡がある。通路を入ると左右に通路をもつた各々室がある。この通路・内部の室には人物の壁畫がある。更に通路に入る（此處にも人物の壁畫がある）と大きな室となる。此處の四つの壁には春・夏・秋・冬の四期の山水が描かれて居る。この大室の左右には等しく通路による各々室があるが、此處は壁面が甚だしく剝脱し繪畫の痕跡を留めない。大室の後には尙ほ通路がある、これが奥の所で通路の幅が廣くなり稍や大きな室がある。以上の各通路と各室との門には木の門戸が設けられて居る。そして各通路から門戸を越えて各室に入らんとする地面には直徑四寸の穴が開けられて居る。これは水の出る穴で、若しも陵墓發掘者のあつた場合に戸の開閉などに據て水の流れ出て室内が満水するやうな装置らしい。

私は今これからの陵墓の壁畫に就て記さうと思ふが、先づ順序として山水畫・人物畫・裝飾紋様の三つに分けて記すこととする。

山水畫の描かれて居る所は、陵墓内、中央の大室で、此處は前後左右四ヶ所の室に通ずる通路に連接せられて居る。山水を描かれた壁は四通路入口の間に存在し、その壁畫の大きさは、高さは一丈二尺（地下より天井の鴨居まで）幅は一丈で、可なり大きなものである。

山水畫は右に記した如く、可なり大きなもので、各壁に自由に春・夏・秋・冬と四つに描いて居る。この四期はこの地方、即ち東蒙古の景色を描いたらしく、興安嶺山中、殊に陵墓のあるワールマンハあたりの景觀のやうな氣がする。春・夏・秋・冬等各々鳥類・樹木・草花等に據てよくそれを現はして居る。上には一種の雲が描かれて居る。

山水畫の描法を見るに、所謂水墨を主とする南畫派の所はなく、いづれも線畫であつてその畫中の山・丘の輪廓は明るくしつくりして居て、墨色も確かである。さりとてその輪廓は極めて強くなく、柔かい所がある。次に畫中の鹿・猪等を見るに、いづれもスケッチでこの動物一疋を見ても一つの立派な繪である。鹿の立つ所・猪の走る所・鳥の飛ぶ所等はす

べてその實物を見る通りで、習性もよく示されて居る。樹木や草花等もまたスケッチとして見られる。以上の哺乳動物・鳥類・樹・草・花等は、いづれも一つ一つ見ても立派な繪畫である。

以上の山水畫は濃・淡の墨色ばかりで描いたものと云ふに、決して左様でなく、花に赤色を用ゐる、草樹の葉に緑を用ゐて居る。これ等から見ると、この山水畫は簡單なる彩色畫であると云つてよい。

壁畫の山水は、要するに確然たる輪廓で描き、これに彩色したものである。そして一つの壁畫山水はその畫全體から見ても繪畫として面白く、また全體の畫中から山・丘や動物植物を一つ一つにして、その物を見ても面白い。これは全體の繪としてもスケッチ、また繪畫の一分子を一つ一つ見てもスケッチである。この壁畫の山水はこの二つが合して出来て居る。

彼の南宋畫山水の墨色からなるそれは、その墨色の味が全體の山水に於て、理想化せられて價值を有し、その山水中の山・丘・人物・樹木・草花等を一つ一つ取出して見ると何の面

白さもない。這是南宋畫の特色である。

今この壁畫の山水を、試みに南宋畫の山水と比較するに全く相違があつて、互に反對の特色を現はして居る。

北宋山水畫・南宋山水畫の畫論は、これまで支那畫史や日本畫家の間に盛であり、そのうち南宋畫はその材料として見る可きものは多々にある。けれども遺憾ながら北宋のそれは極めて乏しい。否な正確な山水畫として見る可きものは殆んど残つて居ない。彼の『宣和畫譜』を見ても當時徽宗皇帝の寶庫には北宋畫も多く所藏せられたが、今は僅かにその畫題があるのみで、その實物の繪畫は見る事が出来ない。支那幾多の畫史もまた單に畫論たるに過ぎない。

然るに北宋の山水畫は、この遼興宗陵内壁畫の山水畫に據て、その不足を補ふことが出来る。而かもこの山水畫はコピーでなく、壁面に墨を以て大々的に廣き場面に雄健に描いたものであるから、這是藝術史上、畫史上、大に比較參考となるものである。

唐代玄宗皇帝の時、李思訓は山水畫に於て所謂「金碧輝映」で著色山水である。更に北宋

に入て、その宋初に李成がある。彼は墨を惜むこと金の如く、その畫面は線によつて描かれて居る。これ等は李思訓より發して所謂北宋畫に變化傳統して居たものである。今東陵Ⅱ興宗陵の壁畫を見るに、這は明かに著色山水であつて、唐の李思訓のそれに傳統的に似たる所がある。この時代は遼の興宗のものであるから、這は北宋山水畫として見る可きものであらう。さてこの繪には署名がないが、當時斯くの如き大作の山水を描いた人は、凡人では六ヶ敷い、必ずや當時、遼朝に仕へた名ある畫伯の手になつたものと認めなければならぬ。

この山水畫はその上邊に暖簾の如き垂れ布を描いて居るが、この暖簾の中に、鳳鸞の相對紋様を描いて居る。なほ山水畫の左右の輪廓には龍の紋様が附けられて居る。這は山水畫に錦地で表装したる形であらう。

これ等四つの四期山水は、當時穹廬式宮殿の大廣間に實際に掛けられたるそれを模したもものらしく思はれる。そして上部鴨居下の見ゆる細い垂れは、また當時實際に鴨居に裝飾としてひき廻はしてあつたのであらう。斯く考へて來ると、遼代に於ける廣間の状態を聞

接に知ることが出来る。

現今でも蒙の王庭内のテントや、中央亞細亞居住キルギズ等土耳其人貴族のテントには、そのテント内には種々の裝飾をして居るが、これ等はこの壁畫の山水の如きと同一である。遼代に於ける王族等のテント内もまた斯くの如くであつたやうに思はれる。

この壁畫の山水は、蓋し五代から宋初に入つた畫風で、北宋當時に行はれた山水畫として認めらるゝもので、これがまた契丹の遼に這入て來たものであらう。

『宣和畫譜』によると、徽宗皇帝の御藏には北宋畫は中々多く所藏せられ、四期山水の畫題のものも多く見える。これ等は以上の壁畫山水を以て推知すべきものである。

壁畫の山水を地理學的に見ると、南支那や西蜀あたりの風景でなく、北支那、否な東蒙古ワールマンハ附近の興安嶺内の景色のやうに思はれる。さうすると此處の地形を殊更に畫人をして描かしたものであらうか。

私は以上の山水畫の山や丘の輪廓線の柔かくひかれた所は、我が藤原時代の山水畫を見る心地がする。尙ほこれに、鹿や草花、樹木を配する工合もまた同一である。想ふにわが

藤原時代の山水畫はこれ等の畫風を直接間接に受け入れたものでなからうか。這是餘りに互の類似點があるので驚かされるのである。

茲にある、山水畫は、闇黒な室内に存在し、肉眼では精確に見られない。私達は懷中電燈などに據つて漸やく見た位である。そしてこの山水畫をカメラにをさめた時も、マグネシウムで頗る困難して撮影したのである。(口繪第一頁を参照せられたい)

今日北宋山水畫の殘存する物の、乏しい時であるからこれ等の壁畫は斯學上最も大切貴重なる資料と云はねばならぬ。

五

これから陵墓内壁面の人物畫に就て記して見よう。讀者は私がこれから記さうと思ふ壁面人物畫に就ては、前章に示した東陵(興宗)の平面圖を先づ參照されたい。

前にもすでに記した如く、陵墓内の壁面はすべて漆喰で白く塗り、其上に人物畫が描かれて居るのである。人物畫は中央の山水畫の所を除いて、もとは各室にこれが存在して居

たやうであるが、今日は唯だ入口通路の左右と、第一の東西兩室及びその通路のみに壁畫があり、その他の各室通路には惜しくもこれが壁畫の漆喰とともに脱落消失し見る影もない。されば遺憾ながらこれ等の壁畫は以上の僅かなる殘部によつて調べるより外は仕方がない。

今日以上の如き壁畫の殘つて居るのは、東陵のみであるけれども、昔は中陵(聖宗)や西陵(道宗)にもこれがあつた事は明かである。茲にその事實を確かむるよい證據としては、西陵の入口を入つた所の通路壁面(左側)漆喰の殘部の上に、僅かに人物畫の鐵筆の痕跡が認められるのである。這是明かに他陵にも壁畫の描かれて居たことを示すものである。

壁畫の人物は、その描法をよく檢すると、最初に先づ鐵筆のやうな物で、壁面に線彫で下繪を描き、これが大體出來上つた時に、更に始めてその線の上に筆で墨をつけたものである。壁面上この線彫のよく出來て居ない所や、線を誤つた所には、それを消した痕跡が見える。この線彫は肉眼でもよく見え、尙ほその上に紙を置き拓本をすると、その線はよ

く紙上に現はれ来り不完全ながらその人物畫を取ることが出来る位である。人物は殆んど等身大で、その高さは約五尺二寸五分位、人物の線は太くよく描かれ、明かにスケッチである。顔面・手等には實際に近い皮膚の色を施し主として薄い褐色を示して居る。眉・眼・鼻・口・耳等は云ふまでもなく、その顔形等から身長等に至るまで各々注意して描かれ、個人々々の特徴を明かに示されて居る。蓋しこれ等は一人々々を寫生的に描いたもので、決して想像畫ではなく、確かに實在の人物を描いたものである。加之、これ等の壁畫の人物の肩の上には各々その人物の自筆で契丹文字で署名がしてある。この契丹文字は各々の人名であらう。そしてその書體は一様でなく各々相違して居るから、這は明かに壁畫に描かれた人物が自らサインしたことを知る事が出来る。

今日契丹文字の残つて居るのは、主として石刻であつて、實際に筆で書いたものは頗る稀である。然るに此處にはそれが墨で書かれて居るから極めて興味がある。更にそれが實際に書いた人物が繪としてその下に描かれて居るから一層興味をひく。尙ほこれが年代的に遼の興宗時代のものであるから頗る價值がある。契丹文字が石刻の場合と相違し、筆で

書いた場合には斯くの如き書體を有して居たこともこれでよく知る事が出来よう。この事實から推考すると、契丹文字は確かに遼代興宗の時代に契丹人相互に行はれたのみならずその次の道宗にも續いて行はれた事は、彼の陵墓内に存在した契丹文の石碑に據つても確かむる事が出来るのである。

六

さて以上の人物畫はいづれも彩色を施され、その色彩は黒・朱(臙脂べんじに近く)・綠青・胡粉・褐・金・銀等からなり、これ等をよく調和して彩色して居るから實に立派なものである。

人物畫の描線は嚴密な程正しく寫生派畫風であつて、唐末・五代からの寫生派の傳統を受けて居るものである。我が國傳來の京都東寺の龍猛・龍智の二祖影、若しくは高野山普門院勤操都影と比較すべきもので、何處かに互に似通つた所がある。要するにこの人物畫は五代あたりから北宋までに涉つて存在流行した人物畫であらう。

この人物畫のかく陵墓内の壁面に描かれたのは抑も如何なる理由があるのであるか？

這は大に注意を要する事であらねばならぬ。私の推察によると、これ等の人物は、陵墓の主人公たる興宗の親しい臣下であつて、幽界に御供する殉死に代へた畫像であらう。そして各々その肩の上にサインした契丹文字に確かにその姓名を附記し、一層服従・誓盟等の實を示したものであらしう。

これ等の壁畫は、嚴密なる個人的スケッチであるから、これ以てまた一方に人類學上の資料とする事が出来る。乃ちその身長・顔形・皮膚の色・姿勢等は確かに契丹民族のフィジカル・ケヤラクターとして採用する事が出来る。次に風俗誌・考古學上から見ても、また確かに契丹の風俗を明かに知ることが出来る。

彼等の風俗は壁畫に據て見ると、身には筒袴の胡服を着し、革帶を用ひ、足には革の長靴を穿つ。頭には丸味の縁無帽を被つて居る。或者は髪を垂れ、辮髪をして居るものもある。これ等の風俗は契丹固有のもので、彼の『遼史』・『契丹國志』・『遼史拾遺』等の乏しい風俗の記述以上に参考に供する事が出来る。彼等の衣服の色は黒色または緑色が主で縁無帽のうちに紗帽もある。

武器として棒の先端に金屬製の丸味を帯びた物を差込んだ蒜頭・弓箭がある。弓は箭筒に入れ腰にさげ、また箭は別に袋に入れて居る。これ等の武器も大に参考とするに足る。以上は契丹人固有の風俗であるが、壁畫の人物中に入口から入つた通路の左右の壁に描かれた人々は、胡服を着用せず、その頭には漢風の冠を戴き、衣服もまたそれである。さうすると此處に描かれた風は胡服・漢服の二種あることが知られる。『契丹國志』には「國母與番官皆番服、國王與漢官則漢服、番官戴氈冠……」とあるはこれであらう。

今これ等の人物をいかなる陵墓内に置かれる位置に描かれて居るかと云ふと、先づ通路の入口に近い所に各々相對して一人の人物が描かれる。即ちその右の方は丸帽を被ぶれる者、左の方は無帽で蒜頭を携へて居る者がある。この二人は門番としての強者であらう。それから次に左右の通路の壁には漢冠漢服の人々が互に相對して夥多しく並立して居る所がある。これ等は葬式の哀歌をかなしく合唱する所らしい。そして左の方に一人の樂人が一方のみ折つた烏帽子を被り琵琶を奏して居るが、この烏帽子の様子は我が藤原時代のそれによく類似する。彼等は琵琶につれて哀歌を合唱して居るのである。

以上の通路を進んで行くと、左右に室があり、これにまた各々通路がある。紗帽の者は右の通路の壁に描かれ、此處の相對した通路には各々數人の人物があり、また右の室内には十數人の人物がある。更にその左の通路に數人相對してあり、その室内には十數人の人物がある。これから新に中央の山水畫のある大室に行かんとする通路の兩壁に人物が描かれ、或者は漢冠漢風の者、契丹の風俗の者があり、中央の室に、接近する所には相對して右の方には一人弓箭を腰にして立つ者、左の方に一人箭袋を腰にして立つ者がある。

以上で人物畫が絶え、中央の大室に入ると人物の繪畫はなくなり、この室は山水畫のみとなる。この中央の大室の左右の通路・室やその北方の通路・室には人物畫は見えない。殊に北方の室は磚や土が閉塞して入る事が出来ない。

七

以上は興宗の陵墓に於ける人物畫の大概を記したものであるが、讀者はこれに對してどんな感じをいだかるゝであらう？ これ等がいづれも實際の身長大に描かれ、而かもこれ

が彩色を施したスケッチであるから大に參考とする事が出来る。私は暗黒な同陵墓で點火のもとでこれをよく見つめる程、恰かも生きた彼等に接するやうな氣がしてならない。否な暗黒な幽界で契丹人に出會するやうな氣がする。

今日遼代(また北宋)に於て、斯くまで立派な人物畫がコツビーでなく肉筆の儘残つて居る所が何處にあらう？ この人物畫は支那畫史の上から最も價值のあるものであり、更に人類學上・土俗學上・文化史上等の上から見ても大に價值のあるものと云はねばならぬ。

これ等の畫は、山水畫に於けると同じく、決して普通の畫人のよく描けるものではない。必ずや當時の遼朝に仕ふる相當な繪師の手になつたのでなければならぬ。これは漢人の手に據て描かれたものであらう？ 或は契丹人に據て描かれたものであらう？ 私は前者の繪師の筆となすものである。

けれども契丹人の皇族・官吏・僧侶等のうちには當時繪畫は頗る盛んであつた。夥多しい藏畫家もあつたとともに、實際にこれをよく描く人もあつたのである。假令ば『繪事備考』に據ると、遼人蕭丹の如きがその一人であつて、同書に「蕭丹は遼の貴族で、官は南院樞密

使に至り、讀書を好み、最も丹青を善くする。唐の裴寬邊鸞の迹を慕ひ、凡そ使を奉じ宋に入る者に命じて必ずその名迹あらば重價を惜まず購求せしめ、裨潢、後攜歸せしめる。本國臨摹咸く法がある、即ち道宗清寧中、義宗千角鹿圖を賜はつた」とある。これを見てもいかに遼人の貴族が繪畫讀書につとめたかが解せられる。

『圖繪寶鑑補遺』に據ると「陳升は聖宗翰林待詔、嘗て詔を奉じて、南征得勝圖を寫さしむ」とある。陳升の如きは遼朝にて繪事に精しい人で、斯くの如き人は當時多くあつたであらう。

兎に角、以上の人物畫は山水畫とともに遼代に於ける繪畫を知るべきもので、這はまた明かに北宋の繪畫を語るものである。私はくり返して云ふが、北宋の人物畫や、山水畫は『宣和畫譜』に畫題とその畫師の名は見えるが、今日容易にその正しい繪畫その物に接することが出来ない。然るに幸にして此處に大々的な兩者の肉筆が残つて居るから、これで充分北宋畫の研究資料として採用するに足りる。

これ等の契丹、即ち遼の當時に存在する繪畫は固より北宋の畫であつて、北宋から入り

來たものである事は明かである。けれども當時遼に行はれたその山水畫や、人物畫は、兩者とも寫實派、即ち彩色の繪畫であつて、決して理想派のものではない。この點は最も注意を要するものである。そして遼の壁畫が、彼等の住居地たるワールマンハ附近の風景を描き、或は彼等の固有風俗やその人物を寫生して居るのを見ると、よしんばこれ等が北宋畫であるとしても、既に已に北宋畫は契丹人に據て、自由に己が物として用ゐられて居たやうな氣がする。

八

私はこれまで東陵(興宗)に於ける山水畫・人物畫等に就て記したが、これから壁面の裝飾紋様に就て記して見ようと思ふ。

裝飾紋様の施されて居る所は、陵墓の正面の軒・料栱・アーチ・各室の鴨居・天井等でありここには胡粉・墨・朱(臙脂に近い)・綠青・藍・黃・金銀等で彩色を施して居る。これ等の裝飾紋様は今日でもその彩色はよく保存せられ、陵内はこれが爲めに實に美しく輝いて居る。

各室の天井はいづれもテントに於けると同様の廬穹型で、上に行くに従て狭められ（東陵の縦斷圖を見よ）天井の頂點は空が開いて居るから、此處には外から圓錐形の石を差し込んで居る。そしてこれ等はすべて漆喰で白色に塗られ、その上から彩色で紋様を描き出されて居るのであるから、陵内に入てこれを下から見ると、誠に美麗莊嚴である。

さて陵外（入口正面）・陵内に施されて居る紋様は、抑もどんな種類・分子から構成せられて居る？ これ等を研究するのは遼代の藝術や文化を知る上に於て最も大切な事と考へられるのである。さてこの等の紋様は今私の調べた所では、左のものからなつて居るやうに思はれる。

(A) 雲形 この雲形は唐末から北宋・契丹に於て盛んに用ゐられたもので、這是北宋・契丹に於けるシムボルとして見ることが出来る。そしてこの雲形に種々の變形がある。當時この雲形は神祕的のものとして用ゐられた形跡は色々のものの上に於て認むることが出来る。この神祕的雲形は陵墓内の裝飾として圖せられて居るのである。殊に陵墓内山水畫にすら、その天空の所に寫生ならざる雲形を描いて居

る。這は無くてよいものであるに拘はらず、彼等は此處にも尙ほこれを用ゐて居る。彼等は雲形がないと、何だかおちつかない感じがするものやうに思はれる。

(B) 龍 龍は陵内の紋様（或は繪畫）として用ゐられて居るが、這是普通の庶民階級でなく主として王族間に用ゐられるもので頗る權威的圖様である。この龍が此處に描かれて居るのは、いかにも此處が遼の興宗陵たる事を表現して居るやうである。そして陵墓壁面に描かれたる龍は、これを繪畫として、將た圖案化せられた紋様として遼代（北宋）の龍を見ると極めて興味がある。これに火炎のある玉を配して居る。

(C) 鳳鸞 鳳鸞は唐代から遼（北宋）等にかけて盛んに用ゐられたもので、これに圖畫と紋様とがある。本陵墓にもこれが描かれて居る。或者は一體、或者は相對して一對、或者は雁行に列をならべて飛び行く狀を紋様化して居る。

(D) 鸚鵡紋 この鳥が相對して圖せられて居る。

- (E) 蝶紋 蝶の紋様がある。これは一疋描かれて居る。
- (F) 牡丹 この花は所謂寶相華の種類で、唐末から遼(北宋等に盛んに圖様として用ゐられたものである。牡丹は遼(北宋)の當時に於て、六朝から隋・唐に至つて盛んに用ゐられたアカンサス等の西域傳來のものを支那化した變形のものであり、これは北宋に至て益々民族化を蒙つた著しい興味あるものである。この牡丹が花そのものとして、或はこれが紋様化せられ、陵墓の内外の裝飾に盛んにこれが用ゐられて居る。這是當時の代表圖様として見る可き極めて大切なるものと云はねばならぬ。讀者はよろしくこの牡丹が紋様として種々に變化する所に注意せられたる。

- (G) 龜甲紋 陵墓の紋様中に龜甲紋がある。そしてその中に牡丹華を配して居る。
- (H) 線抜き紋 線が互に交叉抜き合ひ紋様を構成して居る。
- (I) 波線紋 牡丹華を中に取り入れ、その輪廓として波線を描いて居る。
- (J) 大極紋 陰陽互に抱合ふた圖様で、これは陵墓紋様中に見ることが出来る。この

大極紋は中陵(聖宗)に向て建てられたるチャガン サバラガ(遼代の慶州)の博塔の裝飾圖様中にも認めらるゝものであり、同時代にはこの圖様が用ゐられたものと思はるゝのである。

- (K) 菱形紋 これには柱・軒等の所に施されたもので、即ち菱を重ね合ひその兩端の所に牡丹華が會して居る。
- (L) 圓形紋 これは波線紋に於ける如く、牡丹華を中に取り入れ、その周圍をこの圓形紋で包んだものである。
- (M) 點々紋 點々紋は○○○○の如きもので、這是サツサン朝紋の特有のものである。これが尙ほ裝飾中に附けられて居る。
- 先づ概ね墓陵に施された紋様は以上の如くであり、これ等が彩色で描かれて互に交雜せられて陵墓内を飾られて居るのである。そしてこれ等の紋様はいづれも各室天井の頂點の所で、一つの星形の圖様で結末を上手に附けて居るやうにして居る。這是テントの頂點の所と同一意味である。

以上の裝飾紋様は、山水畫・人物畫の上部に存在し、その區界は鴨居を以て境とする。即ち鴨居から天井の頭頂までは裝飾紋様で、その以下は山水畫・人物畫である。

九

東陵内の裝飾紋様として用ゐられた分子をよく注意すると、その分子は動物的のものとしても、植物的のものとしても、いづれも漢族傳統のもので、線・圓等もまた左様である。紋様の分子中不思議にも確然たる西域式のそれを交えない。

龍・鳳鸞・鳥・蝶等にしても純漢族のものであり、殊に龍・鳳鸞・鳥・蝶等の如きは最も彼等の尊び敬愛するものである。更に牡丹の如きはまた彼等の賞翫する漢族唯一の愛花であり、當時すでに隋・唐に用ゐられたアカンサス等の西域華に代つてこの牡丹が盛に描かれ紋様化されて居るのは極めて興味がある。陵墓の裝飾紋様としての草華は殆んど全く牡丹であつて他の草華を一も用ゐる所がない。

この牡丹華紋は、これを前代に行はれたアカンサスの如き西域華及びその構成と比較するに、遼代(北宋)の牡丹華紋はアカンサス紋及びその構成より變化し、これを新なる材料に交代せしめたもので、這は五代から遼代(北宋)に至て藝術的に成功した新事實である。従て當時漢族の宋代に入りてその民族性の自覺・周圍の状態等は彼等をして終に斯くせしめたもので、這は當時の思想・物質等種々の事物に於て認めらるゝのである。牡丹華及びその紋様の發現の如きも、その著しい事實の一つとして見る事が出来る。その牡丹華は所謂寶草華であつて、當時に好愛せられたことが知られる。

北宋の牡丹華紋が前代のアカンサス紋に取つて變つたことを證明するよい材料は、陵墓の紋様中に牡丹華の葉をしてアカンサスの葉の如き形の殘存することである。これはアカンサスから牡丹華に變化する未だ過渡の状態を示すものと云つてもよい。

更に西域の鳥は、漢族傳統の鳳鸞が代つて復活し、尙ほ龍紋の用ゐられたるが如き頗る興味ある事と云はねばならぬ。殊に鳳鸞の紋様化はこの時代の特色あるものである。

太極紋の紋様化は、當時道教等の感化ではあるまいか。この太極圖を巧みに他の紋様中に取り入れたるもまた興味あることではないか。

雲形の變化は頗る面白く、遼代(北宋)に於てはこれはいかなる物にも描いて居るのであつて、這は繪畫の形を取り、或は紋様化して用ゐて居る。彼等はこれを寶雲・瑞雲として極めて目出度・神祕的表象としてこれが陵墓裝飾に一個獨立し、或は龍と並行し、或は他のものと混在して種々な變化を呈して居る。この雲形を遼(北宋)の圖様から取り去らば頗る寂しい感がする。

線・圓等から構成せられた紋様に、龜甲紋がある。線抜き紋がある。これ等は牡丹華を配せられ、共に一種の紋様を表現して居る。これ等は遼代(北宋)のそれとして最も注意すべきもので、這は確に同時代を飾るものである。

以上の諸分子と、その構成は裝飾として當時に流行したものであつて、これ等は六朝・隋・唐のそれと比較すると全く相違して居ることが感ぜられる。そして前者は甚しい西域化流行の著しい事實が見え、後者はこの臭味なく全く北宋代の漢族自覺的のそれが著しく認めらるゝのである。

遼代の契丹人も、この感化を受けたもので、這は東陵(興宗)に於ける裝飾紋様が明かに

これを示して居る。這は遼代文化を研究する上に於て最も注意を怠つてはならない。

この感化と流行は、啻に契丹(遼)のみならず、這は延いて我が日本にも影響して居る。

即ち我が藤原時代はこれと最も深い關係があつて、彼の宇治平等院内の裝飾紋様の如きは

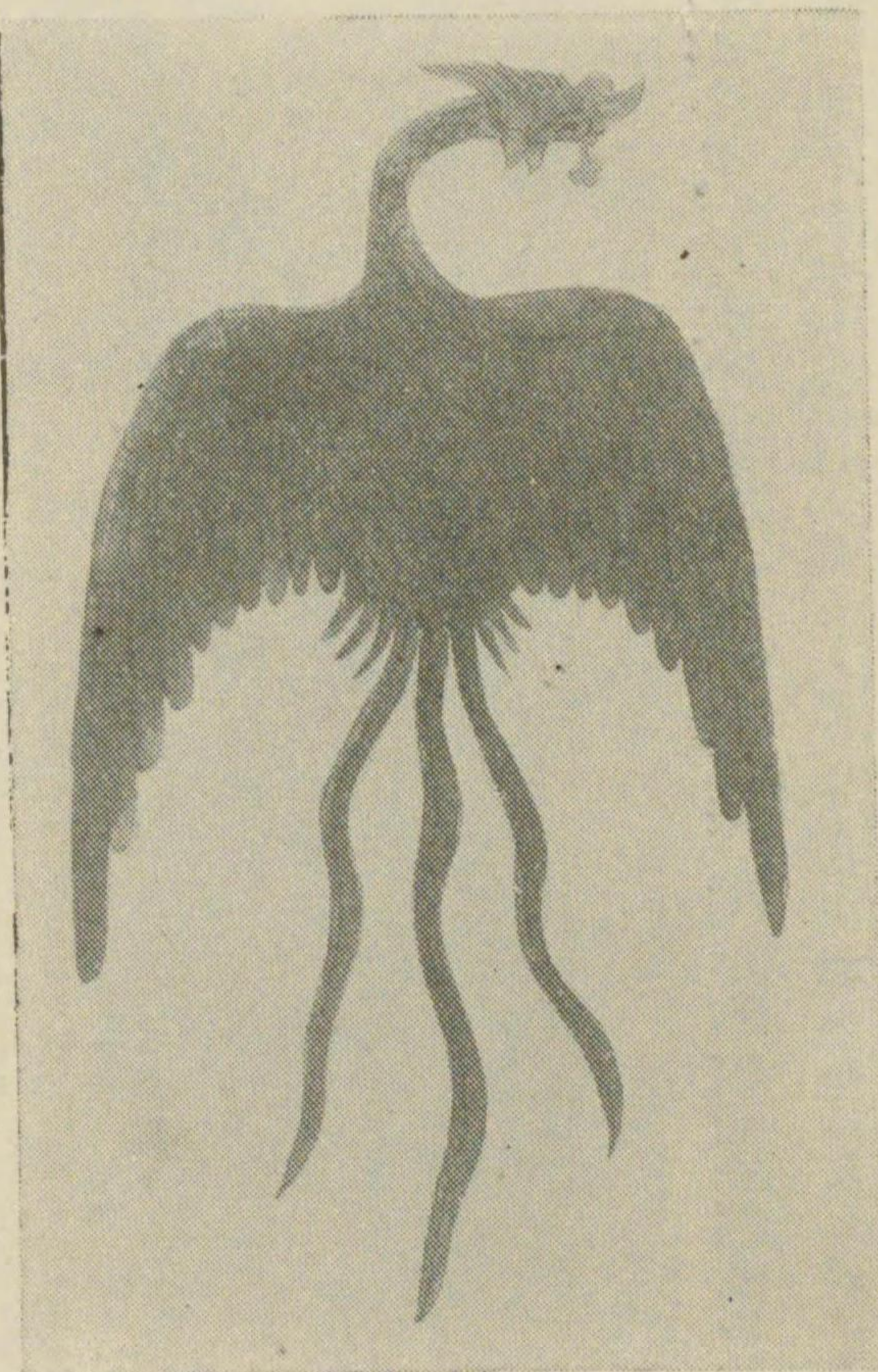


天井か頂點の裝飾圖様
(點頂は形星)

これとよく類似して居る。假令ばその裝飾に鳳鸞があり、雲形があり、寶相華の牡丹があり、天井の枳型に牡丹華を配したる

ものがあり、龜甲紋がある。その他北宋(遼)裝飾紋様や圖様の代表的ものが存在して居る。これ等は時代の潮流の然らしめたものと云はねばならぬ。平等院が殊に鳳凰堂と稱し鳳凰を屋上に安置せられたるが如き、いかに時代の標示を表現して居るものではないか。

尙ほ更にその平等院(或は法性寺)等の時代が道長から頼通全盛に及んで居るが、這は遼に



鳳凰圖樣

ても聖宗の終から興宗に及んで居る當時で、北宋では仁宋の時である。彼我互に直接間接の關係があつたことが推知せられる。

我が藤原時代の裝飾紋様が、北宋(遼)

の影響を受けて居るばかりでなく、その繪畫の如きも前章で云つた如くまたその感化影響を受けて居るのである。この點は從來の學説たる藤原時代の藝術や文化は唐と絶縁してから自分に民族化した或特種のものと言ふ事に對して、五代から北宋との關係を尙ほ考へ

直さねばならない。

十

以上で東陵の壁畫の山水・人物・裝飾紋様の三つに就て略記したが、抑もこれ等の壁畫は暗黒なる陵墓内に存在するものである。これ等の壁畫はこれを描くには極めて不便であつて、燈火なくしては容易に出来るものではない。當時どうしても松明のやうな明を用ゐないでは描かれない。さうするとこの描畫には火を點じて明くして仕事をしたものに相違はない。

これは別に書かねばならぬが、陵内の状態を略記すると、木棺(漆を塗つて居る)が安置せられ、その中に死體を納め、その前には數多の木偶が立てられてあつた。その木偶は大分(漢服木偶)である。これ等が棺の入口の方に向つて一列に立てられて居た。木偶は二種類あり、一は漢風の者、一は契丹固有の風をなす者がこれである。棺の周圍には色

色の物が置かれ、中陵・西陵から推すと、墓碑銘もまた置かれてあつたらしい。西陵の例によると、この陵墓の入口の所には、木製の狗と雞が相對して安置せられて居たやうである。

陵内は實に立派な装置で莊嚴を盡したものであるが、これは各室に木戸が閉され、入口の木戸も閉され、更にその上にこの陵墓全體を土で覆うてしまつて居る。この覆土も土を覆ひ、その上からまた小石を破片として土と混じたるものを覆ひ、斯くの如くして幾層にも重覆して、陵墓を封じて居る。さればいかに内部が善を盡し美を盡し莊嚴であるとしても、これを外から窺ふ事は出來ず、それは永遠にその儘に保存せらるゝのである。

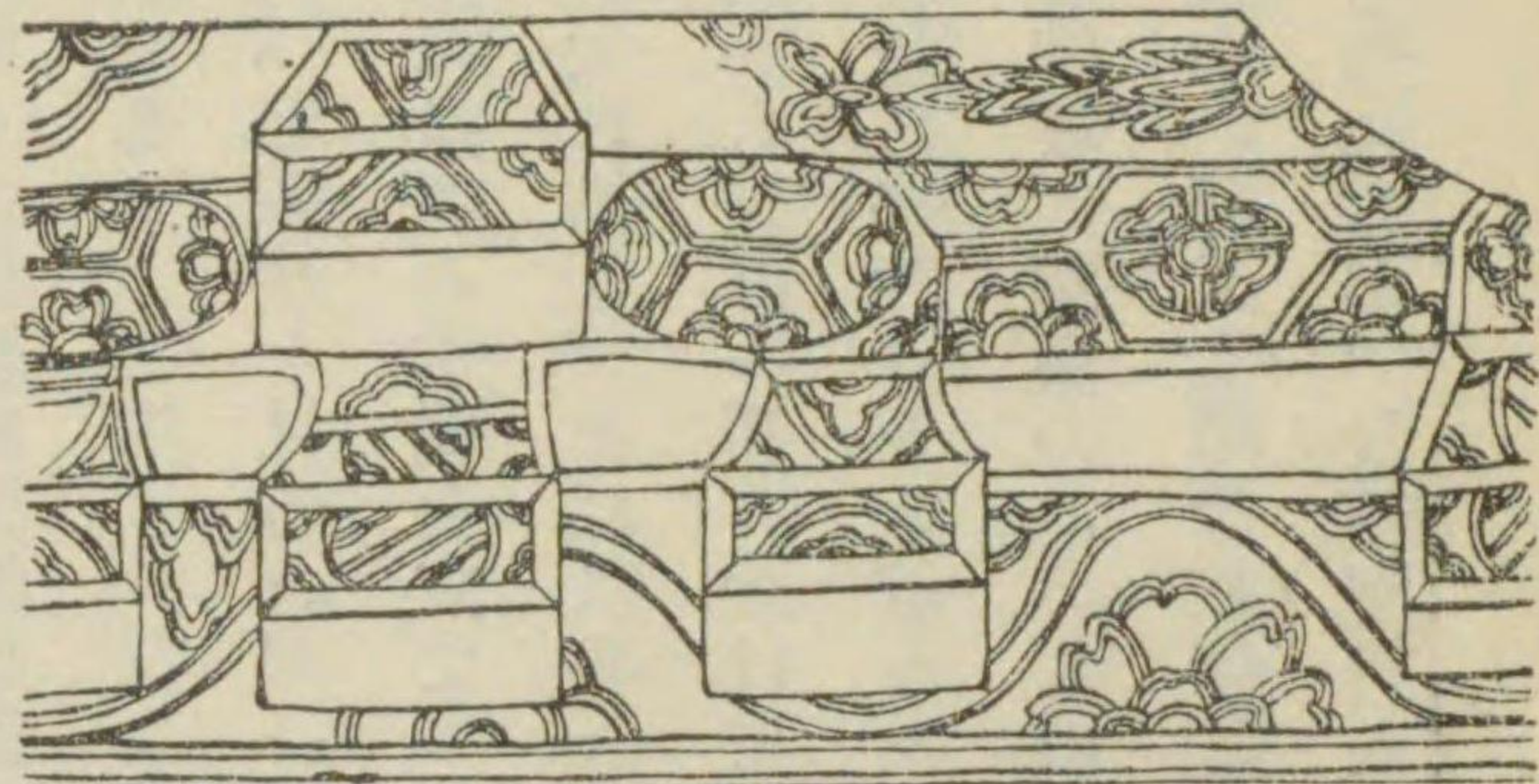
内部には水の出る設備さへしてあつて、若しこの陵墓を發掘せんとする者があれば、戸の開け方によつて陵内が浸水するやうに仕掛けてある。現に中陵・西陵の室内に水の充滿して居る所がある。これ等の装置はいかに彼等が陵墓を永遠に残し置かんとせしかを察することが出來よう。

茲に注意を要すべきは、以上契丹王族の葬式及びその陵墓に於ける、宗教的信仰であ

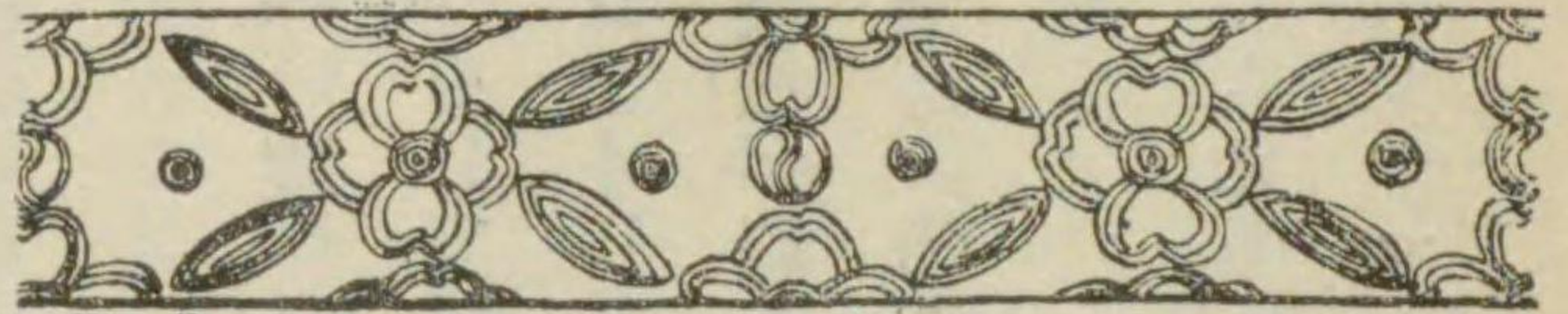
る。これ等の陵墓は東陵(興宗)は固より、中陵(聖宗)・西陵(道宗)とともに一も佛教的色彩の存在する形跡がない。抑も遼歴代の皇帝はいづれも佛教の崇信者であつて、就中この三陵の皇帝に至つては、その最も極端なる保護者・大旦那であつた。然るにこれ等の陵墓が一もその佛教的形跡の認められないのは抑も何が故であるか、這是特に研究せねばならぬ所である。

先づ埋葬法を見ると、一も火葬の跡はなく、陵内に美装して安置せられ、殉死もある。棺前に數多の木偶を立て、居る。そして陵内の各壁には恰かも殉死者にも比すべき人物を等身大に描き、それに各々サインをさして居る。中央の壁には大々の四期の山水畫があり、鴨居から天井一體にかけて裝飾紋様が施されて居るが、それには佛・菩薩・天人・迦陵頻伽等を始め佛教のシムボルたる蓮華等の描かれて居るものはない。いづれも陵内の圖畫・紋様は佛教に關係のないもの許である。

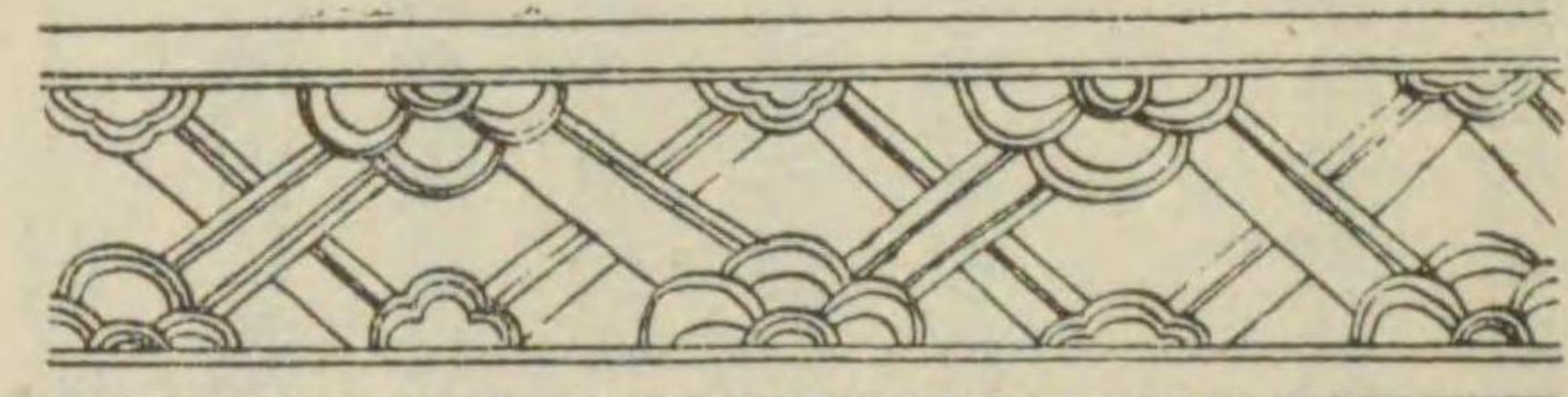
陵内の葬式・圖畫・紋様等の上から見ると、當時の葬式は佛式でない。這是『遼史』等を見ても知れるが、當時契丹人固有のシャーマン教信仰と儒禮との兩者に據つて葬式は營まれ



様紋の軒上チーア面正



紋圓・紋極大・紋丹牡



紋き抜線



(化變のスサンカアは葉)紋丹牡



様紋鸞鳳



様紋華丹牡



紋菱と紋丹牡

たものである。彼等は熱心なる佛教の信者で、而かも僧侶に對しても三寶の一つとして最敬禮を盡したるにも拘はらず、この陵墓葬式に關しては一つも佛教を用ゐないのは、契丹人は當時にあつても尙ほ祖先傳來の信仰を守り、宗教上、死者の場合などに固有の信仰を堅く崇守して居たのである。

三陵の在るワール マンハの山陵は遼代に所謂慶雲山であり、その陵墓は慶陵である。聖宗・興宗・道宗の三靈は固有の宗教的儀式によつて、此處に靜かに安んじて居らるゝのである。

けれども茲に記るさねばならぬのは、中陵即ち聖宗陵の正面から五六町離れた所に、大理石製の陀羅尼幢(八面)・同石製佛幢(八面)が存在する。陀羅尼幢には梵文字の尊勝陀羅尼經(?)を刻したるもの、佛幢は八面に佛・菩薩・佛弟子を刻したもので、その臺石とともに遼代に於ける藝術品である。そしてこの附近に石垣の蹟があり、綠色の瓦・磚・陶磁片等が散亂して居る。

この石幢は聖宗陵に向て彼の冥福を祈る爲めに建てたものと思はれる。さうすると陵内

には佛教的色彩はないとしても、此處に聖宗に向て石幢を手向けて居るのである。斯く考へて來ると、契丹人の佛教に對する信仰とその態度は最も考慮を要するものである。『遼史』によると、聖宗を慶雲山に葬らるゝと共に、その望仙殿を立てられた。この望仙殿はこの遺蹟ではあるまいか。

更に聖宗の崩御と共に陵戸を設置する意味で、慶雲山から三十支里程離れた所に慶州を新に設け、此處に陵墓に向て遙に北望して樓を設け、亦大きな塔を建て、居る。これ等もまた彼等の熱心なる佛教的信仰の表現と云はねばならぬ。

最後に一言したいのは、以上三陵が、いづれも發掘の禍に會うた事である。この發掘は近代に於ては某外人宣教師の支那人を使役してこれを行はしめたのや、また蒙古人のこれをした事や、また昨年熱河の支那人が一ヶ月餘りに涉つてこれの盜掘をした事はこれに關係して居る。彼等は内部の副葬品・石碑から木材等まで取り出して居る。今日陵墓内の亂暴狼藉の状態はまさに彼等の行爲である。

けれども以上陵墓の大々的發掘は、もとは遼を滅亡させた金人であつて、彼等は皇都上

京を攻め陥し、直ちに遼代各帝王の陵墓を發掘破壊したのである。『亡遼錄』・『三朝北盟會編』によると、遼の天慶九年夏に、金人は遼の上京路を攻陥し、祖州の太祖阿保機の天繕堂・懷州の太宗の崇元殿・慶州の望聖・望仙・神儀の三殿その他の殿陵等を焚燒し盡く發掘し、金・銀・珠玉・器物等を獲た云々とあるが、この天慶九年夏に三陵(望聖・望仙・神儀)は彼等の手によつて發掘せられたのである。さうすると、この三陵の始めて災禍に會つたのは實に當時であつた。

私は尙ほ東陵の他の部分や、中陵・(聖宗)西陵(道宗)に就ても記したいのであるが、この項は、他日に延ばし、これにて擱筆する。

以上の陵墓に葬られた興宗その人も、また當時遼朝王族・貴族の一人として繪畫に精通して居たのである。それは『圖書見聞誌』を見ると、その中に『千角鹿圖』として「皇朝興大遼國馳禮于今僅七十載繼好息民之義曠古未有慶曆中其主(號興宗)以五幅縑畫千角鹿圖爲獻有題年月日御畫上命張圖於大清樓下召近臣縱觀次日又敕中閣宣命婦觀之畢藏於天章閣」とある。これを以て見ると、彼興宗は自から五幅の縑に千角鹿圖を畫かれたのである。そし

て後に彼の葬られた陵墓内にまた山水畫中に千角鹿が描かれて居る。そしてこの山水畫がその周圍を表装して居る有様はまた五幅の縑畫と同種類のを模したものらしい。

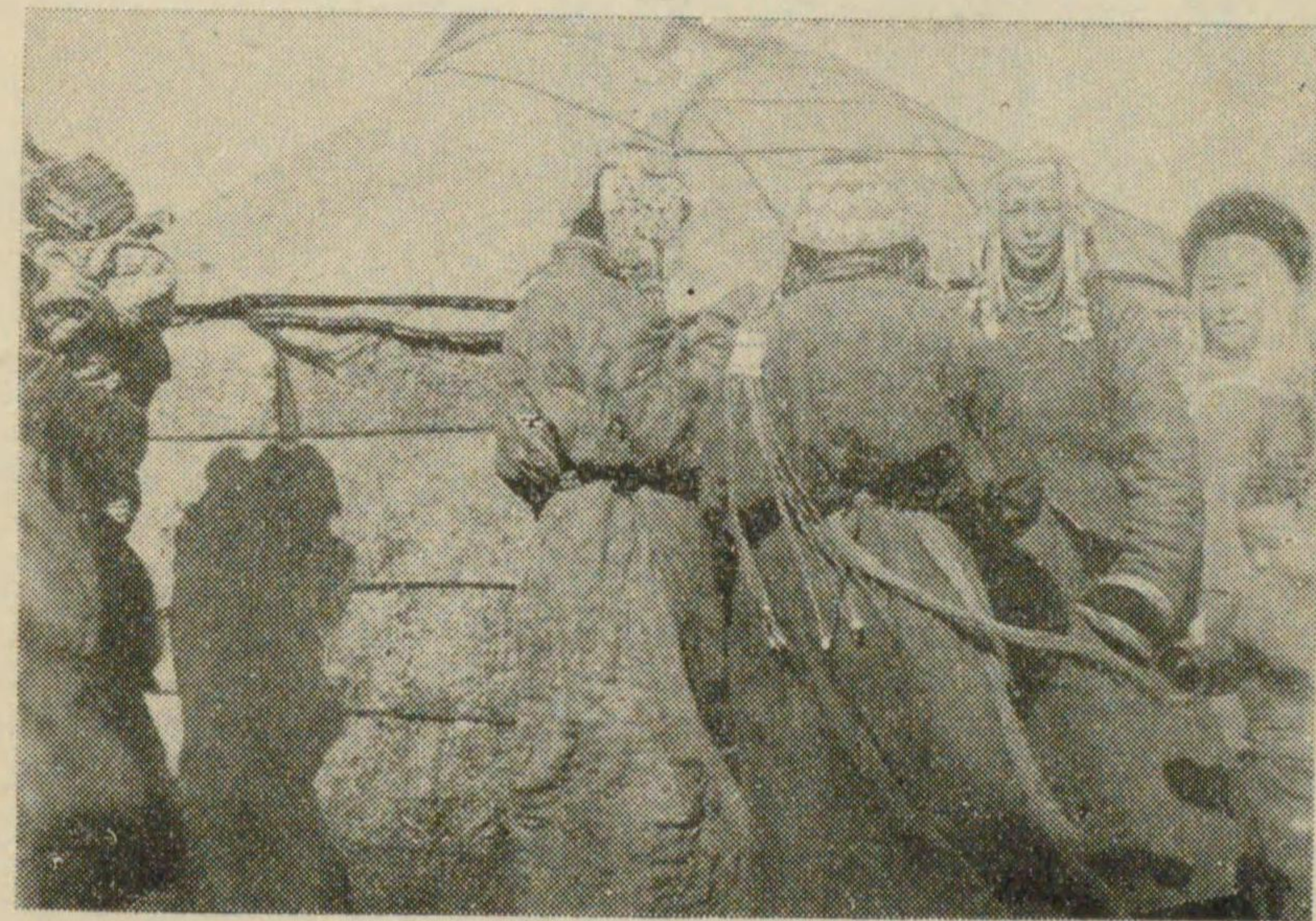
『遼史』によると、聖宗もまた繪をよくせられたその一人で『帝幼喜書十歲能詩既長精射法曉音律好繪畫』とある。尙ほ東丹王も『圖書見聞誌』中に、「……善畫本國人物鞍馬多寫貴人酋長胡服鞍勒率皆珍華然而豐肥筆乏壯氣」とある。兎にも角にも契丹の王族・貴族は五代から北宋にかけて盛んに書畫に勤められたことが知れる。これを以て以上の興宗陵壁畫に對するとその對照に興味がある。

(國華第四十一編第九・十・十一・十二號所載)

二十五年以前の蒙古と今日の蒙古

茲に力説したいのは蒙古の將來である。先づ蒙古問題から述べるが、蒙古の土地はこれを人文地理的に見ると、三つの地帯に分け得る。第一農業地帯・第二半牧半農地帯・第三純牧地帯がこれである。

第一の農業地帯は東蒙古に於てこれを云へば、長城寄り及び滿洲寄りの地方で、この地方は早くより支那に接し、その生活状態は支那化し、生活は農業化した。彼等の蒙古人は牧畜をせず、支那の生活と同じやうに高粱・粟等を植ゑてゐるのである。この地方の蒙古人は、支那人の多い關係上、純粹の蒙古語を話す機會が少いから、支那語を上手に話してゐる。是等の地方は科爾沁・喀喇沁・西翁牛特・敖漢等がこれである。



二十五年以前察爾哈蒙古人

以上の地方が、かく農業化して蒙古の風を失つたのは何故かと云ふと、這はこれ等の地方の各蒙古王が、自分の不毛な土地を開拓し、繁榮させる策として、淋しい土地に支那人を招民して開拓し、その開墾した土地から蒙古王が租税を取たてることによつて、繁榮・經濟の兩方面より利益を得んとしたのである。

招民の支那人は滔々としてこれ等の地に入り來り、その人員は遂に蒙古人より多くなり支那化した。租税のとりたてに就いて支那人と蒙古人との間に大騒動が起り、蒙古人はこの爲苦しめられることが度々あつた。

次に半牧半農の地帯は如何といふに、それは巴林・東翁牛特・阿魯科爾沁・札魯特等であつて、これ等の地方は主として羊・山羊・馬・牛・駱駝等を家畜としてゐる。さうして傍ら蒙古人固有のモンゴル・アムと稱する穀物を植ゑてゐる。このモンゴル・アムは支那人になく、蒙古人特有の穀物であつて、昔から朔北民族の植ゑてゐるものである。これと牧畜の兩方を兼ねてやつてゐるのである。

この地方には支那人の居住が比較的少なかつた。支那人のこの所へ來てゐるのは、王府

或は喇嘛廟の出入商人、或は春から秋まで物品を持つて來て賣捌くといふ様な移動支那人であつた。こんなであるから此處の蒙古人は、生活は豊かで、蒙古人の蒙古であつた。

尙その北の方には純牧の土地がある。烏珠穆沁等の如きがこれである。烏珠穆沁は純牧家畜のみで、外蒙古の車臣汗部等と同じで、家畜を多く持ち、土地は北に位してゐるから支那人の影響を受けることが少ない。

東部内蒙古の蒙古人はかくの如くして、生活をしてゐたのである。

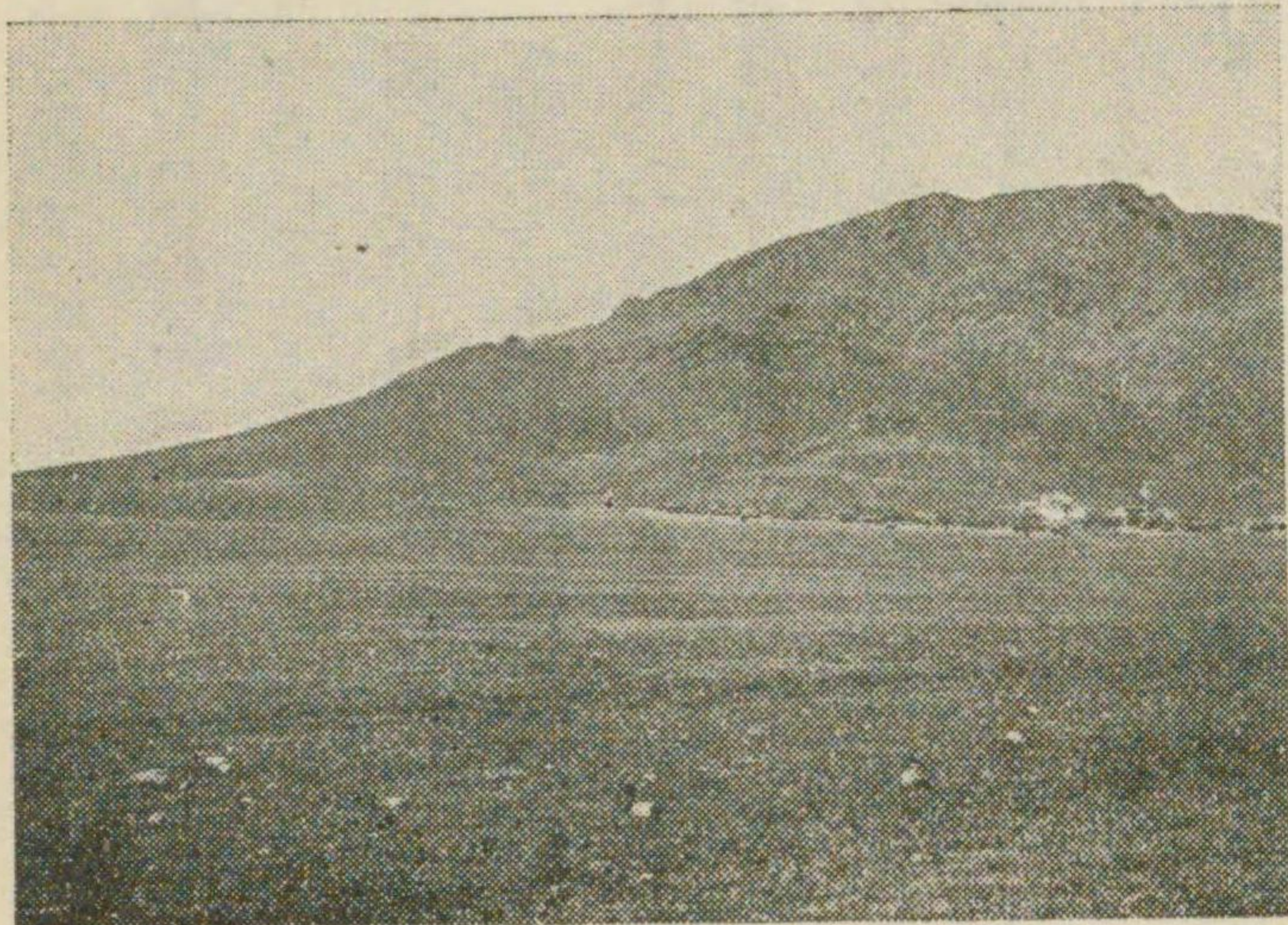
私共が二十五年前に、以上の土地へ行つた時は實にこの状態であつた。然るに二十五年後の今日は如何といふに、滿洲朝の滅亡せんとする最後あたりに、蒙古の土地に、滿洲政府は直接手を加へ、縣を各所に置かんとした。尤もその時には古くから赤峰縣の如きがあつたが、滿洲朝廷滅亡の前年に巴林に縣が出來た。然るに滿洲朝廷が滅亡し、中華民國になつてから、尙この目的を達せんとし、忽ち蒙古の各地に縣を設けた。今日蒙古の各地に支那の縣が出來たのはこの結果である。

清朝の時は蒙古の土地は蒙古王に自治を委ね、租税から生殺の權等、一切蒙古王に委ね

てあつた。さうして蒙古の土地に支那人が居住することすら蒙古王は禁じてゐた（半牧半農・純牧兩地方）。蒙古王は滿洲皇帝に拜謁の爲め毎年一度冬から春にかけて北京に出て行くこととなつてゐた。尤も奥地の蒙古王は必ず毎年の參勤ではなかつた。蒙古は全く清國皇帝に隸屬してゐても、また一方から見ると、蒙古人の國であつた。彼等は何不足なく生活し、喇嘛廟も各王族が檀那となり各所に建てられるといふ様に、蒙古は自治獨立した所であつた。

滿洲朝廷は自治を蒙古王に與へたが、今日縣が出来、知事が任命せられ、巡警局が出来、租税の取立、蒙古は支那人の土地になり、各省の延長の如くになつた。王の勢力は以前より無くなり、役人の勢力は全く失墜した。人民から税をとりたてるものも支那の税となつた。支那の知縣衙門は盛に移住民を獎勵し、そして蒙古の土地を與へてゐるので、今や蒙古は全く中華民國と同一になつた感がある。蒙古固有の牧畜は農業本位となり、支那人の勢力は完全に蒙古人を壓迫した。

今日支那人はこれまで歴史で見る通り、いつも長城以南にあつて、北方民族から掠奪さ



(影撮者著) 景光のの府王林巴小

れてゐたのに反し、今日は支那人が長城を超え、滿洲人のこれまで這入らなかつた蒙古を征服し、蒙古の土地で主権者となつたのは、實に歴史的の一大變化である。支那人の今日の得意や思ふべしである。

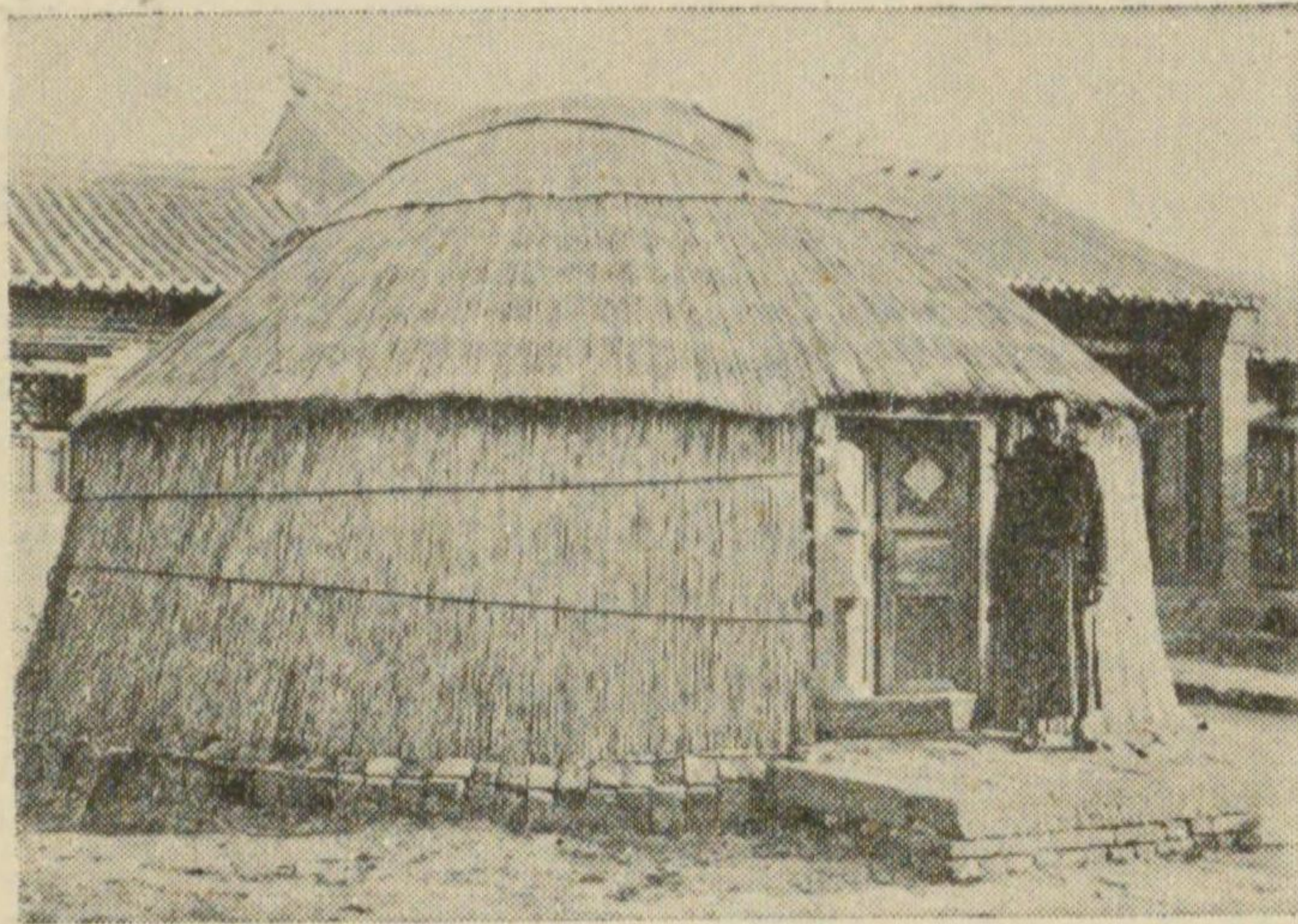
これまで何不自由なく愉快に生活してゐた半牧半農の地は、云はば中華民國政府に服従した。これが早晚純牧の烏珠穆沁等の地域にも入るものと思はれる。東部内蒙古のドロンノール以西北は、察哈爾省・綏遠省の延長となり、支那人の壓迫を受けてゐる。蒙古人はただでさへ生活に困つてゐるから縣が出来てからは殊に支那人の壓迫を受けて困窮してゐる。蒙古人は支那人から金を借りても返せないから、土地を取られ、牛馬を取られる。かくして彼等の生活は行き詰つて行く。

一蒙古人は密かに云ふ、「かく壓迫せられて、我等は如何になすべきであらうか。日本は援けて呉れず、露西亞に頼るのみである。露西亞に従へば外蒙古の様な運命になるであらう」と。

翻つて外蒙古を見ると如何。

私共が二十五年前に歩いた時は質朴で、純朴で、家畜は多く、蒙古人として得意の生活をしてゐた。彼等は南の蒙古人（内蒙古）に對して嘲笑してゐたが、彼等は今やソビエト聯邦社會主義共和國に關係し、蒙古の喇嘛は撤せられ、蒙古王の勢力は失せ、役人の勢力は落ちて、今日は羊飼・奴隸階級の蒙古人等は多く政府の執行委員となり、勞農政府革命の歌を作りかつ歌つてゐる。外蒙古はプリアートモンゴルと關係し、勞農露西亞と握手し今や立派なソビエト主義の下に生活してゐる。外蒙古は斯ういふ状態であつて、内蒙古も一步誤れば同じ運命になるのである。這はよく戒心しなければならぬ所である。

かくして考へると、將來の蒙古問題は早晩これが滿洲延いては朝鮮と關係し、どういふことになるか、これ等は大いに研究しなければならぬ問題である。



(影撮者著) 人古蒙るけ於に内府爺公沁爾科增阿

近時奉天を中心とする遼寧政府は滿洲に遼寧省(前の奉天省)・吉林省・黑龍江省三つの省が滿洲である。東北政府或は東北四省は更にその西に察哈爾省を設けてゐるが、これを加へれば五省ともなる。その西には綏遠省も設けてゐる。

かく誌して來ると、今日蒙古と稱する所は無くなつてゐる。東北政府用人の言を借りて云へば、「滿蒙なる名稱は中華民國に存在して居らぬ。また蒙古の名も自然に亡くなつた。東北方と呼び、東北方四省と呼ぶべきである。」是等は滿洲・蒙古と區別することは出來ぬ。

今日の滿蒙は東北四省の聯結であつて、以前と

滿蒙の風俗と生活

る探び再を蒙滿

大に相違して來た。是等の地方に於ける學術研究もまた最も考慮すべきものであらねばならぬ。

滿鐵沿線だけを汽車の窓から見た計りではあるが、見渡すかぎり高粱畑の續いて居るのにおどろかされる。之が爲に夏から秋にかけて沿線を離れて奥地に進むことは非常に危険である。それは人の丈以上に延びた高粱畑を利用して馬賊が切りに出沒する爲であつて、秋の終り高粱を刈入れて遠方まで見通しがきくまで、旅行者は大に警戒しなければならぬ。高粱は此邊の主なる農作物で此外には玉蜀黍・大豆・粟・蕎麥・罌粟・麻などを栽培して居る。其外近來は水田が多くなつて來た様に思はれる。主に朝鮮人が之に當り米を作つて居る中流以上の家庭では米食が多くなつたと云ふ。米は滿鐵沿線に住む日本人の内には此滿洲米を食して居る人も多い。色は黒いが味はよいと思つた。



大蒙林巴古中國移民住の供子